特65
224
C2
0507

明治廿四年十二月出版

萬國六法

大坂
寶文館發兌

日本帝國六法目錄

○憲法
○法例
○民法
○商法
○民事訴訟法
○刑法
○刑事訴訟法

日本電法

憲法發布勅語

朕國家ノ隆昌ト臣民ノ慶福トヲ以テ中心ノ欣榮トシ朕カ祖宗ニ承クルノ大權ニ依リ現在及將來ノ臣民ニ對シ此ノ不磨ノ大典ヲ宣布ス

惟フニ我カ祖我カ宗ハ我カ臣民祖先ノ協力輔翼ニ倚リ我カ帝國ヲ肇造シ以テ無窮ニ垂レタリ此レ我カ神聖ナル祖宗ノ威德ト竝ニ臣民ノ忠實勇武ニシテ國ヲ愛シ公ニ殉ヒ以テ此ノ光輝アル國史ノ成跡ヲ貽シタルナリ朕我カ臣民ハ即チ祖宗ノ忠良ナル臣民ノ子孫ナルヲ回想シ其ノ朕カ意ヲ奉體シ朕カ事ヲ奬順シ相與ニ和衷協同シ益々我カ帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚シ祖宗ノ遺業ヲ永久ニ鞏固ナラシムルノ希望ヲ同クシ此ノ負擔ヲ分ツニ堪フルコトヲ疑ハサルナリ

帝國憲法

朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ萬世一系ノ帝位ヲ踐ミ朕カ親愛スル所ノ臣民ハ即チ朕カ祖宗ノ惠撫慈養シタマヒシ所ノ臣民ナルヲ念ヒ其康福ヲ增進シ其懿德良能ヲ發達セシメムコトヲ願ヒ又其ノ翼贊ニ依リ與ニ俱ニ國家ノ進運ヲ扶持セムコトヲ望ミ乃チ明治十四年十月十二日ノ詔命ヲ履踐シ茲ニ大憲ヲ制定シ朕カ率由スル所ヲ示シ朕カ後嗣及臣民及臣民ノ子孫タル者ヲシテ永遠ニ循行スル所ヲ知ラシム

國家統治ノ大權ハ朕カ之ヲ祖宗ニ承ケテ之ヲ子孫ニ傳フル所ナリ朕及朕カ子孫ハ將來此ノ憲法ノ條章ニ循ヒ之ヲ行フコトヲ愆ラサルヘシ

朕ハ我カ臣民ノ權利及財產ノ安全ヲ貴重シ及之ヲ保護シ此ノ憲法及法律ノ範圍內ニ於テ其ノ享有ヲ完全

ナラシムヘキコトヲ宣言ス

帝國議會ハ明治二十三年ヲ以テ之ヲ召募シ議會開會ノ時ヲ以テ此ノ憲法ヲシテ有効ナラシムルノ期トスヘシ

將來若此ノ憲法ノ或ル條章ヲ改定スルノ必要ナル時宜ヲ見ルニ至ラハ朕及朕カ繼統ノ子孫ハ發議ノ權ヲ執リ之ヲ議會ニ付シ議會ハ此ノ憲法ニ定メタル要件ニ依リ之ヲ議決スルノ外朕カ子孫及臣民ハ敢テ之カ紛更ヲ試ミルコトヲ得サルヘシ

朕カ在廷ノ大臣ハ朕カ爲ニ此ノ憲法ヲ施行スルノ責ニ任スヘク朕カ現在及將來ノ臣民ハ此ノ憲法ニ對シ永遠ニ從順ノ義務ヲ負フヘシ

御名御璽

○憲法發布勅語

明治二十二年二月十一日

内閣總理大臣　伯爵　黑田清隆
樞密院議長　伯爵　伊藤博文
外務大臣　伯爵　大隈重信
海軍大臣　伯爵　西鄕從道
農商務大臣　伯爵　井上馨
司法大臣　伯爵　山田顯義
大藏大臣兼內務大臣　伯爵　松方正義
陸軍大臣　伯爵　大山巖
文部大臣　子爵　森有禮
遞信大臣　子爵　榎本武揚

大日本帝國憲法目錄

第一章　天皇
第二章　臣民權利義務
第三章　帝國議會
第四章　國務大臣及樞密顧問
第五章　司法
第六章　會計
第七章　補則

目錄畢

一二四七全八十

丁丁丁丁丁丁丁

大日本帝國憲法

第一章　天皇

第一條　大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス

第二條　皇位ハ皇室典範ノ定ムル所ニ依リ皇男子孫之ヲ繼承ス

第三條　天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス

第四條　天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ此憲法ノ條規ニ依リ之ヲ行フ

第五條　天皇ハ帝國議會ノ協贊ヲ以テ立法權ヲ行フ

第六條　天皇ハ法律ヲ裁可シ其公布及ヒ執行ヲ命ス

第七條　天皇ハ帝國議會ヲ召集シ其開會閉會停會及ヒ衆議院ノ解散ヲ命ス

第八條　天皇ハ公共ノ安全ヲ保持シ又ハ其災厄ヲ避クル爲メ緊急ノ必要ニ由リ帝國議會閉會ノ場合ニ於テ法律ニ代ルヘキ勅令ヲ發ス

此勅令ハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出スヘシ若シ議會ニ於テ承諾セサルトキハ政府ハ將來ニ向テ其効力ヲ失フコトヲ公布スヘシ

第九條　天皇ハ法律ヲ執行スル爲メニ又ハ公共ノ安寧秩序ヲ保持シ及ヒ臣民ノ幸福ヲ增進スル爲ニ必要ナル場合ヲ爲シ又ハ發セシム

但命令ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得ス

第十條　天皇ハ行政各部ノ官制及ヒ文武官ノ俸給ヲ定メ及ヒ文武官ヲ任免ス但此憲法又ハ他ノ法律ニ特例ヲ掲ケタルモノハ各其條項ニ依ル

第十一條　天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス

第十二條　天皇ハ陸海軍ノ編制及ヒ常備兵額ヲ定ム

第十三條　天皇ハ戰ヲ宣シ和ヲ講シ及ヒ諸般ノ條約ヲ締結ス

第十四條　天皇ハ戒嚴ヲ宣告ス

戒嚴ノ要件及ヒ効力ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第十五條　天皇ハ爵位勳章及ヒ其他ノ榮典ヲ授與ス

第十六條　天皇ハ大赦特赦減刑及復權ヲ命ス

第十七條　攝政ヲ置クハ皇室典範ノ定ムル所ニ依ル

攝政ハ天皇ノ名ニ於テ大權ヲ行フ

第二章　臣民權利義務

第十八條　日本臣民タルノ要件ハ法律ノ定ムル所ニ依ル

第十九條　日本臣民ハ法律命令ノ定ムル所ノ資格ニ應シ均シク文武官ニ任セラレ及ヒ其他ノ公務ニ就クコトヲ得

第二十條　日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ兵役ノ義務ヲ有ス

第二十一條　日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ納稅ノ義務ヲ有ス

第二十二條　日本臣民ハ法律ノ範圍內ニ於テ居住及ヒ移轉ノ自由ヲ有ス

第二十三條　日本臣民ハ法律ニ依ルニアラスシテ逮捕監禁審問處罰ヲ受クルコトナシ

第二十四條　日本臣民ハ法律ニ定メタル裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權ヲ奪ハルヽコトナシ

第二十五條　日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外其許諾ナクシテ住所ニ侵入セラレ及ヒ搜索セラルヽコトナシ

第二十六條　日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外信書ノ秘密ヲ侵サルヽコトナシ

第二十七條　日本臣民ハ其所有權ヲ侵サルヽコトナシ

公益ノ爲メ必要ナル處分ハ法律ノ定ムル所ニ依ル

第二十八條　日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及ヒ臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス

第二十九條　日本臣民ハ法律ノ範圍內ニ於テ言論著作印行集會及ヒ

結社ノ自由ヲ有ス

第三十條　日本臣民ハ相當ノ敬禮ヲ守リ別ニ定ムル所ノ規定ニ從ヒ請願ヲ爲スコトヲ得

第三十一條　本章ニ揭ケタル條規ハ戰時又ハ國家事變ノ場合ニ於テ天皇大權ノ施行ヲ妨クルコトナシ

第三十二條　本章ニ揭ケタル條規ハ陸海軍ノ法令又ハ紀律ニ牴觸セサルモノニ限リ軍人ニ準行ス

第三章　帝國議會

第三十三條　帝國議會ハ貴族院衆議院ノ兩院ヲ以テ成立ス

第三十四條　貴族院ハ貴族院令ノ定ムル所ニ依リ皇族華族及ヒ勅任セラレタル議員ヲ以テ組織ス

第三十五條　衆議院ハ選擧法ノ定ムル所ニ依リ公選セラレタル議員ヲ以テ組織ス

第三十六條　何人モ同時ニ兩議院ノ議員タルコトヲ得ス

第三十七條　凡テ法律ハ帝國議會ノ協贊ヲ經ルヲ要ス

第三十八條　兩議院ハ政府ノ提出スル法律案ヲ議決シ及各〻法律案ヲ提出スルコトヲ得

第三十九條　兩議院ノ一ニ於テ否決シタル法律案ハ同會期中ニ於テ再ヒ提出スルコトヲ得ス

第四十條　兩議院ハ法律又ハ其ノ他ノ事件ニ付各〻其ノ意見ヲ政府ニ建議スルコトヲ得但シ其ノ採納ヲ得サルモノハ同會期中ニ於テ再ヒ建議スルコトヲ得ス

第四十一條　帝國議會ハ毎年之ヲ召集ス

第四十二條　帝國議會ハ三箇月ヲ以テ會期トス必要アル場合ニ於テハ勅命ヲ以テ之ヲ延長スルコトアルヘシ

第四十三條　臨時緊急ノ必要アル場合ニ於テ常會ノ外臨時會ヲ召集スヘシ

臨時會ノ會期ヲ定ムルハ勅命ニ依ル

第四十四條　帝國議會ノ開會閉會會期ノ延長及ヒ停會ハ兩院同時ニ之ヲ行フヘシ

衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ貴族院ハ同時ニ停會セラルヘシ

第四十五條　衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ勅命ヲ以テ新ニ議員ヲ選擧セシメ解散ノ日ヨリ五箇月以内ニ之ヲ召集スヘシ

第四十六條　兩議院ハ各〻其ノ總議員三分ノ一以上出席スルニ非サ

レハ議事ヲ開キ議決ヲ爲スコトヲ得ス

第四十七條　兩議院ノ議事ハ過半數ヲ以テ決ス可否同數ナル時ハ議長ノ決スル所ニ依ル

第四十八條　兩議院ノ會議ハ公開ス但政府ノ要求又ハ其ノ院ノ決議ニ依リ秘密會ト爲スコトヲ得

第四十九條　兩議院ハ各〻天皇ニ上奏スルコトヲ得

第五十條　兩議院ハ臣民ヨリ呈出スル請願書ヲ受クルコトヲ得

第五十一條　兩議院ハ此憲法及ヒ議院法ニ揭クルモノヽ外內部ノ整理ニ必要ナル諸規則ヲ定ムルコトヲ得

第五十二條　兩議院ノ議員ハ議院ニ於テ發言シタル意見及ヒ表決ニ付キ院外ニ於テ責ヲ負フコトナシ但議員自ラ其言論ヲ演說刊行筆記又ハ其他ノ方法ヲ以テ公布シタルトキハ一ノ法律ニ依リ處分セラルヘシ

第五十三條　兩議院ノ議員ハ現行犯罪又ハ內亂外患ニ關ル罪ヲ除ク外會期中其院ノ許諾ナクシテ逮捕セラルヽコトナシ

第五十四條　國務大臣及政府委員ハ何時タリトモ各議院ニ出席シ及ヒ發言スルコトヲ得

第四章　國務大臣及樞密顧問

第五十五條　國務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其責ニ任ス

凡テ法律勅令其他國務ニ關ル詔勅ハ國務大臣ノ副署ヲ要ス

第五十六條　樞密顧問ハ樞密院官制ノ定ムル所ニ依リ天皇ノ諮詢ニ應ヘ重要ノ國務ヲ審議ス

第五章　司法

第五十七條　司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フ裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第五十八條　裁判官ハ法律ニ定メタル資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ任ス

裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルノ外其職　免セラルヽコトナシ

懲戒ノ條規ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第五十九條　裁判ノ對審判決ハ之ヲ公開ス但安寧秩　又ハ風俗ヲ害スルノ虞アルトキハ法律ニ依リ又ハ裁判所ノ決議ヲ以テ對審ノ公開ヲ停ムルコトヲ得

第六十條　特別裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ

定ム

第六十一條　行政官廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ傷害セラレタリトスルノ訴訟ニシテ別ニ法律ヲ以テ定メタル行政裁判所ノ裁判ニ屬スヘキモノハ司法裁判所ニ於テ受理スルノ限ニ在ラス

第六章　會計

第六十二條　新ニ租稅ヲ課シ及ヒ稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

但報償ニ屬スル行政上ノ手數料及ヒ其他ノ收納金ハ前項ノ限ニ在ラス

國債ヲ起シ及ヒ豫算ニ定メタルモノヲ除ク外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スハ帝國議會ノ協贊ヲ經ヘシ

第六十三條　現行ノ租稅ハ更ニ法律ヲ以テ之ヲ改メサル限ハ舊ニ依リ之ヲ徵收ス

第六十四條　國家ノ歲出歲入ハ每年豫算ヲ以テ帝國議會ノ協贊ヲ經ヘシ

豫算ノ款項ニ超過シ又ハ豫算ノ外ニ生シタル支出アルトキハ後日帝國議會ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス

第六十五條　豫算ハ前ニ衆議院ニ提出スヘシ

第六十六條　皇室經費ハ現在ノ定額ニ依リ每年國庫ヨリ之ヲ支出シ將來增額ヲ要スル場合ヲ除ク外帝國議會ノ協贊ヲ要セス

第六十七條　憲法上ノ大權ニ基ツケル既定ノ歲出及法律ノ結果ニ由リ又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歲出ハ政府ノ同意ナクシテ帝國議會之ヲ廢除シ又ハ削減スルコトヲ得ス

第六十八條　特別ノ須要ニ因リ政府ハ豫メ年限ヲ定メ繼續費トシテ帝國議會ノ協贊ヲ求ムルコトヲ得

第六十九條　避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フ爲メニ又ハ豫算ノ外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツル爲ニ豫算費ヲ設クヘシ

第七十條　公共ノ安全ヲ保持スル爲メ緊急ノ需用アル場合ニ於テ內外ノ情形ニ因リ政府ハ帝國議會ヲ召集スルコト能ハサルトキハ勅令ニ依リ財政上必要ノ處分ヲ爲スコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出シ其承諾ヲ求ムルヲ要ス

第七十一條　帝國議會ニ於テ豫算ヲ議定セス又ハ豫算成立ニ至ラサルトキハ政府ハ前年度ノ豫算ヲ施行スヘシ

第七十二條　國家ノ歳出歳入ノ決算ハ會計檢査院之ヲ檢査確定シ政府ハ其檢査報告ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

會計檢査院ノ組織及職權ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第七章　補則

第七十三條　將來此憲法ノ條項ヲ改正スルノ必要アルトキハ勅令ヲ以テ議案ヲ帝國議會ノ議ニ付スヘシ

此場合ニ於テ兩議院ハ各其總員三分ノ二以上出席スルニアラサレハ議事ヲ開クコトヲ得ス出席議員三分ノ二以上ノ多數ヲ得ルニアラサレハ改正ノ議決ヲ爲スコトヲ得ス

第七十四條　皇室典範ノ改正ハ帝國議會ノ議ヲ經ルヲ要セス

皇室典範ヲ以テ此憲法ノ條規ヲ變更スルコトヲ得ス

第七十五條　憲法及ヒ皇室典範ハ摂政ヲ置クノ間之ヲ變更スルコトヲ得ス

第七十六條　法律規則命令又ハ何等ノ名稱ヲ用ヰタルニ拘ラス此憲法ニ矛盾セサル現行ノ法令ハ總テ遵由ノ効力ヲ有ス

歳出上政府ノ義務ニ係ル現在ノ契約又ハ命令ハ總テ第六十七條ノ例ニ依ル

日本民法

第七十二條　國家ノ歳出歳入ノ決算ハ會計檢査院之ヲ檢査確定シ政府ハ其檢査報告ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

會計檢査院ノ組織及職權ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第七章　補則

第七十三條　將來此憲法ノ條項ヲ改正スルノ必要アルトキハ勅命ヲ以テ議案ヲ帝國議會ノ議ニ付スヘシ

此場合ニ於テ両議院ハ各其總員三分ノ二以上出席スルニアラサレハ議事ヲ開クコトヲ得ス出席議員三分ノ二以上ノ多數ヲ得ルニアラサレハ改正ノ議決ヲ爲スコトヲ得ス

第七十四條　皇室典範ノ改正ハ帝國議會ノ議ヲ經ルヲ要セス

皇室典範ヲ以テ此憲法ノ條規ヲ變更スルコトヲ得ス

第七十五條　憲法及ヒ皇室典範ハ摂政ヲ置クノ間之ヲ變更スルコトヲ得ス

第七十六條　法律規則命令又ハ何等ノ名稱ヲ用ヰタルニ拘ラス此憲法ニ矛盾セサル現行ノ法令ハ總テ遵由ノ効力ヲ有ス

歳出上政府ノ義務ニ係ル現在ノ契約又ハ命令ハ總テ第六十七條ノ例ニ依ル

日本憲法

朕法例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御名御璽

明治二十三年十月六日

内閣總理大臣伯爵山縣有朋
内務大臣伯爵西鄕從道
司法大臣伯爵山田顯義
大藏大臣伯爵松方正義
陸軍大臣伯爵大山巖
遞信大臣伯爵後藤象二郎
外務大臣子爵青木周藏
海軍大臣子爵樺山資紀
文部大臣芳川顯正
農商務大臣陸奥宗光

法例

第一條　法律ハ公布アリタル日ヨリ滿二十日ノ後ハ之ヲ遵守ス可キモノトス但法律ニ特別ノ規定アルモノハ此限ニ在ラス

第二條　法律ハ既往ニ遡ル効力ヲ有セス

第三條　人ノ身分及ヒ能力ハ其本國法ニ從フ

親屬ノ關係及ヒ其關係ヨリ生スル權利義務ニ付テモ亦同シ

第四條　動産、不動産ハ其所在地ノ法律ニ從フ

然レトモ相續及ヒ遺贈ニ付テハ被相續人及ヒ遺贈者ノ本國法ニ從フ

第五條　外國ニ於テ爲シタル合意ニ付テハ當事者ノ明示又ハ默示ノ意思ニ從ヒテ何レノ國ノ法律ヲ適用ス可キヤヲ定ム

當事者ノ意思分明ナラサル場合ニ於テハ同國人ナルトキハ其本國法ヲ適用シ又同國人ニ非サルトキハ事實上合意ニ最大ノ關係ヲ有スル地ノ法律ヲ適用ス

第六條　外國人カ日本ニ於テ日本人ト合意ヲ爲ストキハ外國人ノ能力ニ付テハ其本國法ト日本法トノ中ニテ合意ノ成立ニ最モ有益ナル法律ヲ適用ス

第七條　不當ノ利得、不正ノ損害及ヒ法律上ノ管理ハ其原因ノ生シタル地ノ法律ニ從フ

第八條　本國法ヲ適用ス可キ諸般ノ場合ニ於テ何レノ國民分限ヲモ有セサル者又ハ地方ニ依リ法律ヲ異ニスル國ノ人民ハ其住所ノ法律ニ從フ若シ住所知レサルトキハ其居所ノ法律ニ從フ

日本人ト外國人トノ分限ヲ有スル者ハ日本法律ニ從ヒ又二箇以上ノ外國國民分限ヲ有スル者ハ最後ニ之ヲ取得シタル國ノ法律ニ從フ

第九條　公正證書及ヒ私署證書ノ方式ハ之ヲ作ル國ノ法律ニ從フ但一人又ハ同國人ナル數人ノ作ル私署證書ニ付テハ其本國法ニ從フコトヲ得

第十條　要式ノ合意又ハ行爲ト雖モ之ヲ爲ス國ノ方式ニ從フトキハ方式上有効トス但故意ヲ以テ日本法律ヲ脱シタルトキハ此限ニ在ラス

第十一條　外國ニ於テ其國ノ方式ニ依リテ作リタル證書ハ不動産物權ヲ移轉スル行爲ニ係ルトキハ其不動産所在地ノ地方裁判所長又他ノ行爲ニ係ルトキハ當事者ノ住所又ハ居所ノ地方裁判所長其證

書ノ適法ナルコトヲ檢認シタル上ニ非サレハ日本ニ於テ其効用ヲ致サシムルコトヲ得ス

第十二條　第三者ノ利益ノ爲メニ設定スル公示ノ方式ハ不動産ニ係ルトキハ其所在地ノ法律、他ノ場合ニ於テハ其原因ノ生シタル國ノ法律ニ從フ

第十三條　訴訟手續ハ其訴訟ヲ爲ス國ノ法律ニ從フ

裁判及ヒ合意ノ執行方法ハ其執行ヲ爲ス國ノ法律ニ從フ

第十四條　刑罰法其他公法ノ事項ニ關シ及ヒ公ノ秩序又ハ善良ナル風俗ニ關スルトキハ行爲ノ地當事者ノ國民分限及ヒ財産ノ性質ノ如何ヲ問ハス日本法律ヲ適用ス

第十五條　公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ關スル法律ニ牴觸シ又ハ其適用ヲ免カレントスル合意又ハ行爲ハ不成立トス

第十六條　身分又ハ能力ヲ規定スル法律ヲ免カルル合意又ハ行爲ハ無効トス

第十七條　判事ハ法律ニ不明、不備又ハ欠缺アルヲ口實トシテ裁判ヲ爲スヲ拒絶スルコトヲ得ス

人事編目錄

第一章　私權ノ享有及ヒ行使　一

第二章　國民分限　二

第一節　國民分限ノ取得　全

第二節　國民分限ノ喪失及ヒ回復　三

第三節　國民分限變更ノ方式及ヒ効力　四

第三章　親屬及ヒ姻屬　五

第四章　婚姻　七

第一節　婚姻ヲ爲スニ必要ナル條件　九

第二節　婚姻ノ儀式　全

第三節　日本人外國ニ於テ爲シ及ヒ外國人日本ニ於テ爲ス婚姻　十

第四節　婚姻成立ノ證據　十

第五節　婚姻ノ不成立及ヒ無効　全

第六節　婚姻ノ効力　十

第七節　罰則　十

第五章　離婚　全

○民法○人事編目錄　一

第一節　協議ノ離婚　二十七丁
第二節　特定原因ノ離婚　二十八丁
第一款　離婚及ヒ不受理ノ原因　二十九丁
第二款　假處分　二十丁
第三款　離婚ノ訴　二十丁
第三節　離婚ノ効力　二十一丁
第六章　親子　二十一丁
第一節　親子ノ分限ノ證據　二十二丁
第二節　否認訴權　二十二丁
第三節　庶子及ヒ私生子ノ適出子ト爲ル權　二十三丁
第七章　養子縁組　二十四丁
第一節　養子縁組ニ必要ナル條件　二十四丁
第二節　養子縁組ノ儀式　二十五丁
第三節　養子縁組ノ證據　二十六丁
第四節　養子縁組ノ不成立及ヒ無効　二十六丁
第五節　養子縁組ノ効力　二十六丁
第六節　罰則　二十七丁

第八章　養子ノ離縁　三十一丁
第一節　協議ノ離縁　三十二丁
第二節　特定原因ノ離縁　三十三丁
第三節　離縁ノ効力　三十四丁
第九章　親權　三十五丁
第一節　子ノ身上ニ對スル權　三十五丁
第二節　子ノ財産ノ管理　三十六丁
第三節　嫡母、繼父及ヒ繼母ニ特別ナル規則　三十七丁
第十章　後見　三十八丁
總則　三十九丁
第一節　後見人　四十丁
第二節　後見監督人　四十丁
第三節　親族會　四十丁
第四節　後見ノ免除　四十丁
第五節　後見人及ヒ親族會員ノ缺格、除斥及ヒ罷黜　四十丁
第六節　後見人ノ管理　四十丁

第七節　後見監督人ノ任務　四十四丁
第八節　後見ノ終了　四十五丁
第九節　後見ノ計算　仝
第十一章　自治産　四十七丁
第十二章　禁治産　四十九丁
第一節　民事上禁治産　仝
第二節　准禁治産　五十一丁
第三節　刑事上禁治産　五十二丁
第四節　癲癇者ノ財産ノ假管理　仝
第十三章　戸主及ヒ家族　五十三丁
第十四章　住所　五十六丁
第十五章　失踪　五十七丁
第一節　失踪ノ推定　五十九丁
第二節　失踪ノ宣言　六十一丁
第三節　失踪宣言ノ効力　六十二丁
第四節　失踪ノ推定及ヒ宣言ニ關スル通則　仝
第五節　不在者ニ關スル規則　六十六丁
第十六章　身分ニ關スル證書　六十二丁

目錄畢

○民法○人事編目錄

民法

人事編

第一章　私權ノ享有及ヒ行使

第一條　凡ソ人ハ私權ヲ享有シ法律ニ定メタル無能力者ニ非サル限リハ自ラ其私權ヲ行使スルコトヲ得

第二條　胎內ノ子ト雖モ其利益ヲ保護スルニ付テハ既ニ生マレタル者ト看做ス

第三條　私權ノ行使ニ關スル成年ハ滿二十年トス但法律ニ特別ノ規定アルトキハ此限ニ在ラス

第四條　外國人ハ法律又ハ條約ニ禁止アルモノヲ除ク外私權ヲ享有ス

第五條　法人ハ公私ヲ問ハス法律ノ認許スルニ非サレハ成立スルコトヲ得ス又法律ノ規定ニ從フニ非サレハ私權ヲ享有スルコトヲ得ス

第六條　法律ハ外國法人ノ成立ヲ認許セス但條約又ハ特許アルトキハ此限ニ在ラス

成立ノ認許ヲ得タル外國法人ハ日本ニ成立スル同種ノ者ト同一ノ

私權ヲ享有ス但條約中又ハ特許中ニ其權利ヲ制限シタルトキハ此限ニ在ラス

第二章　國民分限

第一節　國民分限ノ取得

第七條　日本人ノ子ハ外國ニ於テ生マレタルトキト雖モ日本人トス父母分限ヲ異ニスルトキハ父ノ分限ヲ以テ子ノ分限ヲ定ム父ノ知レサルトキハ子ハ母ノ分限ニ從フ父母共ニ知レサルトキハ日本ニ於テ生マレタル子ハ日本人トス若シ其出生地ノ知レサルトキハ現ニ日本國内ニ在ル者ハ日本人トス

第八條　左ノ場合中ノ一ニ在ル子ハ日本人ノ分限ヲ選擇スルコトヲ得

第一　父カ外國人タルモ母ノ日本人タルトキ

第二　外國人ノ子タルモ日本ニ生マレタルトキ

第三　日本人ノ分限ヲ失ヒタル者ノ子ニシテ其分限喪失ノ後ニ生マレタル者ナルトキ

第四　歸化ノ子ニシテ成年者ナルトキ

第九條　日本人ノ分限ヲ選擇セント欲スル子ハ本國法律ニ從ヒテ成年ニ至リシ時ヨリ一ヶ年内ニ其意思ヲ申述シ且其申述ヨリ一ヶ年内ニ住所ヲ日本ニ定ムル可シ

成年ノ後ニ至リテ外國人ノ認知シタル私出子ハ認知ヨリ又歸化人ノ子ハ歸化ヨリ一ヶ年内ニ右ノ申述ヲ爲スコトヲ得

第十條　日本人ト婚姻スル外國ノ女ハ日本人ノ分限ヲ取得シ婚姻解消ノ後ト雖モ其分限ヲ保有ス

第十一條　外國人ハ歸化ニ因リテ日本人ノ分限ヲ取得スルコトヲ得其條件及ヒ方式ハ特別法ヲ以テ之ヲ規定ス

歸化人ノ婦及ヒ未成年ノ子ハ日本ニ住居ヲ定メタルトキハ日本人ノ分限ヲ取得ス

第二節　國民分限ノ喪失及ヒ回復

第十二條　日本人ハ左ノ場合ニ於テ其分限ヲ失フ

第一　任意ニ外國人ノ分限ヲ取得シタルトキ

第二　日本政府ノ允許ナクシテ外國政府ノ官職ヲ受ケ又ハ外國ノ軍隊ニ入リタルトキ

第十三條　前條ノ場合ニ於テ日本人ノ分限ヲ失ヒタル者其分限ヲ回復セントスルトキハ日本政府ノ允許ヲ得タル上歸國シテ其意思

ヲ申述シ且一ヶ年内ニ住所ヲ日本ニ定ムルトキハ其分限ヲ回復ス

第十四條　日本人ノ分限ヲ失ヒタル者ノ婦及ヒ未成年ノ子ハ引續キ日本ニ住居スルニ非サレハ日本人ノ分限ヲ失フ但婦ハ第十五條第二項ノ規定ニ從ヒ又未成年ノ子ハ第九條第一項ノ規定ニ從ヒ其分限ヲ回復スルコトヲ得

第十五條　外國人ト婚姻スル日本ノ女ハ日本人ノ分限ヲ失フ

然レトモ婚姻解消ノ後日本ニ住居シ又ハ復歸シ且日本ニ住所ヲ定ムルコトヲ申述スルトキハ其分限ヲ回復ス

第三節　國民分限變更ノ方式及ヒ効力

第十六條　國民分限ノ變更ニ關スル申述ハ日本ニ在リテハ住居地ノ身分取扱吏ニ外國ニ在リテハ日本公使館又ハ日本領事館ニ之ヲ爲スコトヲ得ス可シ

此申述ハ部理代理人ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第十七條　國民分限ノ變更ハ將來ニ非サレハ其効力ヲ生セス

第十八條　國民分限ハ出生ノ時ヲ以テ之ヲ定ム然レトモ懷胎ヨリ出生マテノ間父又ハ母ノ分限ニ變更アリタルトキハ子ハ日本ニ住居スル場合ニ限リ日本人ノ分限ヲ保有ス

第三章　親屬及ヒ姻屬

第十九條　親屬トハ血統ノ相聯結スル者ノ關係ヲ謂フ

六親等ノ外ハ親屬ノ關係アルモ民法上ノ効力ヲ生セス

第二十條　親屬ノ遠近ハ世數ヲ以テ之ヲ定メ一世ヲ以テ一親等トス

親等ノ連續スルヲ親系ト爲ス彼ヨリ此ニ直下スル者ノ親系ヲ直系ト謂ヒ其直下セスシテ同始祖ニ出ツル者ノ親系ヲ傍系ト謂フ

直系ニ於テ自己ノ出ツル所ノ親族ヲ尊屬親ト謂ヒ自己ヨリ出ツル所ノ親族ヲ卑屬親ト謂フ

第二十一條　直系ニ於テハ親族ノ世數ヲ算シテ親等ヲ定ム

傍系ニ於テハ親族ノ一人ヨリ同始祖ニ遡リ又其始祖ヨリ他ノ一人ニ下タル其間ノ世數ヲ算シテ親等ヲ定ム

第二十二條　養子縁組ハ養子ト養父母及ヒ其親族トノ間ニ親屬ニ同シキ關係ヲ生ス但養子トハ男女ヲ總稱ス

第二十三條　嫡母、繼父又ハ繼母ト其配偶者ノ子トノ關係ハ親子ニ準ス

第二十四條　姻屬トハ婚姻ニ因リテ夫婦ノ一方ト其配偶者ノ親族ヲ

ノ間ニ生スル關係ヲ云フ
然レトモ婦ノ夫家ニ於ケル又入夫ノ婦家ニ於ケル尊屬親トノ關係ハ親屬ニ準ス

第二十五條　夫婦ノ一方ノ親族ハ其親系及ヒ親等ニ於テ配偶者ノ姻族トス

姻屬ノ關係ハ婚姻無効ノ判決又ハ離婚ニ因リテ止ム又生存配偶者其家ヲ去ルニ因リテ止ム

第二十六條　直系ノ親族ハ相互ニ養料ヲ給スル義務ヲ負擔ス
嫡母、繼父又ハ繼母ト其配偶者ノ子トノ間及ヒ婦又ハ入夫ト夫家又ハ婦家ノ尊屬親トノ間モ亦同シ

第二十七條　兄弟姉妹ノ間ニハ疾病其他本人ノ責ニ歸セサル事故ニ因リテ自ラ生活スル能ハサル場合ニ限リ相互ニ養料ヲ給スル義務アリ

第二十八條　養料ノ義務ヲ負擔ス可キ者ノ順位ハ左ノ如シ
第一　第二十六條ニ掲ケタル者
第二　兄弟姉妹
直系ノ親屬ノ間ハ其親等ノ最モ近キ者養料ノ義務ヲ負擔ス

第二十九條　養料ハ之ヲ受ク可キ者ノ必需ト之ヲ給ス可キ者ノ資産トニ應シテ其額ヲ定ム

第四章　婚姻

第一節　婚姻ヲ爲スニ必要ナル條件

第三十條　男ハ滿十七年女ハ滿十五年ニ至ラサレハ婚姻ヲ爲スコトヲ得ス

第三十一條　配偶者アル者ハ重ネテ婚姻ヲ爲スコトヲ得ス

第三十二條　夫ノ失踪ニ原因スル離婚ノ場合ヲ除ク外女ハ前婚解消ノ後六ヶ月內ニ再婚ヲ爲スコトヲ得ス
此制禁ハ其分娩シタル日ヨリ止ム

第三十三條　姦通ノ原因ニ由リテ離婚ノ裁判ヲ言渡サレタル曲者ハ相姦者ト婚姻ヲ爲スコトヲ得ス

第三十四條　直系ニ於テハ尊屬親ト卑屬親トノ間婚姻ヲ禁ス

第三十五條　傍系ニ於テハ兄弟姉妹及ヒ伯叔父姑甥姪ノ間婚姻ヲ禁ス

第三十六條　直系ノ姻族ノ間ハ其關係ノ止ミタル後ト雖モ婚姻ヲ禁ス

第三十七條　養子ト養父母又ハ其尊屬親トノ間及ヒ養父母又ハ其尊屬親ト養子ノ配偶者又ハ其卑屬親トノ間ハ離縁ノ後ト雖モ婚姻ヲ禁ス

第三十八條　子ハ父母ノ許諾ヲ受クルニ非サレハ婚姻ヲ爲スコトヲ得ス

父母ノ一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ノ許諾ヲ以テ足ル

繼父又ハ繼母アル場合ニ於テ其配偶者タル母又ハ父ノ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ繼父又ハ繼母ノ許諾ヲ受クル可シ其許諾ニ付テ第九章第三節ノ規定ヲ適用ス

第三十九條　父母共ニ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ其家ノ祖父母ノ許諾ヲ受クル可シ

祖父母ノ一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ノ許諾ヲ以テ足ル

第四十條　父母、祖父母悉ク死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ滿二十年ニ至ラサル者ニ限リ後見人ノ許諾ヲ受クル可シ

第四十一條　父母ノ知レサル子ハ二十年未滿ニ限リ後見人ノ許諾ヲ受クル可シ

第四十二條　育兒院ニ在リテ父母ノ知レサル子ノ婚姻ハ二十年未滿ニ限リ院長ノ許諾ヲ受クル可シ

第二節　婚姻ノ儀式

第四十三條　婚姻ノ儀式ハ當事者ノ一方ノ住所又ハ居所ノ地ニ於テ之ヲ行フ可シ

雙方ハ婚姻ノ儀式ヲ行フ前ニ其地ノ身分取扱吏ニ婚姻ヲ爲サントスル申出ヲ爲スコトヲ要ス但此申出ハ代理人ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第四十四條　雙方ハ前條ノ申出ヲ爲ス時ニ於テ左ノ書類ヲ差出ス可シ

第一　出生證書

第二　前婚ノ解消ヲ證スル證書

第三　婚姻ニ必要ナル許諾又ハ其許諾書ヲ得ル能ハサル事由ヲ證スル書類

第四十五條　雙方又ハ一方カ出生證書ヲ呈示スル能ハサルトキハ出生地、住所又ハ居所ノ區裁判所ノ授付シタル保證書ヲ以テ出生證

書ニ代用スルコトヲ得

保證書ハ男女ヲ問ハス又親族ト否トヲ問ハス證人二人カ左ノ諸件ニ付キ區裁判所ニ爲シタル申述ヲ記載ス

第一　本人ノ氏名、職業、住所及ヒ居所並ニ其父母分明ナルトキハ其氏名、職業、住所及ヒ居所

第二　本人ノ出生ノ地及ヒ年月日

第三　本人ノ出生證書ヲ呈示スル能ハサル原因及ヒ證人ノ其事實ヲ聞知シタル緣由

第四十六條　身分取扱吏ハ婚姻ノ儀式ヲ行フ障碍ト爲ル可キ法律上ノ原因アルコトヲ知リタルトキハ其儀式ヲ行フヿヲ差止ム可シ

此場合ニ於テハ身分取扱吏ハ理由ヲ記シタル差止書ヲ授付ス可シ

當事者此差止ヲ不當ナリト思料スルトキハ區裁判所ニ抗告シテ其取消ヲ求ムルコトヲ得

裁判所ハ休暇事件ト同シク之ヲ取扱フ可シ

第四十七條　婚姻ハ證人二人ノ立會ヲ得テ慣習ニ從ヒ其儀式ヲ行フヿニ因リテ成ル

當事者ノ承諾ハ此儀式ヲ行フヿニ因リテ成立ス

第四十八條　婚姻ノ儀式ハ其申出ノ日ヨリ三日後三十日內ニ之ヲ行フコトヲ要ス

第四十九條　婚姻ノ儀式ヲ行ヒタルトキハ雙方ヨリ十日內ニ身分取扱吏ニ其屆出ヲ爲ス可シ但此屆出ハ代理人ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第三節　日本人外國ニ於テ爲シ及ヒ外國人日本ニ於テ爲ス婚姻

第五十條　外國ニ於テ日本人ノ間又ハ日本人ト外國人トノ間ニ婚姻ヲ爲ストキハ其國ノ規則ニ從ヒテ儀式ヲ行フコトヲ得但本章第一節ニ定メタル條件ニ違背セサルコトヲ要ス

第五十一條　外國ニ於テ日本人ノ間ニ日本ノ規則ニ從ヒテ婚姻ヲ爲ストキハ其國ニ在ル日本公使館又ハ日本領事館ニ婚姻ノ申出ヲ爲スコトヲ要ス

婚姻ノ儀式ヲ行ヒタルトキハ第四十九條ノ規定ニ從ヒテ其屆出ヲ爲ス可シ

第五十二條　日本ニ於テ外國人カ婚姻ヲ爲サントスルトキハ其能力ハ本國ノ法律ニ從フ但第三十一條乃至第三十七條ノ條件ニ違背セ

サルコトヲ要ス

外國人ハ婚姻ノ申出ヲ爲ス時ニ於テ婚姻ヲ爲スニ障碍ナキコトヲ證スル本國相當官署ノ認定書ヲ差出タス可シ

第四節　婚姻成立ノ證據

第五十三條　婚姻成立ノ證據ハ婚姻證書ヲ以テ之ヲ擧ク可シ但第二百九十一條ニ規定スルモノハ此限ニ在ラス

第五十四條　婚姻證書ヲ增減シ毀棄シ隱匿シ又ハ片紙ニ記載シタル場合ニ於テ刑事又ハ民事ノ訴訟ニ因リテ婚姻ノ成立ヲ認メタル判決ハ之ヲ婚姻證書ニ代用スルコトヲ得

第五節　婚姻ノ不成立及ヒ無効

第五十五條　人違、喪心、又ハ强暴ニ因リテ雙方又ハ一方ノ承諾ノ全ク欠缺シタル婚姻ハ不成立トス

第三十四條乃至第三十七條ノ規定ニ違ヒテ爲シタル婚姻モ亦不成立トス

婚姻ノ不成立ハ何人ニ限ラス何時ニテモ之ヲ申立ツルコトヲ得

第五十六條　第三十條第三十一條及ヒ第三十三條ノ規定ニ違ヒテ婚姻ヲ爲シタルトキハ雙方、尊屬親又ハ現實ノ利益ヲ有スル者ヨリ何時ニテモ其無効ヲ請求スルコトヲ得

右同一ノ場合ニ於テ檢事ハ夫婦ノ生存中ニ限リ職權ヲ以テ婚姻ノ無効ヲ請求スルコトヲ得

第五十七條　不適齡ニ付キ無効ヲ請求スル權利ハ左ノ場合ニ於テ消滅ス

第一　適齡ナラサリシ者カ適齡ニ至レル後明示ニテ婚姻ヲ認諾シ又ハ三ヶ月ヲ過キタルトキ

第二　無効ノ請求後ト雖モ婦カ適齡ナラスシテ懷胎シタルトキ

第三　夫カ適齡ナラスシテ婦ノ懷胎シタルトキ但婦ノ姦通ヲ證スルトキハ格別ナリトス

第五十八條　重婚ニ原因スル婚姻無効ノ請求アリタル場合ニ於テ後婚ノ雙方カ前婚ノ不成立、無効又ハ離婚ヲ主張スルトキハ先ツ其裁判ヲ爲ス可シ

前婚ノ配偶者カ失踪シタルトキハ其失踪中ハ重婚ノ無効訴權ヲ行フコトヲ得ス

第五十九條　左ノ場合ニ於テハ婚姻ハ無効トス

第一　身分取扱吏ニ婚姻ノ申出ヲ爲サス又ハ其差止ヲ受ケタル

ニ拘ハラス儀式ヲ行ヒタルトキ

第二　身分取扱吏ノ管轄違ナルトキ

第三　第四十八條ノ規定ニ違ヒテ儀式ヲ行ヒタルトキ

第四　證人二人ノ立會ナクシテ儀式ヲ行ヒタルトキ

此無効ハ第五十六條ニ掲ケタル者ヨリ之ヲ請求スルコトヲ得但婚姻儀式後一个年ヲ過キタルトキハ無効訴權ヲ行フコトヲ得ス

第六十條　第三十八條乃至第四十二條ニ定メタル許諾ナクシテ婚姻ヲ爲シタルトキハ其許諾ヲ與フ可キ者又ハ之ヲ受ク可キ者ヨリ其無効ヲ請求スルコトヲ得

許諾アリタル場合ト雖モ其許諾カ强暴ニ原因シタルトキモ亦同シ

第六十一條　前條ノ場合ニ於テ婚姻ノ許諾ヲ與フ可キ者カ婚姻ヲ認諾セスシテ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ法律ニ定メタル順位ニ從ヒテ其許諾ヲ與フ可キ者ハ無効訴權ヲ行フコトヲ得

第六十二條　第六十條ニ掲ケタル無効訴權ハ左ノ場合ニ於テ消滅ス

第一　婚姻ノ許諾ヲ與フ可キ者カ認諾ヲ爲シ又ハ婚姻アリタルコトヲ知リシ後三个月ヲ過キタルトキ

第二　三个月内ト雖モ許諾ヲ受ク可キ者カ婚姻上ノ成年ニ至リ又ハ死亡シタルトキ

第六十三條　强暴ニ因リテ承諾ニ瑕疵アル婚姻ノ無効ハ强暴ヲ受ケタル者ニ限リ之ヲ請求スルコトヲ得

第六十四條　前條ノ場合ニ於テ配偶者强暴ヲ免カレタル後明示ニテ認諾シ又ハ三个月間引續キ同居シタルトキ婚姻ノ無効ヲ請求スルコトヲ得ス其同居セサル場合ニ於テモ無効訴權ハ一个年ヲ以テ消滅ス

第六十五條　裁判所ハ婚姻ノ不成立又ハ無効ノ訴訟中夫婦ノ一方ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ婦又ハ夫ニ住家ヲ去ル可キヲ命スルコトヲ得

第六十六條　無効ノ言渡アリタル婚姻ハ爾後ナルヲ問ハス法律上ノ効力ヲ生ス

第六節　婚姻ノ効力

第六十七條　婚姻ハ其儀式ヲ行ヒタル日ヨリ効力ヲ生ス但夫婦財産契約ニ付テハ婚姻ノ屆出後ニ非サレハ第三者ニ對シテ婚姻ノ効力ヲ援用スルコトヲ得ス

第六十八條　婦ハ夫ノ許可ヲ得ルニ非サレハ贈與ヲ爲シ之ヲ受諾シ

不動産ヲ讓渡シ之ヲ擔保ニ供シ借財ヲ爲シ債權ヲ讓渡シ之ヲ質入シ元本ヲ領收シ保證ヲ約シ及ヒ身體ニ羈絆ヲ受クル約束ヲ爲スコトヲ得ス又和解ヲ爲シ仲裁ヲ受ケ及ヒ訴訟ヲ起スコトヲ得ス

第六十九條　夫ノ許可ハ特定又ハ總括ナルコトヲ得但總括ノ許可ハ證書ヲ以テ之ヲ與フルコトヲ要ス

夫ハ夫婦財産契約ニ依リテ取ヘタル總括ノ許可ト雖モ之ヲ廢罷スルコトヲ得

第七十條　左ノ場合ニ於テハ婦ハ夫ノ許可ヲ得ルコトヲ要セス

第一　夫カ失踪ノ推定ヲ受ケタルトキ

第二　夫カ禁治産又ハ准禁治産ヲ受ケタルトキ

第三　夫カ癲癇ノ爲メ病院又ハ監護ニ在ルトキ

第七十一條　夫ハ婦ニ與ヘタル許可ニ因リテ義務ヲ負擔セス

第七十二條　夫ノ許可ヲ得スシテ婦ノ爲シタル行爲ハ之ヲ銷除スルコトヲ得

此銷除ハ夫婦ノ各自及ヒ婦ノ承繼人ニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第七十三條　夫ニ屬スル銷除訴權ハ其銷除シ得ヘキ行爲ヲ知リタル日ヨリ五个年ノ時効ニ因リ又ハ婚姻ノ解消ニ因リテ消滅ス

婦及ヒ其承繼人ニ屬スル銷除訴權ハ婚姻解消ノ日ヨリ五个年ノ時効ニ因リテ消滅ス

財産編第五百四十四條以下ノ規定ハ本條ノ銷除訴權ニ之ヲ適用ス

第七節　罰則

第七十四條　婚姻申出ノ時ニ必要ノ書類ヲ差出タサシメサル身分取扱吏ハ二圓以上二十圓以下ノ過料ニ處ス

第七十五條　婚姻ノ不成立又ハ無効タル可キ法律上ノ原因アルヲ知リテ其儀式ヲ行フコトヲ差止メサル身分取扱吏ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第七十六條　第三十二條ノ制禁ニ違背シテ再婚ヲ爲シタル婦ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス其情ヲ知リテ婚姻ヲ爲シタル夫及ヒ婚姻ノ儀式ヲ行フコトヲ差止メサル身分取扱吏モ亦同シ

第七十七條　夫婦ノ一方ニシテ婚姻ノ無効ヲ致シタル原因ヲ知リ之ヲ他ノ一方ニ隱祕シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五章　離婚

第一節　協議ノ離婚

第七十八條　夫婦ハ[illegible]ニ定メタル條件及ヒ方式ニ從ヒ協議ヲ以テ離婚ヲ爲スコトヲ得

第七十九條　離婚セントスル夫婦ハ婚姻許諾ノ爲メ第四章第一節ニ定メタル規則ニ從ヒ各其父母祖父母又ハ後見人ノ許諾ヲ受クルコトヲ要ス

第八十條　夫婦ハ離婚協議書ニ左ノ書類ヲ添ヘテ身分取扱吏ニ屆出ツ可シ

第一　婚姻證書

第二　離婚ノ許諾ヲ與フ可キ者ノ許諾書若シ其者死亡シ又ハ意思ヲ表スル能ハサルトキハ死亡證書又ハ其事由ヲ證スル書類

第二節　特定原因ノ離婚

第一款　離婚及ヒ不受理ノ原因

第八十一條　離婚ハ左ノ原因アルニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第一　姦通但夫ノ姦通ハ刑ニ處セラレタル場合ニ限ル

第二　同居ニ堪ヘサル暴虐、脅迫及ヒ重大ノ侮辱

第三　重罪ニ因レル處刑

第四　竊盜、詐欺取財又ハ猥褻ノ罪ニ因レル重禁錮一年以上ノ處刑

第五　惡意ノ遺棄

第六　失踪ノ宣言

第七　婦又ハ入夫ヨリ其家ノ尊屬親ニ對シ又ハ尊屬親ヨリ婦又ハ入夫ニ對スル暴虐、脅迫及ヒ重大ノ侮辱

第八十二條　離婚ノ請求ヲ爲ス一方ニ對シテ離婚ノ原因存スルトキハ他ノ一方モ反訴ヲ以テ離婚ヲ請求スルコトヲ得

然レトモ前條第三號及ヒ第四號ニ記載スル重罪又ハ輕罪ノ刑ニ處セラレタル一方ハ他ノ一方ノ處刑ヲ原因トシテ離婚ヲ請求スルコトヲ得ス

第二款　假處分

第八十三條　離婚ノ訴訟中子ノ監護ハ原告又ハ被告タルヲ問ハス夫ニ屬ス但入夫及ヒ婿養子ニ付テハ婦ニ屬ス

然レトモ裁判所ハ夫、婦、親族又ハ檢事ノ請求ニ因リ子ノ利益ヲ慮リテ其監護ヲ他ノ一方又ハ第三者ニ命スルコトヲ得

第八十四條　離婚ノ訴訟中婦ハ原告又ハ被告タルヲ問ハス裁判所ノ

許可ヲ得テ住家ヲ去ルコトヲ得此場合ニ於テハ自己ノ衣服其他ノ日用物品ヲ持去リ且必要アルトキハ養料ヲ請求スルコトヲ得

裁判所ハ夫ノ意見ヲ聽キテ婦ノ移居ス可キ家屋ヲ指示スルコトヲ要ス若シ婦カ正當ノ理由ナクシテ其家屋ヲ去ルトキハ夫ハ養料ヲ拒ムコトヲ得

第八十五條　入夫及ヒ婿養子ニ付テハ裁判所ハ離婚ノ訴訟中夫ヲシテ住家ヲ去ラシムルコトヲ得此場合ニ於テハ前條第一項ノ規定ヲ適用ス

第八十六條　裁判所ハ住家ヲ去ル婦又ハ夫ノ請求ニ因リ其財産ヲ保存スル爲メニ必要ナル處分ヲ命スルコトヲ得

第三款　離婚ノ訴

第八十七條　離婚ヲ請求スル訴權ハ夫婦ノミニ屬ス

第八十八條　離婚ノ原因ハ通常ノ證據方法ヲ以テ之ヲ證ス可シ但自白ノミヲ以テ之ヲ證スルコトヲ得ス又身屬親ヲ除ク外親族、姻族又ハ雇人ニ關スル忌避ノ規定ヲ適用セス

第三節　離婚ノ効力

第八十九條　離婚ハ其屆出又ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ効力ヲ生セ

第九十條　離婚ノ後子ノ監護ハ夫ニ屬ス但入夫及ヒ婿養子ニ付テハ婦ニ屬ス

然レトモ裁判所ハ夫、婦、親族又ハ檢事ノ請求ニ因リ子ノ利益ヲ慮リテ之ヲ他ノ一方又ハ第三者ノ監護ニ付スルコトヲ得

第六章　親子

第一節　親子ノ分限ノ證據

第九十一條　婚姻中ニ懐胎シタル子ハ夫ノ子トス

婚姻ノ儀式ヨリ百八十日後又ハ夫ノ死亡若クハ離婚ヨリ三百日内ニ生マレタル子ハ婚姻中ニ懐胎シタルモノト推定ス

第九十二條　嫡出子ハ出生證書ヲ以テ之ヲ證ス

第九十三條　出生證書ヲ呈示スル能ハサルトキハ親子ノ分限ハ嫡出子タル身分ノ占有ヲ以テ之ヲ證スルコトヲ得但第二百九十一條ノ規定ノ適用ヲ妨ケス

第九十四條　身分ノ占有トハ夫婦ト其婚姻ニ因リテ生マレタリト主張スル者トノ間其者ノ出生ノ時ヨリ親子ノ分限ヲ證スルニ足ル可キ事實ノ湊合スルヲ謂フ其事實ノ著明ナルモノ左ノ如シ

第一　子ナリト主張スル者カ常ニ其父ナリトスル者ノ氏ヲ稱シタルコト

第二　子ナリト主張スル者カ常ニ其父母ナリトスル者ヨリ嫡出子ノ如ク取扱ハレ其養育、教育ヲ受ケタルコト

第三　子ナリト主張スル者カ常ニ親族及ヒ世上ニ於テ嫡出子ト認メラレタルコト

第九十五條　庶子ハ父ノ屆出ニ基ク出生證書ヲ以テ之ヲ證ス但身分ノ占有ニ關スル規定ヲ適用ス

第九十六條　父ノ知レサル子ハ私生子トス

第九十七條　私生子ハ出生證書ヲ以テ之ヲ證ス但身分ノ占有ニ關スル規定ヲ適用ス

第九十八條　私生子ハ父之ヲ認知スルニ因リテ庶子ト爲ル

第九十九條　庶子ノ出生屆及ヒ認知ハ父自ラ身分取扱吏ニ之ヲ爲スコトヲ要ス未成年者ト雖モ自ラ之ヲ爲スコトヲ得

第二節　否認訴權

第百條　否認訴權ハ夫ノミニ屬ス但子ノ出生後ニ非サレハ之ヲ行フコトヲ得ス

第百一條　夫カ民事上ノ禁治產ヲ受ケタルトキハ後見人又ハ後見監督人ハ親族會ノ許可ヲ得テ否認訴權ヲ行フコトヲ得

第百二條　夫カ子ノ出生ノ場所ニ在ルトキハ出生ヨリ三ヶ月ノ期間內ニ限リ否認訴權ヲ行フコトヲ得但夫カ婦ト住家ヲ異ニシ又ハ婦カ子ノ出生ヲ夫ニ隱祕シタルトキハ此期間ハ子ノ出生ヲ知リタル日ヨリ起算ス

若シ夫カ遠隔ノ地ニ在ルトキハ訴權ノ期間ヲ四ヶ月トシ子ノ出生ヲ知リタル日ヨリ起算ス

第三節　庶子及ヒ私生子ノ嫡出子ト爲ル權

第百三條　庶子ハ父母ノ婚姻ニ因リテ嫡出子ト爲ル

私生子ハ父母ノ婚姻ノ後父ノ認知シタルニ因リテ嫡出子ト爲ル

第百四條　死亡シタル子ト雖モ前條ノ規定ニ依リ嫡出子ト爲ル此場合ニ於テハ其効力ハ子ノ生ミタル子ヲ利ス

第百五條　父母ノ婚姻ノ時マテニ父子ノ分限確定シタル者ハ婚姻ノ日ヨリ又婚姻ノ後ニ確定シタル者ハ確定ノ日ヨリ嫡出子ノ權利ヲ有ス

第七章　親子關係

第一節　養子縁組ニ必要ナル條件

第百六條　何人ト雖モ養子ト爲ル可キ者ヨリ年長ニシテ成年ナルニ非サレハ養子ヲ爲スコトヲ得ス

遺言ヲ爲ス能力アル者ハ遺言養子ヲ爲スコトヲ得ス

第百七條　家督相續ヲ爲ス可キ男子アル者ハ養子ヲ爲スコトヲ得ス

第百八條　後見人ハ管理ノ計算ヲ爲ササル前ニ被後見人ヲ養子ト爲スコトヲ得ス但遺言養子ト爲スハ此限ニ在ラス

第百九條　戸主ニ非サル者ハ養子ヲ爲スコトヲ得ス但推定家督相續人ニシテ戸主ノ許諾ヲ得タル者ハ此限ニ在ラス

第百十條　配偶者アル者ハ其配偶者ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ養子ヲ爲スコトヲ得ス但配偶者カ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ此限ニ在ラス

配偶者アル者ハ其配偶者ト一致スルニ非サレハ養子ト爲ルコトヲ得ス

第百十一條　家督相續ニ因リテ戸主ト爲リタル者ハ他人ノ養子ト爲ルコトヲ得ス

又推定家督相續人ハ他人ノ養子ト爲ルコトヲ得ス

然レトモ分家ヨリ本家ヲ承繼スル必要アルトキハ本條ノ規定ヲ適用セス

第百十二條　外國人ハ日本人ノ養子ト爲ルコトヲ得ス

第二節　養子縁組ノ儀式

第百十三條　養子縁組ハ當事者ノ承諾ニ因リテ成ル

此承諾ハ證人二人ノ立會ヲ得テ慣習ニ從ヒ縁組ノ儀式ヲ行フニ因リテ成立ス

縁組ノ儀式ヲ行フニ付テハ第四十三條、第四十六條及ヒ第四十八條ノ規定ヲ適用ス

第百十四條　當事者ハ身分取扱吏ニ縁組ノ申出ヲ爲ス時ニ於テ左ノ書類ヲ差出タス可シ

第一　養子ヲ爲ス者及ヒ養子ト爲ル者ノ出生證書又ハ之ニ代用スル保證書

第二　家督相續ヲ爲ス可キ男子ナキコトヲ證スル身分取扱吏ノ認定書又ハ推定家督相續人廢除ノ證書

第三　配偶者ノ承諾書又ハ承諾ヲ得ル能ハサル事由ヲ證スル書類

第四　後見管理ノ計算ヲ爲シタル證明書
第五　縁組ニ必要ナル許諾書又ハ許諾ヲ得ル能ハサル事由ヲ證スル書類

第百十五條　滿十五年ニ至ラサル子ノ縁組ハ父母之ヲ承諾スルコトヲ得

父母ノ一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ニ依テ縁組ヲ承諾スルコトヲ得

父母共ニ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ其家ノ祖父母若シ其一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ニ依テ縁組ヲ承諾スルコトヲ得

第百十六條　滿十五年ニ至リタル者ハ父母ノ許諾ヲ受ケ縁組ヲ承諾スルコトヲ得

父母ノ一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ノ許諾ヲ以テ足ル

父母共ニ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ其家ノ祖父母ノ許諾ヲ受ク可シ若シ祖父母ノ一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ノ許諾ヲ以テ足ル

第百十七條　父母、祖父母悉ク死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ二十年未滿ノ者ニ限リ前二條ニ定メタル年齢ノ區別ニ從ヒテ後見人之ヲ承諾シ又ハ其許諾ヲ與フ

第百十八條　私生子ノ養子縁組ニ付テハ母之ヲ承諾シ又ハ其許諾ヲ與フ

父母ノ知レサル子ニ付テハ前條ノ規定ヲ適用ス

第百十九條　前數條ノ場合ニ於テ繼父又ハ繼母アルトキハ第三十八條第三項ノ規定ヲ適用ス

第百二十條　育兒院ニ在リテ父母ノ知レサル子ノ縁組ハ二十年未滿ニ限リ第百十五條及ヒ第百十六條ニ定メタル年齢ノ區別ニ從ヒテ院長之ヲ承諾シ又ハ其許諾ヲ與フルコトヲ得

第百二十一條　婿養子縁組ニ付テハ婚姻ノ申出ヲ爲ス時ニ於テ當事者ハ婿養子縁組ヲ爲スノ意思ヲ身分取扱吏ニ申出ツ可シ

此縁組ニ必要ナル條件ノ欠缺スルトキハ身分取扱吏ハ婚姻ノ儀式ヲ差止ムルコトヲ得

此縁組ハ婚姻ノ儀式ヲ行フニ因リテ成ル

第百二十二條　遺言養子縁組ハ遺言書ヲ以テ之ヲ爲ス

此遺言ハ養子ヲ爲ス者ノ死亡ノ日ニ家督相續ヲ爲ス可キ卑屬親アルトキハ其効ヲ失フ

第百二十三條　遺言養子ヲ爲ス者ノ死亡シタルトキハ第百十五條以下ノ規定ニ從ヒテ縁組ノ受諾ヲ爲ス可シ

第百二十四條　縁組ノ儀式ヲ行ヒ又ハ縁組ノ受諾ヲ爲シタルトキハ當事者ヨリ十日內ニ身分取扱吏ニ屆出ツ可シ但此屆出ハ代理人ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第百二十五條　第五十條乃至第五十二條ノ規定ハ之ヲ縁組ニ適用ス但本章第一節ニ定メタル條件ニ違背セサルコトヲ要ス

第三節　養子縁組ノ證據

第百二十六條　縁組ハ縁組證書ヲ以テ之ヲ證ス但第二百九十一條ノ規定ノ適用ヲ妨ケス

第五十四條ノ規定ハ縁組ニ之ヲ適用ス

第四節　養子縁組ノ不成立及ヒ無効

第百二十七條　縁組ハ人違、喪心又ハ强暴ニ因リテ承諾ノ全ク欠缺シタルトキハ不成立トス

第百二十八條　縁組ハ本章第一節ニ定メタル條件ノ一ニ違背シタルトキハ無効トス

此無効ハ第百三十條ノ場合ヲ除ク外當事者其他現實ノ利益ヲ有スル者及ヒ檢事ヨリ何時ニテモ之ヲ請求スルコトヲ得

第百二十九條　縁組ハ左ノ場合ニ於テ無効トス

第一　縁組ノ申出ヲ爲サス又ハ身分取扱吏ノ差止ヲ受ケタルニ拘ハラス儀式ヲ行ヒタルトキ

第二　證人二人ノ立會ナクシテ儀式ヲ行ヒタルトキ

第三　第四十八條ノ規定ニ違ヒテ儀式ヲ行ヒタルトキ

第四　縁組ノ申出ヲ受ケタル身分取扱吏ノ管轄違ナルトキ

此無効ハ儀式後一个年內ニ限リ前條ニ掲ケタル者ヨリ之ヲ請求スルコトヲ得

第百三十條　第百八條又ハ第百九條但書ノ規定ニ違ヒタル縁組ノ無効ハ被後見人又ハ養家ノ戶主ニ非サレハ之ヲ請求スルヿヲ得ス

被後見人カ成年ニ至リ又ハ戶主カ縁組ヲ知リタル後縁組ヲ認諾シ又ハ三个月ヲ過キタルトキハ其訴權ヲ失フ

第百三十一條　强暴ノ爲メ承諾ニ瑕疵アル縁組ノ無効ハ强暴ヲ受ケタル者ニ限リ之ヲ請求スルコトヲ得但强暴ヲ免カレタル後縁組ヲ

認諾シ又ハ三ヶ月ヲ過キタルトキハ其訴權ヲ失フ

第百三十二條　第百十六條乃至第百二十條ニ定メタル許諾ナクシテ爲シタル緣組ノ無効ハ許諾ヲ與フ可キ者又ハ許諾ヲ受ク可キ者ニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第六十條第二項、第六十一條及ヒ第六十二條ノ規定ハ此無効訴權ニ之ヲ適用ス

第百三十三條　婿養子緣組ニ付テハ當事者ハ緣組又ハ婚姻ノ無効言渡ヲ原因トシテ婚姻又ハ緣組ノ無効ヲ請求スルコトヲ得但無効言渡ノ後三ヶ月ヲ過キタルトキハ其訴權ヲ失フ

第五節　緣組ノ効力

第百三十四條　養子ハ緣組ノ日ヨリ養家ニ於テ嫡出子ノ權利及ヒ義務ヲ有ス

第百三十五條　養子ハ特別ニ職業ヲ營ムニ因リテ取得シタル利益及ヒ其齎帶シ又ハ相續、贈與若シクハ遺贈ニ因リテ取得シタル財産ノ所有權ヲ有ス但未成年中ノ財産管理ハ第九章ノ規定ニ從ヒテ養父母ニ屬ス

第六節　罰則

第百三十六條　緣組申出ノ時ニ必要ノ書類ヲ差出タサシメサル身分取扱吏ハ二圓以上二十圓以下ノ過料ニ處ス

緣組ノ不成立又無効タル可キ法律上ノ原因アルコトヲ知リテ其儀式ヲ行フヲ差止メサル身分取扱吏ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八章　養子ノ離緣

第一節　協議ノ離緣

第百三十七條　養子ヲ爲シタル者及ヒ養子ト爲リタル者ハ協議ヲ以ヲ離緣ヲ爲スコトヲ得

然レトモ十五年未滿ニテ養子ト爲リタル者ノ離緣ハ滿十五年ニ至ラサル間ニ限リ養子ヲ爲シタル者ト緣組承諾ノ權ヲ有スル者トノ協議ヲ以テ之ヲ爲ス

第百三十八條　離緣ヲ爲サントスル養子ハ緣組許諾ノ爲メ定メタル規則ニ從ヒ其父母、祖父母又ハ後見人ノ許諾ヲ受クルヿヲ要ス

第百三十九條　當事者ハ離緣協議書ニ左ノ書類ヲ添ヘテ身分取扱吏ニ屆出ツ可シ

第一　緣組證書

第二　離縁ノ爲メニ必要ナル訴諾書又ハ訴諾ヲ得ル能ハサル事由ヲ證スル書類

第二節　特定原因ノ離縁

第百四十條　離縁ハ左ノ原因アルニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第一　養子ヨリ養家ノ尊屬親ニ對シ又ハ養家ノ尊屬親ヨリ養子ニ對スル暴虐、脅迫、遺棄又ハ重大ノ侮辱

第二　重罪ニ因レル處刑

第三　竊盜又ハ詐欺取財ノ罪ニ因レル重禁錮一年以上ノ處刑

第四　浪費

第八十二條及ヒ第八十八條ノ規定ハ離縁ニ之ヲ適用ス

第百四十一條　離縁ヲ請求スル訴權ハ養子ヲ爲シタル者及ヒ養子トヲリタル者ノミニ屬ス

養子ヲ爲シタル者又ハ養子トヲリタル者カ死亡シタルトキハ離縁ノ訴權ハ消滅ス但訴訟中ニ死亡シタル場合ニ於テハ現實ノ利益ヲ有スル者其訴訟ヲ續行スルコトヲ得

第百四十二條　養子ヲ爲シタル者カ禁治産中ニ在ルトキハ後見人又ハ後見監督人ハ親屬會ノ許可ヲ得テ離縁ヲ請求スルコトヲ得

養子トヲリタル者カ禁治産中ニ在ルトキハ實家ノ父母、祖父母又ハ戸主ヨリ離縁ヲ請求スルコトヲ得

第百四十三條　養子ノ滿十五年ニ至ラサル間ハ縁組承諾ノ權ヲ有スル者ヨリ離縁ヲ請求スルコトヲ得

第百四十四條　養子カ養父母ト同居スルトキハ裁判所ハ離縁ノ訴訟中養子ヲシテ住家ヲ去ラシムルコトヲ得

此場合ニ於テハ養子ハ衣服其他ノ日用物品ヲ持去リ且必要アルトキハ養料ヲ請求スルコトヲ得

裁判所ハ養子ノ請求ニ因リテ其財産ヲ保存スル爲メニ必要ナル處分ヲ命スルコトヲ得

第百四十五條　離縁ハ養子ノ家督相續後之ヲ爲スコトヲ得ス

第三節　離縁ノ効力

第百四十六條　離縁ハ其屆出又ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ効力ヲ生セス

第百四十七條　離縁ト爲リタル養子ハ自己ノ過失ノ有無ニ拘ハラス既所有財産ニ限リ之ヲ請求スルコトヲ得但養家ノ爲メニ消費シタ

ムモノハ此限ニ在ラス

第百四十八條　婿養子縁組ニ付テハ當事者ハ離縁ヲ原因トシテ離婚ヲ請求シ又離婚ヲ原因トシテ離縁ヲ請求スルコトヲ得但離婚又ハ離縁ヨリ三ヶ月ヲ過キタルトキハ其訴權ヲ失フ

第九章　親權

第一節　子ノ身上ニ對スル權

第百四十九條　親權ハ父之ヲ行フ

父死亡シ又ハ親權ヲ行フ能ハサルトキハ母之ヲ行フ

父又ハ母其家ヲ去リタルトキハ親權ヲ行フコトヲ得ス

第百五十條　未成年ノ子ハ親權ヲ行フ父又ハ母ノ許可ヲ受クルニ非サレハ父母ノ住家又ハ其指定シタル住家ヲ去ルコトヲ得ス

子カ許可ヲ受ケスシテ其住家ヲ去リタルトキハ父又ハ母ハ區裁判所ニ申請シテ歸家セシムルコトヲ得

第百五十一條　父又ハ母ハ子ヲ懲戒スル權ヲ有ス但過度ノ懲戒ヲ加フルコトヲ得ス

第百五十二條　子ノ行狀ニ付キ重大ナル不滿意ノ事由アルトキハ父又ハ母ハ區裁判所ニ申請シテ其子ヲ感化場又ハ懲戒場ニ入ルルコ

トヲ得

入場ノ日數ハ六ヶ月ヲ超過セサル期間内ニ於テ之ヲ定ム可シ父又ハ母ハ裁判所ニ申請シテ更ニ其日數ヲ增減スルコトヲ得

右申請ニ付テハ總テ裁判上ノ書面及ヒ手續ヲ用ユルコトヲ得ス

裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キテ決定ヲ爲ス可シ父、母及ヒ子ハ其決定ニ對シテ抗告ヲ爲スコトヲ得

第二節　子ノ財産ノ管理

第百五十三條　父ハ未成年ナル子ノ總テノ行爲ニ付テ之ヲ代表シ自己ノ財産ニ於ケル如ク其財産ヲ管理ス

第百五十四條　父ノ管理ニ於テハ第百九十四條ニ記載シタル行爲ハ尙ホ之ヲ管理行爲ト看做ス

第百五十五條　父ハ特別ニ職業ヲ營ムニ因リテ取得シタル利益及ヒ相續、贈與又ハ遺贈ニ因リテ取得シタル財産ノ所有權ヲ有ス

第百五十六條　父ハ管理ノ止ミタルトキハ子ニ其財産ヲ引渡ス可シ

但收益ハ子ノ養育教育ノ費用及ヒ管理ノ費用ニ供シタルモノト看做ス

第百五十七條　本節ノ規定ハ母カ子ノ財産ヲ管理スル場合ニ之ヲ適用ス

然レトモ母ハ管理ヲ辭スルコトヲ得

第三節　嫡母、繼父及ヒ繼母ニ特別ナル規則

第百五十八條　嫡母、繼父又ハ繼母ノ親權ヲ行フ場合ニ於テハ相談人ヲ付スルコトヲ得

此相談人ハ配偶者證書若クハ遺言書ヲ以テ之ヲ定メ又ハ親族會其議決ヲ以テ之ヲ定ム

第百五十九條　相談人ハ後見監督人ト同一ノ權限及ヒ義務ヲ有ス

第百六十條　配偶者カ相談人ヲ定メサル場合ニ於テ親族會ヲ招集セサルトキ又ハ配偶者若クハ親族會ノ定メタル相談人ニ相談セサルトキハ區裁判所ハ檢事ノ請求ニ因リ嫡母、繼父又ハ繼母ニ對シテ親權行使ノ禁止ヲ宣告スルコトヲ得

第十章　後見

總則

第百六十一條　後見ハ未成年者ノ父又ハ母ニシテ生存スル者ノ死亡ニ因リテ開始ス

父母共ニ生存シ又ハ其一方ノ生存スルモ親權ヲ行フ能ハサルトキ又ハ母カ子ノ財産ノ管理ヲ辭スルトキモ亦同シ

第百六十二條　一家ニ未成年者數人アルモ後見人ハ一人タル可シ

第百六十三條　後見人ハ親族會ノ免除ヲ得サル限リハ後見ヲ承諾ス可シ若シ後見人之ヲ承諾セス又ハ其任務ヲ怠ルトキハ利害關係人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ區裁判所ハ代務者ヲ命スルコトヲ得

後見人ハ代務者ノ管理ノ費用ヲ負擔シ且其管理ニ付キ責ニ任ス

第一節　後見人

第百六十四條　親權ヲ行フ父又ハ母ハ其生前ニ於テ親族、姻族又ハ他人ノ中ヨリ後見人タル可キ者ヲ指定スル權ヲ有ス

第百六十五條　後見人ノ指定ハ遺言書若クハ證書ヲ以テ之ヲ爲シ又ハ區裁判所ニ口述シテ之ヲ爲ス可シ此口述ニ付テハ調書ヲ作ルコトヲ要ス

第百六十六條　父又ハ母カ後見人ヲ指定セサリシトキハ其家ノ祖父後見人ト爲ル但未成年ノ家族ニ付テハ成年ノ戸主後見人ト爲ル

第百六十七條　遺言後見人モ祖父若クハ戸主タル後見人モ有ラサルトキ又ハ此等ノ後見人カ免除セラレ除斥セラレ罷黜セラレ若クハ

死亡シタルトキハ親族會ニ於テ後見人ヲ選定ス

第百六十八條　未成年者ヲ有スル人ノ死亡シタルトキ又ハ未成年者ヲ有スル父若クハ母ノ婚姻其他ノ事故ニ因リテ他家ニ入リタルトキハ區裁判所ハ未成年者ノ親族若クハ利害關係人ノ請求ニ因リ後見人ヲ設定スル爲メ親族會ヲ招集ス可シ

第二節　後見監督人

第百六十九條　後見ニハ一人ノ後見監督人ヲ付スコトヲ得

後見監督人ハ後見人ヲ定ムルト同一ノ手續ニ從ヒテ之ヲ指定シ又ハ親族會ニ於テ之ヲ選定ス

本章第四節及ヒ第五節ノ規定ハ後見監督人ニ之ヲ適用ス

第百七十條　後見監督人ヲ置カサル場合ニ於テ監督ヲ要スルコト有ルトキハ親族會ニ於テ會員一人ヲ選定シ臨時ニ後見監督人ノ任務ヲ行ハシム

第三節　親族會

第百七十一條　親族會ハ未成年者ノ最近親族三人以上ヲ以テ之ヲ設ク但親族三人ニ滿タサルトキハ未成年者ニ緣故アル者ヲ以テ之ヲ補足ス

本家及ヒ分家ノ戸主ハ親族會ニ列スルコトヲ得

第百七十二條　親族會ハ親族、後見人、後見監督人、保佐人又ハ利害關係人ノ求メニ因リテ集會ス

第百七十三條　戸主成年ナルトキハ家族ノ爲メ親族會ヲ設クルコトヲ要セス

第百七十四條　養子ノ親族會ニハ實家ノ親族モ其會員タルコトヲ得

第百七十五條　會員ハ自己ノ利害ニ關係アル會議ニ列スルコトヲ得ス

第百七十六條　親族會ヲ設クル能ハサルトキハ區裁判所其事ヲ行フ

第百七十七條　未成年者ノ親族會ノ外親族會ヲ組成スル必要アルトキモ亦本節ノ規定ヲ適用ス

第四節　後見ノ免除

第百七十八條　左ニ掲クル者ハ當然後見人タルコトヲ免除セラル

第一　現役ニ服スル軍人、軍屬

第二　被後見人住居ノ市又ハ郡ノ外ニ於テ公務ニ從事スル人

第百七十九條　後見免除ノ求メハ親族會之ヲ決ス後見人解任ヲ求メタルトキモ亦同シ

第五節　後見人及ヒ親族會員ノ欠格、除斥及ヒ罷黜

第百八十條　左ニ掲クル者ハ後見人タルコトヲ得ス又親族會員タルコトヲ得ス

第一　未成年者

第二　民事上禁治産及ヒ准禁治産者

第三　未成年者ノ身分又ハ財産ニ對シテ訴訟ヲ爲ス人及ヒ其人ノ尊屬親、卑屬親、配偶者

第百八十一條　左ニ掲クル者ハ後見及ヒ親族會ヨリ除斥セラル可シ

現ニ任務ニ從事スル者ハ之ヲ罷黜ス

第一　甚シキ不行跡ナル人

第二　後見管理ニ不能又ハ不正實ヲ顯ハセル後見人

第三　任務ヲ免黜セラレタル裁判上ノ保佐人

第四　公權剝奪、公權停止及ヒ刑事上禁治産ヲ受ケタル人

第五　復權ヲ得サル破産者及ヒ家資分散者

第百八十二條　後見人及ヒ親族會員ノ除斥又ハ罷黜ハ親族會ニ於テ之ヲ爲ス

第六節　後見人ノ管理

第百八十三條　後見人後見ノ開始ヲ知ルトキハ直チニ任務ニ就クコトヲ要ス

親族會ニ於テ後見人ヲ選定シ其後見人在席スルトキハ直チニ任務ニ就キ若シ在席セサルトキハ通知ヲ得タル日ヨリ任務ニ就クコトヲ要ス

第百八十四條　後見人ハ未成年者ヲ監護シ其教育ヲ擔任ス

尊屬後見人及ヒ戸主後見人ヲ除ク外後見人若シ未成年者ノ在來ノ住居又ハ教育方法ヲ更變セントスルトキハ親族會ニ協議ス可シ

第百八十五條　後見人ハ父母ノ如ク未成年者ヲ懲戒スルコトヲ得

未成年者ノ行狀ニ付キ重大ナル不滿意ノ事由アルトキハ後見人ハ親族會ノ許可ヲ得タル上第百五十二條ノ規定ニ從ヒテ未成年者ニ對スル處分ヲ爲スコトヲ得

後見人カ其權ヲ濫用シ又ハ其義務ヲ怠ルトキハ未成年者及ヒ其親族ハ親族會ニ之ヲ申告スルコトヲ得

第百八十六條　後見人ハ未成年者ノ總テノ行爲ニ付テ之ヲ代表シ善良ナル管理者ノ如ク其財産ヲ管理シ管理ノ失當又ハ過失ヨリ生ス

ル損害賠償ノ責ニ任ス

第百八十七條　後見人ハ當然其任務ニ就ク可キ日ヨリ十日内ニ後見監督人ノ立會ヲ得テ未成年者ノ財産ヲ調査ス可シ

財産目錄ノ調製ハ二个月内ニ之ヲ終了スルヿヲ要ス但親族會ハ狀況ニ從ヒテ延期ヲ許スヿヲ得

第百八十八條　後見人カ未成年者ノ債務者又ハ債權者ナルトキハ目錄ノ調製前其旨ヲ公證人又ハ親族會ニ明言スルコトヲ要ス

後見人カ債權ノ存立ヲ知リテ之ヲ明言セサリシトキハ其債權ヲ喪失ス又債務ノ存立ヲ知リテ之ヲ明言セサリシトキハ區裁判所ハ其後見人ヲ罷黜スルコトヲ得但罷黜ノ場合ニ於テハ三十圓以下ノ過料ニ處スルコトヲ得

第百八十九條　目錄調製ヲ終了セサル間ハ後見人ハ要急關ク可カラサル管理行爲ノミヲ爲スコトヲ得

第百九十條　後見人ハ任務執行ノ初ニ於テ親族會ニ協議シ未成年者ノ養育ノ費用、教育ノ程度ト其資産トニ從ヒ毎年費ス可キ金額及ヒ財産管理ニ係ル費用ヲ定ム

親族會ハ相當ノ給料ヲ與フル一人又ハ數人ノ管理者ヲ後見人ノ自己ノ責任ヲ以テ使用スルヲ許スコトヲ得

第百九十一條　後見人ハ未成年者ノ元本及ヒ收益ノ剩額ヲ毎次ニ官ノ貯金預所又ハ確實ナル銀行ニ預ク可シ其預ケサリシ金額ニ付テハ法律上ノ利息ヲ辨濟ス可シ

後見人カ未成年者ノ財産ノ利用方法ヲ變更セントスルトキハ親族會ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

第百九十二條　僉屬後見人及ヒ戸主後見人ヲ除ク外後見人ハ一个年内ノ管理ノ狀況ヲ親族會ニ報告ス可シ

第百九十三條　後見人ハ未成年者ノ財産ニ付テハ管理ノ權ヲ有スルニ止マリ此權外ノ行爲ハ法律ニ定メタル條件ニ依ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第百九十四條　左ニ掲クル行爲ニ關シテハ後見人ハ親族會ノ許可ヲ得ルコトヲ要ス

第一　元本ヲ利用シ又ハ借財ヲ爲スコト

第二　不動産及ヒ重要ナル動産ヲ讓渡シ之ニ物權ヲ設定シ又ハ之ヲ取得スルコト

第三　動産、不動産ニ係ル訴訟又ハ和解、仲裁ニ關スルコト

第四　相續遺贈若クハ贈與ヲ受諾シ又ハ拋棄スルコト

第五　新築、改築、增築又ハ大修繕ヲ爲スコト
第六　財産編第百十九條ニ定メタル期間ヲ超ユル賃貸ヲ爲スコト

第百九十五條　後見人ハ未成年者ノ財産ヲ讓受クルコトヲ得ス又未成年者ニ對スル權利ヲ讓受クルコトヲ得ス

第百九十六條　後見人ハ親族會ノ許可ヲ得ルニ非サレハ未成年者ノ不動産ヲ賃借スルコトヲ得ス

第百九十七條　後見人ノ其權内ニ於テ爲シタル行爲ハ未成年者ヲ羈束ス

第七節　後見監督人ノ任務

第百九十八條　後見監督人ハ後見人ノ管理ヲ監視スルコトニ任ス後見監督人ハ後見人ヲ欲クトキト雖モ後見ノ任務ヲ行フコトヲ得ス此場合ニ於テハ直チニ後任ノ後見人ヲ定ムル手續ヲ爲スコトヲ要ス

第百九十九條　未成年者ト後見人トノ間ニ利益相反スルトキハ後見監督人ハ未成年者ヲ代表ス

第二百條　必要ナル場合ニ於テハ後見監督人ハ保存行爲ヲ爲スコトヲ得

第二百一條　法律上後見監督人ノ立會フ可キ行爲ニシテ其立會ナクシテ爲シタルモノハ無効トス

第八節　後見人ノ終了

第二百二條　後見ノ任務ハ後見人ノ一身ニ止マリ其相續人ニ移轉セス然レトモ相續人カ成年者ナルトキハ後任ノ後見人ノ任務ニ就マテ管理ヲ繼續ス可シ

第二百三條　未成年者カ成年ニ達シ又ハ自治産ニ至ルニ因リテ後見ノ止ムトキハ後見人ハ其計算ヲ終了スルマテ管理ヲ繼續ス

第二百四條　假ニ管理ヲ爲ス者ハ必要ナル行爲ノミヲ爲スコトヲ得

第九節　後見ノ計算

第二百五條　後見人ハ管理ノ終了スルトキハ其計算ヲ爲ス可シ

第二百六條　後見ノ決算ハ後見監督人ノ立會ニテ未成年者ノ成年ニ達シタル者又ハ其自治産ニ至リタル者ニ對シテ之ヲ爲ス後見カ後見人ノ身上ニ係リテ終了スルトキハ決算ハ後任ノ後見人ニ對シテ之ヲ爲シ親族會ノ許可ニ付ス但第百八條ノ場合ニ於テハ決算ハ後見監督人ニ對シテ之ヲ爲ス

後見カ未成年者ノ死亡ニ因リ終了スルトキハ決算ハ其相續人ニ對シテ之ヲ爲ス

後見ノ決算ニ係ル費用ハ未成年者ノ負擔ニ屬ス

第二百七條　後見ノ決算ハ管理終了ノ日ヨリ三ヶ月內ニ之ヲ爲ス可シ但親族會ハ當事者ノ求メニ因リテ延期ヲ許スコトヲ得

第二百八條　後見人ト未成年者ノ成年ニ達シタル者トノ合意ニシテ後見ノ決算前ニ爲シタルモノハ總テ無効トス

第二百九條　後見ノ費用ハ豫算ノ定額ヲ超ユルト雖モ後見人其有益タルコトヲ證スルトキハ未成年者ノ負擔ニ屬ス

第二百十條　後見人ヨリ未成年者ニ返濟ス可キ金額ハ決算完結ノ日ヨリ當然利息ヲ生ス

未成年者ヨリ後見人ニ返濟ス可キ金額ハ決算完結ノ後後見人ノ催告ニ因リテ利息ヲ生ス

第二百十一條　後見ノ計算ニ係ル未成年者ノ訴權ハ五ヶ年ノ時効ニ因リテ消滅ス後見人其他假ニ後見管理ヲ爲シタル人ノ未成年者ニ對スル訴權モ亦同シ

未成年者ト後見監督人又ハ親族會員トノ間ノ後見ニ係ル訴權ニ付テモ亦前項ノ規定ヲ適用ス

此期間ハ未成年者ノ成年ニ達シ又ハ死亡シタル日ヨリ起算シ第二百八條ノ場合ニ於テ後見ノ計算ニ係ル訴權ニ付テハ合意無効ノ裁判言渡ノ日ヨリ起算ス

第二百十二條　後見監督人及ヒ假ニ後見管理ヲ爲シタル人ハ代理契約ノ原則ニ從ヒテ過失ノ責ニ任ス

第十一章　自治產

第二百十三條　未成年者ハ婚姻ヲ爲スニ因リテ當然自治產ノ權ヲ得

第二百十四條　親權ヲ行フ父又ハ母ハ滿十五年ニ達シタル未成年ノ子ニ自治產ヲ許スコトヲ得

此自治產ハ身分取扱吏ニ屆出ツ可シ

第二百十五條　後見ニ服スル未成年者ノ滿十七年ニ達シタルトキハ親族會ハ其未成年者ニ自治產ヲ許スコトヲ得

此自治產ハ後見人ヨリ身分取扱吏ニ屆出ツ可シ

第二百十六條　自治產ノ未成年者ハ之ヲ保佐ニ付ス

親權ヲ行ヒタル父又ハ母ハ當然保佐人ト爲ル

親權ヲ行フ父又ハ母ハ其生前ニ第百六十五條ノ規定ニ從ヒ保佐人

ヲ指定スルコトヲ得若シ之ヲ指定セサリシトキハ其家ノ祖父保佐人ト爲リ家族ニ付テハ成年ノ戶主保佐人ト爲ル

夫ハ當然未成年ノ婦ノ保佐人ト爲ル

此他ノ場合ニ於テハ親族會ニ於テ保佐人ヲ選定ス

第二百十七條　後見人ニ關シテ定メタル免除、欠格、除斥及ヒ罷黜ノ規則ハ之ヲ保佐人ニ適用ス

第二百十八條　自治產ノ未成年者ハ保佐人ノ立會アルニ非サレハ元本ヲ領收スルコトヲ得ス

第二百十九條　第百九十四條ニ揭ケタル行爲ニ付テハ自治產ノ未成年者ハ保佐人ノ立會アルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二百二十條　父母ヲ除ク外保佐人ハ後見人ト同シク過失ノ責ニ任ス

第二百二十一條　自治產ヲ許サレタル未成年者カ不行跡又ハ財產管理ノ失當ニ因リテ自治產タルニ適セサルトキハ親族會ハ其自治產ヲ廢止スルコトヲ得

親權ヲ行ヒタル父又ハ母ハ自治產ヲ廢止スルコトヲ得若シ此等ノ者アラサルトキハ親族會員又ハ保佐人ハ此廢止ヲ親族會ニ求ムルコトヲ得

未成年者ハ自治產廢止ノ日ヨリ親權又ハ後見ニ服シ成年ニ達スルマテ復タ自治產者ト爲ルコトヲ得ス

第十二章　禁治產

第一節　民事上禁治產

第二百二十二條　心神喪失ノ常況ニ在ル者ハ時時本心ニ復スルコトアルモ其治產ヲ禁スルコトヲ得

第二百二十三條　禁治產ハ配偶者、四親等內ノ親族、戶主及ヒ檢事ヨリ之ヲ區裁判所ニ請求スルコトヲ得

禁治產ヲ請求スル權利ヲ有スル一人ノ申立ニ因リテ言渡シタル裁判ハ總テノ人ニ對シテ既判力ヲ有ス

第二百二十四條　禁治產者ハ之ヲ後見ニ付ス

配偶者ハ當然相互ニ後見人ト爲ル若シ配偶者アラサルトキハ其家ノ父後見人ト爲リ父アラサルトキハ親權ヲ行フコトヲ得ヘキ母後見人ト爲ル

父又ハ母ハ第百六十五條ニ定メタル方式ニ從ヒテ後見人ヲ指定スルコトヲ得若シ指定セサリシトキハ第百六十六條ノ規定ヲ適用ス

法律上ノ後見人モ避言後見人モ有ラス又ハ此等ノ後見人カ免除セラレ除斥セラレ若クハ罷黜セラレタルトキハ第十章ニ定メタル方式ニ從ヒ親族會ニ於テ後見人ヲ選定ス

第二百二十五條　配偶者、尊屬親、卑屬及ヒ戸主ヲ除ク外何人タリトモ十个年以上禁治産者ノ後見ヲ擔任スルコトヲ要セス

第二百二十六條　未成年者ノ後見ニ係ル規定ハ禁治産者ノ後見ニ之ヲ適用ス

第二百二十七條　疾病ノ性質ト資産ノ狀況トニ從ヒテ禁治産者ヲ自宅ニ療養セシメ又ハ之ヲ病院ニ入ラシムルハ親族會ノ決議ニ依ル但瘋癲病院ニ入ラシメ又ハ自宅ニ監置スル手續ハ特別法ヲ以テ之ヲ定ム

第二百二十八條　法律上ノ後見人ハ第百九十二條ニ定メタル管理狀況ノ報告ヲ爲スコトヲ要セス

第二百二十九條　禁治産者ノ財産ヲ以テ其子孫ノ教育、婚姻又ハ營業ノ資ニ供セントスルトキハ親族會ノ許可ヲ得ルコトヲ要ス

第二百三十條　禁治産者ハ禁治産ノ裁判言渡ノ日ヨリ無能力者トス裁判言渡後ニ爲シタル禁治産者ノ行爲ハ之ヲ銷除スルコトヲ得

禁治産ノ裁判言渡前ニ爲シタル禁治産者ノ行爲ニ對シテモ其行爲ノ當時ニ於テ喪心ノ明確ナルトキハ銷除訴權ヲ行フコトヲ得

第二百三十一條　禁治産ノ原因止ミタルトキハ本人、配偶者、親族、姻族、戸主、後見人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ其禁ヲ解ク可シ禁治産者ハ解禁ノ裁判言渡後ニ非サレハ其權利ヲ回復スルコトヲ得ス

第二節　准禁治産

第二百三十二條　心神耗弱者、聾唖者、盲者及ヒ浪費者ハ准禁治産者ト爲シテ之ニ保佐ニ付スルコトヲ得

准禁治産ノ言渡ハ配偶者、三親等內ノ親族及ヒ戸主ノ請求ニ因リ區裁判所之ヲ爲ス

保佐人ニ付テハ第二百二十四條及ヒ第二百二十五條ノ規定ヲ適用ス

第二百三十三條　第二百十七條乃至第二百二十條ノ規定ハ之ヲ准禁治産ニ適用ス

裁判所ハ狀況ニ從ヒテ保佐人ノ立會アルニ非サレハ管理行爲ヲモ爲スコトヲ得ル旨ヲ言渡スコトヲ得

○民法○人事編

第二百三十四條　准禁治産者カ保佐人ノ立會ナクシテ爲シタル行爲ニ付テハ第二百三十條ノ規定ヲ適用ス

第二百三十五條　准禁治産ノ原因止ミタルトキハ本人、配偶者、親族、姻族、戸主、保佐人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ其禁ヲ解ク可シ

第三節　刑事上禁治産

第二百三十六條　刑事上禁治産ヲ受ケタル者ハ其財産ヲ管理スルコトヲ得ス又遺言ヲ以テスル外ハ其財産ヲ處分スルコトヲ得ス

第二百三十七條　刑事上禁治産者ニハ後見人ヲ付シテ其財産ヲ管理セシム此後見人ノ指定及ヒ管理ノ方法ニ付テハ民事上禁治産者ノ後見ニ係ル規定ヲ適用ス

第二百二十九條ノ場合ニ於テハ禁治産者ノ同意ヲ得ルヲ以テ足ル

第四節　瘋癲者ノ財産ノ假管理

第二百三十八條　禁治産ヲ受ケサル瘋癲者アルトキハ配偶者、親族、戸主及ヒ檢事ハ區裁判所ノ許可ヲ得テ特別法ニ定ムル手續ニ從ヒ之ヲ瘋癲病院ニ入レ又ハ自宅ニ監置スルコトヲ得

此場合ニ於テハ裁判所ハ直チニ假管理人ヲ指定ス

第二百三十九條　瘋癲病院ニ入リ又ハ自宅ニ監置セラレタル者ハ入院中又ハ監置中其財産ヲ管理シ及ヒ處分スルコトヲ得ス

第二百四十條　假管理人ハ瘋癲者ノ總テノ行爲ニ付テ之ヲ代表シ禁治産者ノ後見人ト同視セラル但必要ナル行爲ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二百四十一條　瘋癲者ノ入院中又ハ監置中ニ行爲ヲ爲シタル證據アルトキハ其行爲ヲ銷除スルコトヲ得但相手方カ瘋癲ノ本心ニテ行爲ヲ爲シタルコトヲ證スルトキハ此限ニ在ラス

第二百四十二條　瘋癲者ノ無能力ハ區裁判所カ假管理ヲ解クニ因リテ止ム

第十三章　戸主及ヒ家族

第二百四十三條　戸主トハ一家ノ長ヲ謂ヒ家族トハ戸主ノ配偶者及ヒ其家ニ在ル親族、姻族ヲ謂フ

戸主及ヒ家族ハ其家ノ氏ヲ稱ス

第二百四十四條　戸主ハ家族ニ對シテ養育及ヒ普通教育ノ費用ヲ負擔ス但家族カ自ラ其費用ヲ辨スルコトヲ得ルトキ又ハ戸主ノ許諾ヲ受ケスシテ他所ニ在ルトキハ此限ニ在ラス

第二百四十五條　家族ハ特別ニ職業ヲ營ムニ因リテ取得シタル利益

及ヒ其齎帶シ又ハ遺産相續、贈與若クハ遺贈ニ因リテ取得シタル財産ノ所有權ヲ有ス

然レトモ家族カ其家ノ爲メ消費シタル財産ニ付テハ戸主ニ對シテ償還ヲ求ムルコトヲ得ス

第二百四十六條　家族ハ婚姻又ハ養子縁組ヲ爲サントスルトキハ年齡ニ拘ハラス戸主ノ許諾ヲ受ク可シ

第二百四十七條　他家ニ入リテ夫、婦又ハ養子ト爲リタル者ハ婚姻ノ無効、養子縁組ノ無効、離婚又ハ離縁ノ場合ニ於テハ實家ニ復歸ス

然レトモ此者カ婚姻又ハ養子縁組ニ付キ實家戸主ノ許諾ヲ受ケサリシトキハ戸主ハ復歸ノ事由ヲ知リタル日ヨリ一ヶ月内ニ身分取扱吏ニ申立テ復歸ヲ拒ムコトヲ得

第二百四十八條　他家ニ入リテ夫又ハ婦ト爲リタル者ハ其配偶者ノ死亡シタルトキト雖モ婚家ヨリ更ニ他ノ家ニ入ルコトヲ得ス

然レトモ婚家及ヒ實家ノ戸主ノ許諾ヲ受ケテ實家ニ復歸スルヿヲ得

第二百四十九條　實家ニ復歸ス可キ者又ハ復歸セントスル者カ復歸スル能ハサルトキハ一家ヲ新立ス

第二百五十條　推定家督相續人ニ非サル家族タル男子カ戸主ノ許諾ヲ受ケスシテ婚姻ヲ爲シタルトキハ一家ヲ新立ス

第二百五十一條　家督相續ニ因リテ戸主ト爲リタル者ハ其家ヲ廢スルコトヲ得ス但分家ヨリ本家ヲ承繼シ其他正當ノ事由アルトキハ區裁判所ノ許可ヲ得テ廢家スルコトヲ得

第二百五十二條　戸主カ國民分限ヲ喪失シタルトキハ廢家シタルモノトシ推定家督相續人ハ一家ヲ新立シ前戸主ノ家族ハ新戸主ノ家ニ入ル

第二百五十三條　戸主カ婚姻其他ノ原因ニ由リテ適法ニ廢家シ他家ニ入リタルトキハ其家族モ亦從テ其家ニ入ル

第二百五十四條　卑屬親ヲ有スル者カ婚姻若クハ養子縁組ノ無効又ハ離婚若クハ離縁ニ因リテ婚家又ハ縁家ヲ去ルトキハ卑屬親ハ仍ホ其家ニ屬ス

第二百五十五條　父母ノ知レサル子ハ一家ヲ新立ス

第二百五十六條　他家ニ入リテ夫、婦又ハ養子ト爲リタル者ハ配偶者又ハ養子ヲ爲シタル者ト協議ノ上両家ノ戸主ノ許諾ヲ受ケテ實家ニ在ル卑屬親ヲ自家ニ引取ルコトヲ得

婚姻若クハ養子縁組ノ無効又ハ離婚若クハ離縁ニ因リテ婚家又ハ縁家ヲ去リタル者ハ配偶者又ハ養子ヲ爲セシ者ト協議ノ上両家ノ戸主ノ許諾ヲ受ケテ其家ニ在ル身属親ヲ自家ニ引取ルコトヲ得

第二百五十七條　戸主カ家族ニ對シテ婚姻其他ノ事件ニ付キ許諾ヲ與フ可キ場合ニ於テ未成年ナルトキ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ戸主ニ對シテ親權ヲ行フ者又ハ後見人之ヲ代表ス

第二百五十八條　入夫婚姻ノ場合ニ於テハ婚姻中入夫ハ戸主ヲ代表シテ其權ヲ行フ

第二百五十九條　戸主失踪ノ宣言アリタル後其家督相續ノ占有ヲ得タル者ハ其占有中戸主ノ權ヲ行フ

第二百六十條　單身戸主失踪ノ宣言アリテ其亡失若クハ最後音信ノ日ヨリ三十个年ニ至ルモ家督相續ノ占有者ナキトキハ絶家ス

第二百六十一條　戸主死亡シテ家督相續人ナキトキハ絶家シ其家族ハ一家ヲ新立ス

第十四章　住所

第二百六十二條　民法上ノ住所ハ本籍地ニ在ルモノトス

第二百六十三條　戸主ハ本籍ヲ移ス地ノ身分取扱吏ニ申述シテ住所ヲ變更スルコトヲ得

未成年者又ハ民事上禁治産者タル戸主ノ住所ハ親族會ノ許可ヲ得ヲ後見人之ヲ變更スルコトヲ得

第二百六十四條　家族カ獨立シテ一家ヲ成ストキノ本籍ヲ定ムル地ノ身分取扱吏ニ其意思ヲ申述シテ住所ヲ設定スルコトヲ得

一家新立ノ未成年者ニ付テハ後見人住所ヲ設定ス可シ

第二百六十五條　外國人始メテ日本ニ住所ヲ定ムルトキハ其意思並ニ本國、氏名及ヒ出生年月日ヲモ申述ス得シ

第二百六十六條　本籍地カ生計ノ主要タル地ト異ナルトキハ主要地ヲ以テ住所ト爲ス

第二百六十七條　左ノ場合ニ於テハ居所ヲ以テ住所ニ代用ス

第一　住所ノ知レサルトキ

第二　日本ニ住所ヲ定メサル外國人ニ關スルトキ

第二百六十八條　何人ト雖モ或ル行爲又ハ事務ノ爲メニ假住所ヲ選定スルコトヲ得但此選定ハ書面ヲ以テスルコトヲ要ス

第十五章　失踪

第一節　失踪ノ推定

第二百六十九條　住所及ヒ居所ヨリ亡失シ又ハ音信絶エテ生死分明ナラサル人ハ之ヲ失踪者ト推定ス

此推定ノ裁判ハ本人ノ住所ノ區裁判所之ヲ爲ス

第二百七十條　失踪ノ推定ヲ受ケタル者カ總理代理人ヲ定置キタルトキハ其代理人ハ失踪ノ推定中本人ノ財産ヲ管理ス但必要アルトキハ裁判所ハ現實ノ利益ヲ有スル關係人、推定相續人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ代理人ノ解任ヲ言渡シ又ハ其後任ヲ指定スルコトヲ得

第二百七十一條　失踪ノ推定ヲ受ケタル者カ總理代理人ヲ定置カサリシトキハ裁判所ハ前條ニ掲ケタル者ノ請求ニ因リテ管理人ヲ指定

此管理人ニハ成ル可ク推定相續人ヲ指定スルコトヲ要ス

第二百七十二條　代理人又ハ管理人ハ管理行爲ヲ爲ス權限ノミヲ有ス他ノ行爲ニ付テハ必要ノ場合ニ限リ裁判所ノ許可ヲ得テ之ヲ爲スコトヲ得

代理人又ハ管理人ハ本人ノ利益ニ關係アル目錄調製、計算及ヒ清算ニ付テ本人ヲ代表ス

第二百七十三條　管理人ハ失踪者ノ動産及ヒ證書ノ目錄ヲ調製ス可シ又不動産ノ形狀ヲ確定セシムル爲メ鑑定人ノ選定ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得鑑定人ノ報告書ハ裁判所ノ認可ニ付スルコトヲ要ス此等ノ手續ノ費用ハ本人ノ財産ヲ以テ之ヲ支辨ス

關係人、推定相續人又ハ檢事ノ請求アルトキハ本條ノ規定ヲ代理人ニ適用スルコトヲ得

第二百七十四條　代理人又ハ管理人ハ推定相續人ヲ除ク外其請求ニ因リテ裁判所ノ定メタル給料ヲ受ク裁判所ハ管理及ヒ財産返還ノ擔保トシテ保證人其他相當ノ擔保ヲ立テシムルコトヲ得

第二百七十五條　代理人又ハ管理人ハ失踪者ノ子孫ノ教育、婚姻又ハ營業ノ爲メ資財ヲ與フルニ付テハ區裁判所ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

第二節　失踪ノ宣言

第二百七十六條　失踪者カ代理人ヲ定置カサリシトキハ五个年又代理人ヲ定置キタルトキハ任期ノ長短ヲ問ハス七个年ニ至ルモ其生死ノ音信ヲ得サルニ於テハ失踪者ノ死亡ニ因リテ發生スル權利ヲ其財産上ニ有スル者ハ失踪者ノ住所ノ區裁判所ニ失踪ノ宣言ヲ請

求スルコトヲ得

第二百七十七條　右請求ノ訴ヲ可キモノナルトキハ裁判所ハ失踪者ノ住所及ヒ其最後ノ居所ノ地ニ於テ證人訊問ヲ爲ス可キコトヲ命ス可シ此證人訊問ニ付テハ民事訴訟法ニ定メタル忌避ノ規則ヲ適用セス

第二百七十八條　證人訊問ヲ命スル決定ハ裁判所ノ掲示板ニ掲示シ且官報又ハ公報ニ掲載シテ之ヲ公示ス可シ

第二百七十九條　失踪宣言ノ裁判ハ證人訊問ヲ命シタル決定ヨリ一个年ノ後ニ非サレハ之ヲ宣告スルコトヲ得ス

此裁判ハ前條ノ手續ニ從ヒテ之ヲ公示ス可シ

第三節　失踪宣言ノ効力

第二百八十條　失踪宣言ノ裁判アリタルトキハ失踪者ノ遺言書ハ關係人、推定相續人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ之ヲ開封ス可シ

失踪者ノ亡失又ハ最後音信ノ日ニ於ケル推定相續人其他失踪者ノ死亡ニ因リテ發生スル權利ヲ其財産上ニ有スル者ハ直チニ其財産ヲ占有スルコトヲ得

第二百八十一條　失踪者ニ屬スル財産ノ占有ニ付テハ總テ相續ニ關スル規定ヲ適用ス

此占有ヲ得タル者ハ第三者ニ對シテハ財産ノ所有者トス

然レトモ占有者ハ推定相續人ヲ除ク外財産返還ノ擔保トシテ裁判所カ相當ト認ムル保證人其他ノ擔保ヲ立ツ可シ其保證人ノ義務又ハ擔保ハ十五个年ノ後止ム

第二百八十二條　失踪者ノ現出シ又ハ音信アリタルトキハ失踪宣言ノ効力ハ即時ニ止ム

失踪者ハ其財産ヲ現狀ノ儘ニテ取回シ又占有者ノ處分ニ因リテ不當ニ利得シタルモノヲ取戻スコトヲ得

第二百八十三條　果實ニ付テハ失踪者カ其亡失又ハ最後音信ノ日ヨリ十个年内ニ現出スルトキハ其五分ノ一ヲ取戻スコトヲ得十个年後ハ其全部ヲ失フ

第二百八十四條　失踪者ノ相續順位ニ在ル者ハ他ノ者カ財産占有ヲ得タル日ヨリ三十个年間其財産ノ返還ヲ請求スルコトヲ得

此場合ニ於テモ果實ハ前條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ取戻スコトヲ得

第四節　失踪ノ推定及ヒ宣言ニ關スル通則

第二百八十五條　失踪シテ生存ノ確實ナラサル人ニ歸ス可キ權利ヲ

請求スル者ハ其人カ權利ノ發生セシ日ニ生存シタルヲ證スルコトヲ要ス此學證ヲ爲ササル間ハ其請求ヲ受理セス

第二百八十六條　失踪シテ生存ノ確實ナラサル人ニ歸ス可キ相續ハ次順位ノ者ニ屬ス

失踪者ニ歸ス可キ財產ヲ相續スル者ハ財產目錄ヲ調製ス可シ

第二百八十七條　前二條ノ規定ハ失踪者又ハ其相續人及ヒ承繼人ニ關スル相續ノ請求其他ノ權利ヲ行フヲ妨クルコト無シ此等ノ權利ハ普通ノ時効ニ因ルニ非サレハ消滅セス

第五節　不在者ニ關スル規則

第二百八十八條　生存ノ確實ナル人カ住所若クハ居所ヲ去リテ其財產ヲ管理スル者アラサルトキ又ハ裁判所カ未タ失踪ヲ推定セサルモ本人ノ不在ノ爲メ其財產ノ放置セラルルトキ又ハ失踪ノ推定中若クハ宣言後ニ失踪者ノ生存ノ確實ト爲リタルトキハ區裁判所ハ利害關係人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ必要ノ保存處分ヲ命スルコトヲ得

第十六章　身分ニ關スル證書

第二百八十九條　出生婚姻、養子緣組、死亡其他各人ノ身分ニ關スル

事件ハ身分取扱吏ノ主管スル帳簿ニ之ヲ記載スル可シ

第二百九十條　帳簿ニ記載シタル證書ハ公正證書ノ證據力ヲ有ス但法ノ記載ハ効力ナシ

合式ノ謄本ハ證書ト同一ノ効力ヲ有ス

第二百九十一條　帳簿ノ設備ナク若クハ中絕シタルトキ又ハ其全部若クハ一分ノ毀損シ亡滅シタルトキ又ハ其記載上甚シキ違式、錯誤若クハ脫漏アリテ信用ヲ置ク可カラサルトキ又ハ身分取扱吏ノ詐欺若クハ過失ニ因リテ證書ヲ作ラサリシトキハ證人又ハ私ノ書類ヲ以テ先ツ其事實ヲ證シ且身分上ノ事件ヲ證スルコトヲ得

第二百九十二條　證書ノ訂正ハ裁判ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二百九十三條　帳簿ノ調製、證書ノ記載、屆出ノ手續其他ノ事項ハ特別法ヲ以テ之ヲ規定ス

民法財産編目錄

總則　財産及ヒ物ノ區別　一丁

第一部　物權

第一章　所有權　十一丁

第二章　用益權、使用權及ヒ住居權　十一丁

第一節　用益權　十一丁

第一款　用益權ノ設定　十一丁

第二款　用益者ノ權利　十一丁

第三款　用益者ノ義務　十一丁

第四款　用益權ノ消滅　十二丁

第二節　使用權及ヒ住居權　十三丁

第三章　賃借權、永借權及ヒ地上權　十三丁

第一節　賃借權　十三丁

第一款　賃借權ノ設定　十四丁

第二款　賃借人ノ權利　十四丁

第三款　賃借人ノ義務　十四丁

第四款　賃借權ノ消滅　十四丁

第二節　永借權及ヒ地上權　四十八丁
第一款　永借權　全
第二款　地上權　五十二丁
第四章　占有　五十五丁
第一節　占有ノ種類及ヒ占有スルコトヲ得ベキ物　五十八丁
第二節　占有ノ取得　全
第三節　占有ノ効力　六十九丁
第四節　占有ノ喪失　六十六丁
第五章　地役　全
總則　全
第一節　法律ヲ以テ設定シタル地役　六十八丁
第一款　隣地ノ立入及ハ通行ノ權利　全
第二款　水ノ疏通、使用及ヒ引入　七十八丁
第三款　經界　七十二丁
第四款　圍障　七十四丁
第五款　互有　七十五丁
第六款　他人ノ所有地ニ對スル觀望及ヒ明取窓　七十九丁
第七款　或ル工作物ニ要スル距離　八十九丁
前諸款ニ共通ナル規則　八十一丁
第二節　人爲ヲ以テ設定シタル地役　八十四丁
第一款　地役ノ性質及ヒ種類　八十五丁
第二款　地役ノ設定　八十八丁
第三款　地役ノ効力　九十一丁
第四款　地役ノ消滅　九十四丁
第二部　人權及ヒ義務　全
總則　全
第一章　義務ノ原因　全
總則　全
第一節　合意　九十四丁
第一款　合意ノ種類　全
第二款　合意ノ成立及ヒ有効ノ條件　全
第三款　合意ノ効力　百三丁

第一則　當事者間及ヒ其承繼人間ノ合意ノ効力　百三丁
第二則　第三者ニ對スル合意ノ効力　百八丁
第四款　合意ノ解釋　百十三丁
第二節　不當ノ利得　百十四丁
第三節　不正ノ損害即チ犯罪及ヒ准犯罪　百十八丁
第四節　法律ノ規定　百二十二丁
第二章　義務ノ効力　仝丁
總則　仝丁
第一節　直接履行ノ訴權　百二十三丁
第二節　損害賠償ノ訴權　百二十七丁
第三節　擔保　百二十九丁
第四節　義務ノ諸種ノ體樣　仝丁
第一款　成立ノ單純、有期又ハ條件附ナル義務　百三十七丁
第二款　目的ノ單一、選擇又ハ任意ノ義務　仝丁
第三款　債權者及ヒ債務者ノ單數又ハ複數ナル義務　百四十二丁
第四款　性質又ハ履行ノ可分又ハ不可分ナル義務　百四十三丁
第三章　義務ノ消滅　百四十七丁
第一節　辨濟　百四十八丁
第一款　單純ノ辨濟　仝丁
第二款　辨濟ノ充當　百五十四丁
第三款　辨濟ノ提供及ヒ供託　百五十六丁
第四款　代位ノ辨濟　百五十八丁
第二節　更改　百六十一丁
第三節　合意上ノ免除　百六十六丁
第四節　相殺　百七十二丁
第五節　混同　百七十七丁
第六節　履行ノ不能　百七十八丁
第七節　銷除　百八十丁
第八節　廢罷　百八十四丁
第九節　解除　仝丁

○民法○財產編目錄

財産取得編目錄

第四章　自然義務　六百八十五丁
總則
第一章　先占　百八十八丁
第二章　添附　仝
第一節　不動産上ノ添附　百八十九丁
第二節　動産上ノ添附　仝
第三章　賣買　百九十一丁
第一節　賣買ノ通則　百九十五丁
第一款　賣買ノ性質及ヒ成立　仝
第二款　賣渡又ハ買受ノ無能力　百九十八丁
第三款　賣渡スコトヲ得サル物　二百一丁
第二節　賣買契約ノ効力　二百
第一款　所有權ノ移轉及ヒ危險　仝
第二款　賣主ノ義務　二百二丁
第一則　引渡ノ義務　仝
第二則　追奪擔保ノ義務　二百五丁
第三款　買主ノ義務　二百十三丁
第三節　賣買ノ解除及ヒ銷除　二百十五丁
第一款　義務ノ不履行ニ因ル解除　仝
第二款　受戻權能ノ行使　二百十六丁
第三款　隱レタル瑕疵ニ因ル賣買廢却訴權　二百十一丁
第四節　不分物ノ競賣　二百十四丁
第四章　交換　二百十五丁
第五章　和解　二百十六丁
第六章　會社　二百十八丁
第一節　會社ノ性質及ヒ設立　仝
第二節　社員ノ權利及ヒ義務　二百十九丁
第三節　會社ノ解散　二百三十七丁
第四節　會社ノ清算及ヒ分割　二百三十九丁
第七章　射倖契約　二百四十二丁
第一節　博戲及ヒ賭事　二百四十三丁
第二節　終身年金權　二百四十四丁
第一款　終身年金權ノ設定　仝

第二款　終身年金權ノ契約ノ効力　二百四十六丁
第三款　終身年金權ノ消滅　二百四十七丁
第八章　消費貸借及ヒ無期年金權　二百四十九丁
第一節　消費貸借　仝
第二節　無期年金權ノ契約　二百五十三丁
第九章　使用貸借　二百五十五丁
第一節　使用貸借ノ性質　仝
第二節　使用貸借ヨリ生シ又ハ其貸借ニ際シテ生スル義務　仝
第十章　寄託及ヒ保管　二百五十七丁
第一節　寄託　仝
第一款　任意寄託　二百五十八丁
第二款　急迫寄託及ヒ旅店寄託　二百六十一丁
第二節　保管　二百六十二丁
第十一章　代理　二百六十四丁
第一節　代理ノ性質　仝
第二節　代理人ノ義務　二百六十七丁
第三節　委任者ノ義務　二百六十九丁
第四節　代理ノ終了　二百七十一丁
第十二章　雇傭及ヒ仕事請負ノ契約　二百七十四丁
第一節　雇傭契約　仝
第二節　習業契約　二百七十六丁
第三節　仕事請負契約　二百七十八丁
第十三章　相續　二百八十三丁
總則　仝
第一節　家督相續　二百八十四丁
第一款　家督相續ノ通則　仝
第二款　家督相續人ノ順位　二百八十五丁
第三款　隱居家督相續ノ特別規則　二百八十八丁
第二節　遺產相續　二百八十九丁
第三節　國ニ屬スル相續　二百九十丁
第四節　相續ノ受諾又ヒ拋棄　仝
第一款　單純ノ受諾　二百九十一丁
第二款　限定ノ受諾　二百九十二丁

○民法○取得編目錄

第三款　抛棄　二百九十五丁
第四款　相續人ノ曠缺セル相續財産ノ處分　二百九十六丁
第十四章　贈與及ヒ遺贈　二百九十八丁
總則　仝
第一節　贈與又ハ遺贈ヲ爲シ又ハ收受スル能力　仝
第二節　贈與　二百九十九丁
第一款　贈與ノ方式　仝
第二款　贈與ノ廢罷　三百一丁
第三節　夫婦間ノ贈與ノ特例　三百二丁
第四節　遺贈　仝
第一款　遺言ノ方式　仝
第二款　遺言ノ特別方式　三百四丁
第三款　遺贈ヲ爲スコトヲ得ル財産ノ部分　三百六丁
第四款　遺言ノ効力及ヒ執行　三百七丁
第五款　遺言ノ廢罷及ヒ失効　三百十丁
第五節　包括ノ贈與又ハ遺贈ニ基ク不分財産ノ分割　三百十一丁
第一款　分割　三百十一丁
第二款　分割ノ効力及ヒ擔保　三百十四丁
第三款　分割ノ銷除　仝
第十五章　夫婦財産契約　三百十五丁
第一節　總則　仝
第二節　法定ノ制　仝

債權擔保編目錄

總則　三百十八丁
第一部　對人擔保　三百十九丁
第一章　保證　仝
第一節　保證ノ目的及ヒ性質　仝
第二節　保證ノ効力　三百二十三丁
第一款　保證人債權者間ノ保證ノ効力　仝
第二款　保證人債務者間ノ保證ノ効力　三百二十六丁
第三款　共同保證人間ノ保證ノ効力　三百三十丁
第三節　保證ノ消滅　三百三十二丁
第四節　法律上及ヒ裁判上ノ保證ニ特別ナル

規則
第二章　債務者間及ヒ債權者間ノ連帶　十二
總則　三百三十三丁
第一節　債務者間ノ連帶　仝
第一款　債務者間ノ連帶ノ性質及ヒ原因　三百三十四丁
第二款　債務者間ノ連帶ノ効力　仝
第三款　債務者間ノ連帶ノ終了　三百三十九丁
第四款　全部義務　三百四十丁
第二節　債權者間ノ連帶　三百四十一丁
第一款　債權者間ノ連帶ノ性質及ヒ原因　仝
第二款　債權者間ノ連帶ノ効力　仝
第三款　債權者間ノ連帶ノ終了　三百四十四丁
第三章　任意ノ不可分　三百四十五丁
第二部　物上擔保　三百四十六丁
第一章　留置權　三百四十七丁
第二章　動產質　三百四十八丁
第一節　動產質契約ノ性質及ヒ成立　仝
第二節　動產質契約ノ効力　三百五十一丁
第三章　不動產質　三百五十四丁
第一節　不動產質ノ目的、性質及ヒ組成　仝
第二節　不動產質ノ効力　三百五十六丁
第四章　先取特權　三百五十九丁
總則　仝
第一節　動產及ヒ不動產ニ係ル一般ノ先取特權　三百六十一丁
第一款　一般ノ先取特權ノ原因　仝
第一則　訟事費用ノ先取特權　三百六十二丁
第二則　葬式費用ノ先取特權　仝
第三則　最後疾病費用ノ先取特權　三百六十三丁
第四則　雇人給料ノ先取特權　仝
第五則　日用品供給ノ先取特權　仝
第二款　一般ノ先取特權ノ効力及ヒ順位　三百六十四丁
第二節　動產ニ係ル特別ノ先取特權　三百六十五丁
第一款　動產ニ係ル特別ノ先取特權ノ原因及ヒ目的　仝

第一則　不動産賃貸人ノ先取特權　三百六十六丁
第二則　種子及ヒ肥料ノ供給者ノ先取特權　三百六十九丁
第三則　農業稼人及ヒ工業職工ノ先取特權　仝
第四則　動産物保存者ノ先取特權　三百七十丁
第五則　動産物賣主ノ先取特權　仝
第六則　旅店主人ノ先取特權　三百七十一丁
第七則　舟車運送營業人ノ先取特權　仝
第八則　職務上ノ所爲ニ對スル債權者ノ先取特權　三百七十二丁
第九則　保證金貸主ノ先取特權　仝
第二款　動産ニ係ル特別ノ先取特權ノ順位　仝
第三節　不動産ニ係ル特別ノ先取特權　三百七十四丁
第一款　不動産ニ係ル特別ノ先取特權ノ原因及ヒ目的　仝
第一則　讓渡人ノ先取特權　三百七十五丁
第二則　共同分割者ノ先取特權　三百七十六丁
第三則　工匠、技師及ヒ工事請負人ノ先取特權　三百七十八丁
第四則　金錢貸主ノ先取特權　三百七十九丁
第二款　債權者間ニ於ケル不動産ノ特別先取特權ノ効力及ヒ順位　三百八十丁
第三款　第三所持者ニ對スル不動産先取特權ノ効力　三百八十五丁
第五章　抵當
第一節　抵當ノ性質及ヒ目的　三百八十七丁
第二節　抵當ノ種類　仝
第一款　法律上ノ抵當　三百九十丁
第二款　合意上ノ抵當　仝
第三款　遺言上ノ抵當　三百九十三丁
第三節　抵當ノ公示　仝
第一款　登記ノ條件及ヒ期間　仝
第二款　登記ノ抹消、減少及ヒ正誤　三百九十六丁
第四節　債權者間ノ抵當ノ効力及ヒ順位　四百丁
第五節　第三所持者ニ對スル抵當ノ効力　四百四丁

總則
第一款　抵當債務ノ辨濟　十六
第二款　滌除　仝
第三款　財産檢索ノ抗辯　四百五丁
第四款　委棄　四百六丁
第五款　競賣及ヒ所有權徵收　四百十三丁
第六節　登記官吏ノ責任　四百十四丁
第七節　抵當ノ消滅　四百十五丁
證據編目錄　四百十八丁
第一部　證據　四百十九丁
總則
第一章　判事ノ考察　四百二十三丁
第一節　當事者申述ノ聽取、係爭物並ニ證書外ノ書類ノ調査及ヒ法律ノ解釋　仝
第二節　臨檢　四百二十四丁
第三節　鑑定　仝
第二章　直接證據　四百二十五丁
第一節　私書　四百二十六丁
第二款　私署證書　四百二十七丁
第二款　署名、捺印セサル證書　四百二十二丁
第二節　口頭自白　四百二十三丁
第一款　裁判上ノ自白　仝
第二款　裁判外ノ自白　四百二十五丁
第三節　公正證書　四百二十六丁
第四節　反對證書　四百二十七丁
第五節　追認證書　四百二十八丁
第六節　證書ノ謄本　四百三十九丁
第七節　證人ノ陳述　四百四十一丁
第八節　世評　四百四十六丁
第三章　間接證據　仝
第一節　法律上ノ推定　仝
第一款　公益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定　四百四十七丁
第二款　私益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定　四百四十九丁
第三款　輕易ナル法律上ノ推定　四百五十丁

第二節　事實ノ推定　四百五十一丁
第二部　時効
第一章　時効ノ性質及ヒ適用　仝
第二章　時効ノ抛棄　仝
第三章　時効ノ中斷　四百五十三丁
第四章　時効ノ停止　四百五十四丁
第五章　不動産ノ取得時効　四百六十丁
第六章　動産ノ取得時効　四百六十三丁
第七章　免責時効　四百六十四丁
第八章　特別ノ時効　四百六十六丁
附則　四百六十七丁
四百七十一丁

目錄畢

民法

財産編

總則

財産及ヒ物ノ區別

第一條　財産ハ各人又ハ公私ノ法人ノ資産ヲ組成スル權利ナリ

此權利ニ二種アリ物權及ヒ人權是ナリ

第二條　物權ハ直ナニ物ノ上ニ行ハレ且總テノ人ニ對抗スルヿトヽ得ヘキモノニシテ主タル有リ從タル有リ

主タル物權ハ之ヲ左ニ掲ク

第一　完全又ハ將飲ノ所有權

第二　用益權、使用權及ヒ住居權

第三　賃借權、永借權及ヒ地上權

第四　占有權

從タル物權ハ之ヲ左ニ掲ク

第一　地役權

第二　留置權

第三　動産質權

第四　不動産質權

第五　先取特權

第六　抵當權

右地役權ハ所有權ノ從タル物權ニシテ留置權以下ハ人權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權ナリ

第三條　人權卽チ債權ハ定マリタル人ニ對シ法律ノ認ムル原因ニ由リテ其負擔スル作爲又ハ不作爲ノ義務ヲ盡サシムル爲メ行ハルヽモノニシテ亦主タル有リ從タル有リ

從タル人權ハ債權ノ擔保ヲ爲ス保證及ヒ連帶ノ如シ

第四條　著述者ノ著書ノ發行、技術者ノ技術物ノ製出又ハ發明者ノ發明ノ施用ニ付テノ權利ハ特別法ヲ以テ之ヲ規定ス

第五條　權利ハ物權ト人權トヲ問ハス目的物ノ種種ノ區別ニ從ヒテ其樣ヲ變ス此區別ハ物ノ性質人ノ意思又ハ法律ノ規定ヨリ生ス卽チ下ニ揭クル如シ

第六條　物ニ有體ナル有リ無體ナル有リ

有體物トハ人ノ感官ニ觸ルヽモノヲ謂フ卽チ地所、建物、動物、器具ノ如シ

無體物トハ智能ノミヲ以テ理會スルモノヲ謂フ卽チ左ノ如シ

第一　物權及ヒ人權

第二　著述者ハ技術者及ヒ發明者ノ權利

第三　解散シタル會社又ハ清算中ナル共通ニ屬スル財產及ヒ債務ノ包括

第七條　物ハ其性質ニ因リ又ハ所有者ノ用方ニ因リ遷移スルコトヲ得ルト否トニ從ヒテ動產タリ不動產タリ此他法律ノ規定ニ因リテ動產タリ不動產タル物アリ

第八條　性質ニ因ル不動產ハ左ノ如シ

第一　耕地ハ宅地其他土地ノ部分

第二　池沼、溜井、溝渠、堀割、泉源

第三　土手、機橋其他此類ノ工作物

第四　土地ニ定著シタル浴場、水車、風車又ハ水力、蒸氣ノ機械

第五　樹林、竹木其他ノ植物但第十二條ニ記載シタルモノハ此限ニ在ラス

第六　果實及ヒ收穫物ノ未タ土地ヨリ離レサルモノ但第十二條ニ記載シタルモノハ此限ニ在ラス

第七　鑛物、坑石、泥炭及ヒ肥料土ノ未タ土地ヨリ離レサルモノ

第八　建物及ヒ其外部ノ戸扉但第十二條ニ記載シタルモノハ此限ニ在ラス

第九　墻、籬、柵

第十　水ノ出入又ハ瓦斯、温氣ノ引入ノ爲メ土地又ハ建物ニ附著シタル筒管

第十一　土地又ハ建物ニ附著シタル電氣機械

此他總テ性質ニ因リテ移動ス可キモノト雖モ建物ニ必要ナル附屬物

第九條　動産ノ所有者カ其土地又ハ建物ノ利用、便益若クハ粧飾ノ爲メニ永遠又ハ不定ノ時間其土地又ハ建物ニ備附ケタル動産ハ性質ノ何タルヲ問ハス用方ニ因ル不動産タリ即チ左ノ如シ但反對ノ證據アルトキハ此限ニ在ラス

第一　土地ノ耕作、利用又ハ肥料ノ爲メニ備ヘタル獸畜

第二　耕作用ニ備ヘタル器具、種子及ヒ藁草及ヒ肥料

第三　養蠶場ニ備ヘタル蠶種

第四　樹木ノ支持ニ備ヘタル柵架及ヒ抗柱

第五　土地ニ生スル物品ノ化製ニ備ヘタル器具

第六　工業場ニ備ヘタル機械及ヒ器具

第七　不動産ノ常用ニ備ヘタル小舟但其水流カ公有ニ係リ又ハ一他人ニ屬スルトキモ亦同シ

第八　園庭ニ裝置シタル石燈籠、水鉢及岩石

第九　建物ニ備ヘタル壁、建具其他ノ補足物及ヒ毀損スルニ非サレハ取離スコトヲ得サル區額、玻璃鏡、彫刻物其他各種ノ粧飾物

第十　修繕中ノ建物ヨリ取離シテ再ヒ之ニ用ユ可キ材料

第十條　法律ノ規定ニ因ル不動産ハ左ノ如シ

第一　上ニ列記シタル不動産ノ上ニ存スル物權

第二　不動産ノ上ニ存スル物權ヲ取得セントシ又ハ取回セントスル人權

第三　建築師ノ材料ヲ以テ建物ヲ築造セシムル賃權

第四　動産賃權ニシテ法律カ不動産ト爲シ又ハ各人カ法律ノ規定ニ依リテ不動産ト爲シタルモノ

第十一條　自力又ハ他力ニ因リテ遷移スルコトヲ得ル物ハ性質ニ因ル動産タリ但第八條及ヒ第九條ニ記載シタルモノハ此限ニ在ラス

第十二條　假ニ土地ニ定著セシメタル物ハ用方ニ因ル動産タリ即チ左ノ如シ

第一　建築ノ足場及ヒ支柱

第二　建築ヲ爲スノ間其用ニ備ヘタル小屋

第三　植木師及ヒ園丁カ賣ル爲メニ培養シ又ハ保存シタル草木

第四　取毀ツ爲メニ讓渡シタル樹木及ヒ收穫物

爲メニ讓渡シタル建物其他ノ工作物又ハ收去スル

第十三條　法律ノ規定ニ因ル動産ハ左ノ如シ

第一　上ニ指定シタル動産ノ上ニ存スル物權

第二　有體動産ヲ取得シ又ハ取回セントスル債權但不動産ヲ以テ其擔保ニ充ツルトキモ亦同シ

第三　所爲ヲ成就セシメ又ハ權利ノ行使ヲ止メシムル債權縱令其權利カ不動産タルトキモ亦同シ

第四　法人タル會社存立ノ間社員カ其會社ニ對シテ有スル權利縱令不動産カ會社ニ屬スルトキモ亦同シ

第五　著述者、技術者及ヒ發明者ノ權利

第十四條　解散シタル會社又ハ精算中ナル共通ニ屬スル財産ノ一分ニ付テ有スル權利ノ動産タリ不動産タル性質ハ分割ニ於テ各利害關係人ノ受クル財産ノ性質ニ因リテ定マル

當事者ノ一方ノ選擇ニ任スル動産又ハ不動産ヲ目的トスル擇一又ハ任意債權ノ性質モ亦其辨濟ニ付キ選擇シタル物ノ性質ニ因リテ定マル

第十五條　物ハ他ニ附屬セスシテ完全ナル効用ヲ爲スト否トニ從ヒテ主タル有リ從タル有リ

用方ニ因ル不動産ハ性質ニ因ル不動産ノ從ナリ地役ハ要役地ノ從ナリ債權ノ擔保ハ債權ノ從ナリ

第十六條　物ハ左ノ如クノ之ヲ視ルコトヲ得

第一　特定物即チ某家、某田、某獸ノ如キ殊別ナル物

第二　定量物即チ金幾圓、米幾石、布幾反ノ如キ數量尺度ヲ以テ算フル物

第三　聚合物即チ群書、書庫ノ書籍、店舗ノ商品ノ如キ增減シ得ヘキ多少類似ナル物

第四　包括財産即チ相續ノ總動産若クハ總不動産又ハ相續ノ全部若クハ一分ノ如キ資産ノ全部又ハ一分ヲ組成スル物

第十七條　物ハ其性質ニ因リ一回ノ使用ニテ消費スルト否トニ從ヒテ消費物タリ不消費物タリ

第十八條　物ハ當事者ノ意思又ハ法律ノ規定ニ因リ同種ノ物ヲ以テ代フルコトヲ得ルト否トニ從ヒテ代替物タリ不代替物タリ

定量物及ヒ一回ノ使用ニテ消費スル物ハ概シテ之ヲ當事者ノ意思ニ因ル代替物ト看做ス

第十九條　物ハ其性質、當事者ノ意思又ハ法律ノ規定ニ因リ形體上又ハ智能上分割スルコトヲ得ルト否トニ從ヒテ可分物タリ不可分物タリ

或ル地役及ヒ或ル作爲又ハ不作爲ノ義務ハ性質ニ因ル不可分物ナリ

物ノ一分ノ供與ヲ以テ合意ノ目的タル便益ヲ與フルコト能ハサルトキハ其物ハ當事者ノ意思ニ因ル不可分物ナリ

抵當及ヒ債權ノ物上擔保ハ法律ノ規定ニ因ル不可分物ナリ

第二十條　物ハ所有ニ屬スルモノ有リ所有ニ屬セサルモノ有リ

所有ニ屬スル物トハ公私ノ資產ノ部分ヲ爲スモノヲ謂フ

所有ニ屬セサル物トハ無主又ハ公共ノモノヲ謂フ

第二十一條　公ノ法人ニ屬スル物ニ公有及ヒ私有ノ二種アリ

第二十二條　公ノ法人ニ屬シ國用ニ供シタル物ハ公有ノ部分ヲ爲ス

即チ左ノ如シ

第一　國領ノ海及ヒ海濱但海濱ハ春分、秋分、最高潮ノ到ル處ヲ以テ限ト爲ス

第二　道路、舟若クハ筏ノ通スル可キ川又ハ堀割及ヒ其床地

第三　城砦、壘壁其他陸海防禦ノ工作物

第四　軍用ノ工廠、船艦、兵器、機械其他ノ物品

第五　官廳ノ建物

第二十三條　公ノ法人カ各人ト同一ノ名義ニテ所有スル物ニシテ金錢ニ見積ルコトヲ得ル收入ヲ生ス可キモノハ其私有ノ部分ヲ爲ス

即チ國、府縣、市町村有ノ海濱、樹林、牧場ノ如シ

所有者ナキ不動產及ヒ相續人ナクシテ死亡シタル者ノ遺產ハ當然國ニ屬ス

第二十四條　無主物トハ何人ニモ屬セスト雖モ所有權ノ目的ト爲ルコトヲ得ルモノヲ謂フ即チ遊樂ノ物品、山野ノ鳥獸、河海ノ魚介ノ如シ

第二十五條　公共物トハ何人ノ所有ニモ屬スルコトヲ得スシテ總テノ人ノ使用スルコトヲ得ルモノヲ謂フ卽チ空氣、光線、流水、大洋ノ如シ

第二十六條　物ハ私ノ所有權又ハ債權ノ目的ト爲ルコトヲ得ルト否トニ從ヒテ融通物タリ不融通物タリ

公ノ秩序ノ爲メ法律ニ於テ處分ヲ禁シタル物及ヒ公有ノ財產ハ不融通物ナリ

第二十七條　物ハ讓渡スコトヲ得ルモノ有リ讓渡スコトヲ得サルモノ有リ

所有權ヨリ支分シタル使用權又ハ住居權、要役地ヨリ分離セルモノト看做シタル地役及ヒ政府ノ與ヘタル開坑ノ特許其他ノ特權ハ概シテ融通物ナリト雖モ讓渡スコトヲ得サルモノナリ

第二十八條　物ハ法律ニ定メタル條件ヲ具備スル占有ニ附著セル取得ノ推定ヲ受クルト否トニ從ヒテ時効ニ罹ルコトヲ得ルモノ有リ時効ニ罹ルコトヲ得サルモノ有リ

第二十九條　物ハ其所有者ノ債權者カ强制賣却ヲ請求スルヿヲ得ルト否トニ從ヒテ差押フルヿヲ得ルモノ有リ差押フルヿヲ得サルモノ有リ

不融通物、讓渡スコトヲ得サル物其他法律ノ規定又ハ人ノ處分ニヲ差押ヲ禁シタル物ハ差押フルコトヲ得サルモノナリ卽チ無償ニヲ設定シタル終身年金權ノ如シ

第一部　物權

第一章　所有權

第三十條　所有權トハ自由ニ物ノ使用、收益及ヒ處分ヲ爲ス權利ヲ謂フ

此權利ハ法律又ハ合意又ハ遺言ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ制限スルコトヲ得ス

第三十一條　不動產ノ所有者ハ適法ニ認メ及ヒ宣言シタル公益ニ因リ且公用徵收法ニ從ヒテ定メタル償金ノ拂渡ヲ豫メ受クルニ非サレハ其所有權ノ讓渡ヲ强要セラルヽコト無シ

動產ノ公用徵收ハ每回定ムル特別法ニ依ルニ非サレハ之ヲ行フヿヲ得ス

國又ハ官廳ニ屬スル先買權及ヒ徵發令ヲ以テ定メタル物ノ徵發又ハ凶災ノ時ニ行フ物ノ徵求ニ付テハ本條ノ例ヲ用ヰス

第三十二條　所有者ハ償金ヲ得ルニ於テハ公益工事ノ便利ノ爲メ所有物ノ一時ノ占據ヲ必要セラルヽコト有リ

第三十三條　物料ノ採掘、道路ノ劃線、樹木ノ採伐、水其他ノ收取ニ付キ一般又ハ一地方ノ公益ノ爲メ設ケタル地役ハ行政法ヲ以テ之ヲ規定ス

第三十四條　土地ノ所有者ハ其地上ニ一切ノ築造、栽植ヲ爲シ又ハ之ヲ廢スルコトヲ得

又其地下ニ一切ノ開鑿及ヒ採掘ヲ爲スコトヲ得

右熟レノ場合ニ於テモ公益ノ爲メ行政法ヲ以テ定メタル規則及ヒ制限ニ從フコトヲ要ス

此他相隣地ノ利益ノ爲メ所有權ノ行使ニ付シタル制限及ヒ條件ハ地役ノ章ニ於テ之ヲ規定ス

第三十五條　鑛物ノ所有權及ヒ其試掘若クハ開坑ハ特別法ヲ以テ之ヲ規定ス

第三十六條　所有者其物ノ占有ヲ妨ケラレ又ハ奪ハレタルトキハ所持者ニ對シ本權訴權ヲ行フコトヲ得但動產及ヒ不動產ノ時効ニ關シ證據編ニ記載シタルモノハ此限ニ在ラス

又所有者ハ第百九十九條乃至第二百十二條ニ定メタル規則ニ從ヒ占有ニ關スル訴權ヲ行フコトヲ得

第三十七條　數人一物ヲ共有スルトキハ持分ノ均不均ニ拘ハラス各共有者其物ノ全部ヲ使用スルコトヲ得但其用方ニ從ヒ且他ノ共有者ノ使用ヲ妨ケサルコトヲ要ス

各共有者ノ持分ハ之ヲ相均シキモノト推定ス但反對ノ證據アルトキハ此限ニ在ラス

天然又ハ法定ノ果實及ヒ產出物ハ各共有者ノ權利ノ限度ニ應シ定期ニ於テ之ヲ分割ス

各共有者ハ其物ノ保存ニ必要ナル管理其他ノ行爲ヲ爲スヿヲ得

各共有者ハ其持分ニ應シテ諸般ノ負擔ニ任ス

右規定ハ使用ニ收益又ハ管理ヲ格別ニ定ムル合意ヲ妨ケス

第三十八條　處分權ニ付テハ各共有者ハ他ノ共有者ノ承諾アルニ非サレハ其物ノ形樣ヲ變スルコトヲ得ス又自己ノ持分外ニ物權ヲ付スルコトヲ得ス

共有者ノ一人其持分ヲ讓渡シタルトキハ讓受人ハ他ノ共有者ニ對シ讓渡人ニ代ハリ其地位ヲ有ス

第三十九條　各共有者ハ如何ナル合意アルモ常ニ共有物ノ分割ヲ請求スルコトヲ得

然レトモ共有者ハ五个年ヲ超エサル定期ノ時間分割セサルヲ約スルコトヲ得

此合意ハ何時ニテモ之ヲ更新スルコトヲ得但其時間ハ亦五个年ヲ超ユルコトヲ得ス

右規定ハ數箇ノ所有地ニ共通ナル通路、井戸、籬壁、溝渠ノ互有ヨリ生スル共有權ニ之ヲ適用セス

第四十條　數人ニテ一家屋ヲ區分シ各其一部分ヲ所有スルトキハ相互ノ權利及ヒ義務ハ左ノ如クニ之ヲ規定ス

各所有者ハ離隔セル所有物ノ如クニ自己ノ持分ヲ處分スルコトヲ得

諸般ノ租稅及ヒ建物並ニ其附屬物ノ共用ノ部分ニ係ル大小修繕ハ各自ノ持分ノ價格ニ應シテ之ヲ負擔ス

各自ハ己レニ屬スル部分ニ係ル費用ヲ一人ニテ負擔ス

第四十一條　所有權ハ當事者ノ間ニ於ケルモ第三者ニ對スルモ本編及ヒ財產取得編ニ記載シタル原因及ヒ方法ニ依リ之ヲ取得シ保存シ及ヒ轉付ス

主タル物ノ處分ハ從タル物ノ處分ヲ滯フ但反對ノ證據アルトキハ此限ニ在ラス

第四十二條　所有權ハ左ノ諸件ニ因リテ消滅ス

第一　任意又ハ强要ノ讓渡

第二　他人ノ物ニ自己ノ物ノ添附

第三　法律ニ依リテ宣告シタル沒收

第四　取得ノ解除、銷除又ハ廢罷

第五　物ヲ處分スル能力アル所有者ノ任意ノ遺棄

第六　物ノ全部ノ毀滅

第四十三條　動產及ヒ不動產ノ所有權ノ取得及ヒ消滅ニ關スル時效ノ性質及ヒ効力ニ付テハ證據編ノ規定ニ從フ

第二章　用益權及ヒ住居權

第一節　用益權

第四十四條　用益權トハ所有權ノ他人ニ屬スル物ニ付キ其用方ニ從ヒ其元質本體ヲ變スルコト無ク有期ニテ使用及ヒ收益ヲ爲スノ權利ヲ謂フ

第一款　用益權ノ設定

第四十五條　用益權ハ法律又ハ人意ニ因リテ設定スルモノトス

法律ニ因ル用益權ノ設定ハ別ニ定ムル法律ノ規定ニ從フ

人意ニ因ル用益權ノ設定ハ所有權ノ取得及ヒ移轉ニ關スル規則ニ從フ

又用益權ハ有償又ハ無償ニテ讓渡シタル財產ノ上ニ之ヲ留存シテ設定スルコトヲ得

時效ヲ以テ用益權ノ取得ヲ證スル條件ハ時效ヲ以テ完全ノ所有權ノ取得ヲ證スル條件ニ同シ

第四十六條　用益權ハ動產ト不動產ト有體物ト無體物トヲ問ハス一切ノ融通物ノ上ニ之ヲ設定スルコトヲ得

又用益權ハ他ノ用益權ノ上、終身年金權ノ上又ハ包括權原ニテ資產ノ上ニ之ヲ設定スルコトヲ得

第四十七條　用益權ハ始時若クハ終時ヲ定メ又ハ期限ヲ定メスシテ之ヲ設定スルコトヲ得

又用益權ハ其始時又ハ終時ヲ未必條件ノ成就ニ繫ケテ之ヲ設定スルコトヲ得

右孰レノ場合ニ於テモ其期間ハ用益者ノ終身ヲ超ユルコトヲ得ス

第四十八條　用益權ハ一人又ハ數人ノ終身ヲ期シテ之ヲ設定スルコトヲ得數人ノ終身ヲ期シテ設定シタルトキハ數人同時ニ又ハ順次ニ之ヲ行フ

右孰レノ場合ニ於テモ用益權ハ其權利發開ノ時既ニ出生シ又ハ胎內ニ在ル者ノ爲メニスルニ非サレハ之ヲ設定スルコトヲ得ス

第二款　用益者ノ權利

第四十九條　用益者ハ其權利ノ發開シタルトキ若シ始時ノ定アラハ其期限ノ到來シタルトキハ次款ニ定メタル不動產形狀書、動產目錄ヲ作リ及ヒ保證ヲ立ツル義務ヲ履行シタル後其用益權ノ存スル物ノ占有ヲ要求スルコトヲ得

用益者ハ用益物ヲ其現狀ニテ受取ル可シ修繕又ハ恰好ヲ求ムルコトヲ得ス但權利發開ノ後設定者若クハ其相續人ノ過失ニ因リ又ハ發開ノ前ト雖モ其惡意ニ因リテ用益物ヲ毀損シタルトキハ此限ニ在ラス

第五十條　用益者カ收益ヲ始ムルコトヲ得ルヨリ以後ニ虛有者ノ收取シタル果實ハ用益者ニ屬ス縱令用益者カ自ラ其收益ヲ遲延シタ

ルモ亦同シ但其果實ノ收取及ヒ保存ノ費用ヲ盧有者ニ償還スルコトヲ要ス

用益者ハ收益ヲ始ムル時根枝ニ由リテ土地ニ附著スル果實ヲ其成熟ニ至リ收取スル權利ヲ有ス但耕耘、種子、栽培ノ費用ヲ盧有者ニ償還スルコトヲ要セス

第五十一條　用益者ハ其權利ノ繼續間用益物ヨリ生スル天然及ヒ法定ノ一切ノ果實ニ付キ所有者ニ同シキ權利ヲ有ス

第五十二條　天然ノ果實ハ自然ニ生シタルト栽培ニ因リテ得タルトヲ問ハス土地ヨリ之ヲ離シタル時直チニ用益者ニ屬ス縱令事變又ハ盜奪ニ因リテ離レタルモ亦同シ

然レトモ果實カ其成熟前ニ土地ヨリ離レ且用益權カ通常ノ收取季節前ニ消滅シタルトキハ其利益ハ盧有者ニ歸ス

第五十三條　獸畜ノ子ハ其產出ノ時ヨリ用益者ニ屬ス乳汁、肥料及ヒ剪毛季節ニ剪取シタル羢毛モ亦同シ

第五十四條　法定ノ果實ハ其拂渡時期ノ如何ヲ問ハス收益ヲ始ムルコトヲ得ル時ヨリ用益權ノ消滅スルマテ用益者日割ヲ以テ之ヲ取得ス

法定ノ果實ハ用益物ニ付キ第三者ヨリ金錢ヲ以テ拂フ可キ納額即チ土地、建物ノ借賃、借入金ノ利息、會社ノ配當金、年金權ノ年金、石坑ノ借料ノ類ナリ

第五十五條　用益物中ニ金穀其他日用品ノ如キ消費スルニ非サレハ使用シ及ヒ收益スルコトヲ得サル動產アルトキハ用益者ハ之ヲ消費シ又ハ讓渡スコトヲ得但用益權消滅ノ時同數量、同品質ノ物ヲ返還シ又ハ收益ヲ始ムル以前ニ評價ヲ爲シタルニ於テハ其代價ヲ返還スルコトヲ要ス

右規定ハ用益權ヲ設定シタル商業資產ヲ組成スル商品ト其他ノ代替物トニ之ヲ適用ス

第五十六條　住居用ノ器具其他使用ニ因リテ毀損ス可キ用益物ニ付テハ用益者ハ其用方ニ從ヒテ之ヲ使用シ且用益權消滅ノ時其現狀ニテ之ヲ返還スルコトヲ得但用益者ノ過失又ハ懈怠ニ因リテ重大ノ毀損ヲ致シタルトキハ此限ニ在ラス

又賃貸スルコトヲ得ヘキ性質ノ用益物ニ非サレハ用益者ハ自己ノ責任ヲ以テ之ヲ賃貸スルコトヲ得ス

第五十七條　終身年金權ノ用益者ハ年金權者ト同シク其年金ヲ收取

スルノ權利ヲ有ス但反對ノ條件アルトキハ此限ニ在ラス

既ニ設定シタル用益權ニ付キ更ニ用益權ヲ得タル者ハ原用益者ニ屬スル一切ノ權利ヲ行フ

第五十八條　種類及ヒ員數ノミヲ以テ定メタル苗群ノ用益者ハ保存ヲ要セサル部分ヲ毎年處分スルコトヲ得但其子ヲ以テ全數ヲ保持スルコトヲ要ス

第五十九條　用益者ハ大小木ノ樹林及ヒ竹林ニ付テハ從來ノ所有者ノ慣習及ヒ採伐方ニ從ヒ定期ノ採伐ヲ爲シテ收益ス

採伐方ノ未タ確ニ定マラサルトキハ用益者ハ近傍ノ重モナル所有者又ハ國、府縣、市町村ニ屬スル樹林ノ慣習ニ從フ但採伐スル一个月前ニ虛有者ニ豫告スルコトヲ要ス

第六十條　從來ノ所有者ノ定期採伐ヲ爲ササリシ保存木及ヒ大樹木ニ付テハ用益者ハ其樹木ノ定期產出物ノミヲ得ル權利ヲ有ス

然レトモ用益權ノ存スル建物ノ大修繕ヲ要スルトキハ用益者ハ枯レ又ハ倒レタル大樹木ヲ之ニ用ユルコトヲ得若シ生木ヲ要スルトキハ虛有者立會ニテ其必要ヲ認セシ後之ヲ採伐スルコトヲ得

第六十一條　用益者ハ用益樹木ヲ支持スルニ必要ナル棚架、支柱又ハ杭杙ニ用ユル竹木ヲ何時ニテモ其用益地ノ樹林及ヒ竹林ヨリ採取スルコトヲ得

第六十二條　用益者ハ用益樹木ヲ植續キ又ハ植增ス爲メ其用益地ノ苗床ヨリ苗木ヲ採取スルコトヲ得

又用益者ハ其苗床ノ苗木ヲ定期ニ賣ルコトヲ得但從來此用方アルトキ又ハ其生殖カ用益地ノ需用ニ餘ルトキニ限ル

右孰レノ場合ニ於テモ用益者ハ苗芽又ハ種子ヲ以テ苗床ヲ保持スルコトヲ要ス

第六十三條　用益地ニ既ニ採掘ヲ始メ且特別法ニ從フヲ要セサル石類、石灰類其他ノ物ノ石坑アルトキハ用益者ハ從來ノ所有者ノ如シ其收益ヲ爲ス

右石坑ヲ未タ採掘セス又ハ其採掘ヲ廢止シタルトキハ用益者ハ其用益物中ノ建物、牆壁其他ノ部分ノ大小修繕ニ必要ナル材料ノミヲ採取スルコトヲ得但其土地ヲ損傷セス且第六十條ニ記載シタル如ク豫メ其必要ヲ證スルコトヲ要ス

又用益者ハ前二項ノ區別ニ從ヒ其用益地ノ泥炭及ヒ肥料土ニ付キ收益スルコトヲ得

第六十四條　用益者ハ用益不動産ニ於テ第三者ノ發見シタル埋藏物ニ付キ權利ヲ有セス

第六十五條　用益者ハ用益地ニ於テ狩獵及ヒ捕漁ヲ爲ス權利ヲ有ス

第六十六條　用益者ハ用益不動産ニ屬スル一切ノ地役權ヲ行フ若シ不使用ニ因リテ之ヲ消滅セシメタルトキハ虛有者ニ對シテ其責ニ任ス

第六十七條　用益者ハ虛有者及ヒ第三者ニ對シ直接ニ其收益權ニ關スル占有及ヒ本權ノ物上訴權ヲ行フコトヲ得

又用益者ハ用益不動産ノ働方又ハ受方ノ地役ニ付キ自己ノ權利ノ範圍内ニ於テ占有ニ係ルト本權ニ係ルトヲ問ハス要請又ハ拒却ノ訴權ヲ行フコトヲ得

右孰レノ場合ニ於テモ第九十八條ノ規定ヲ適用ス

第六十八條　用益者ハ有償又ハ無償ニテ其用益權ヲ讓渡シ賃貸シ又ハ用益ニ付スルコトヲ得且用益物カ抵當ト爲ル可キモノナルトキハ其權利ヲ抵當ト爲スコトヲ得

如何ナル場合ニ於テモ用益者ノ付與シタル權利ハ其用益權ト同シキ期間、制限及ヒ條件ニ從フ但賃貸借ノ期間及ヒ其更新ニ付テハ第百十九條乃至第百二十二條ノ規定ヲ適用ス

第六十九條　用益者ハ用益權消滅ノ時猶ホ土地ニ附著シテ其收取セサリシ果實及ヒ產出物ノ爲メ償金ヲ求ムル權利ヲ有セス

又用益物ニ改良ヲ加ヘテ價格ヲ增シタルトキト雖モ其改良ノ爲メ虛有者ニ對シテ償金ヲ求ムルコトヲ得ス

用益者ハ自己ノ設ケタル建物、樹木、粧飾物其他ノ附加物ヲ收去スルコトヲ得但其用益物ヲ舊狀ニ復スルコトヲ要ス

第七十條　用益權消滅ノ時用益者又ハ其相續人カ前條ニ從ヒテ收去スルコトヲ得ヘキ建物及ヒ樹木等ヲ賣ラントスルトキハ虛有者ハ鑑定人ノ評價シタル現時ノ代價ヲ以テ先買スルコトヲ得

用益者ハ虛有者ニ右先買權ヲ行フヤ否ヤヲ述フ可キノ催告ヲ爲シ其後十日内ニ虛有者カ先買ノ陳述ヲ爲サス又ハ之ヲ拒絶シタルトキニ非サレハ其收去ニ著手スルコトヲ得ス

虛有者カ先買ノ陳述ヲ爲シタリト雖モ鑑定ノ後裁判所ノ處決ノ確定シタル時ヨリ一个月内ニ其代金ヲ辨濟セサルトキハ先買權ヲ失フ但損害アルトキハ賠償ノ責ニ任ス

用益者又ハ其相續人ハ代金ノ辨濟ヲ受クルマテ建物ヲ占有スルコ

トヲ得

第三款　用益者ノ義務

第七十一條　用益者ハ用益物ノ占有ヲ始ムル前ニ虛有者ト立會ヒ又ハ合式ニ之ヲ召喚シ完全精確ニ動產ノ目錄、不動產ノ形狀書ヲ作ルコトヲ要ス

第七十二條　當事者カ雙方出會シ共ニ能力アルトキ又ハ有效ニ代理セラレタルトキハ目錄及ヒ形狀書ハ私署ヲ以テ之ヲ作ルコトヲ得

反對ノ場合ニ於テハ公吏之ヲ作ル

第七十三條　目錄ニ記シタル代替物ノ評價ハ賣買ニ同シキ效力ヲ有ス但反對ノ明言アルトキハ此限ニ在ラス不代替物ノ評價ハ賣買ニ同シキ効力ヲ有スルコトヲ目錄ニ明示スルニ非サレハ其效力ヲ有セス

有償ニテ用益權ヲ設定シタルトキハ目錄及ヒ評價ノ費用ハ用益者虛有者各其半額ヲ負擔シ無償ノ場合ニ於テハ用益者之ヲ負擔ス

第七十四條　用益權設定ノ時用益者ノ目錄又ハ形狀書ヲ作ル義務ヲ免除シタリト雖モ虛有者ハ常ニ用益者ト立會ヒ又ハ合式ニ之ヲ召喚シ自費ヲ以テ目錄又ハ形狀書ヲ作ルコトヲ得但此事ニ付キ虛有者ハ十一日以上收益ヲ妨クルコトヲ得ス

第七十二條及ヒ第七十三條第一項ハ右ノ場合ニ之ヲ適用ス

第七十五條　用益者ハ目錄又ハ形狀書ヲ作ル義務ヲ履行セスシテ收益ヲ始メタルトキハ完好ナル形狀ニテ不動產ヲ受取リタリトノ推定ヲ受ク但反對ノ證據アルトキハ此限ニ在ラス

動產ニ付テハ虛有者ハ通常ノ證據ハ勿論世評ヲ以テ其實體及ヒ價格ヲ證スルコトヲ得

第七十六條　用益者ハ用益權消滅ノ時負擔ス可キ返還及ヒ償金ノ爲メ保證人ヲ立テ又ハ他ノ相應ナル擔保ヲ供スルニ非サレハ收益ヲ始ムルコトヲ得ス

第七十七條　擔保ノ性質ニ付キ當事者ノ間ニ議協ハサルトキハ裁判所ハ顯然資力アル第三者ノ引受ヲ認許シ又ハ供託所若クハ當事者ノ認諾スル第三者ニ金錢若クハ有價物ヲ寄託スルヲ認許シ又ハ質若クハ抵當ヲ認許スルコトヲ得

第七十八條　擔保ス可キ金額ニ付テハ裁判所ハ用益權ノ直接ニ存スル金額未滿ニ其金額ヲ定ムルコトヲ得ス又動產ノ評價カ賣買ニ同シキ效力ヲ有スルトキハ其評價ノ全額未滿ニ之ヲ定ムルコトヲ得

ス又評價カ賣買ニ同シキ效力ヲ有セサルトキハ其評價ノ半額未滿ニ之ヲ定ムルコトヲ得ス

然レトモ右ノ末ノ場合ニ於テ若シ用益者カ評價セシ動產ニ係ル權利ヲ用益權ノ繼續間ニ讓渡シ又ハ賃貸シタルトキハ虛有者ハ常ニ評價ノ全額ニ對シテ擔保ヲ要求スルコトヲ得

不動產ノ擔保金額ノ多寡ハ裁判所之ヲ定ム

第七十九條　擔保ノ設定證書ニハ前條ニ定メタル金額ニ對スル保證人又ハ用益者ノ一身ノ引受ヲ併記ス

第八十條　用益者カ動產又ハ不動產ニ對シテ相應ナル擔保ヲ供スル能ハス且當事者ノ間ニ別段ノ合意ナキトキハ左ノ如ク處辨ス

日用品其他ノ代替物ハ之ヲ競賣シ其代金ハ虛有者、用益者連名ニテ用益權ノ直接ニ存スル金錢ト共ニ供託所ニ供託シ又ハ之ヲ國債券ニ換ヘ用益者ハ其利息ヲ收取ス

此他ノ動產ハ虛有者之ヲ占有ス

不動產ハ之ヲ第三者ニ賃貸シ又ハ虛有者カ賃借ノ名義ニテ之ヲ保存シ用益者ハ保持費用及ヒ第八十九條ニ記載シタル負擔ヲ扣除シテ貸賃ヲ收取ス

第八十一條　用益者カ擔保ノ一分ニ非サレハ供スル能ハサルトキハ引渡ヲ受ク可キ用益物ニ付キ其擔保ノ限度ニ應シテ選擇ヲ爲ス

第八十二條　用益者ノ保證人ヲ立ツル義務ハ設定ノ權原又ハ其後ノ合意ヲ以テ之ヲ免除スルコトヲ得但用益者ノ無資力ト爲リタルトキハ此免除ハ其效ヲ失フ若シ用益者カ既ニ收益ヲ始メタルトキハ其用益物ヲ虛有者ニ返還シ且前二條ニ從ヒテ處辨ス

第八十三條　贈與物ニ付キ贈與者カ自己ノ利益ノ爲メ留存シタル用益權ニ付テハ保證人ヲ立ツル義務ナシ

第八十四條　用益者カ收益ヲ始メタルトキハ善良ナル管理人ノ如ク用益物ノ保存ニ注意スルコトヲ要ス

用益者ハ其過失又ハ懈怠ヨリ生スル用益物ノ滅失又ハ毀損ノ責ニ任ス但虛有者ノ權利ヲ保護スル爲メ用益者ニ對シテ第百四條ニ許可シタル處置ヲ爲スコトヲ妨ケス

第八十五條　用益物ノ全部又ハ一分カ火災ニテ滅失シタルトキハ用益者ニ過失アリト推定ス但反對ノ證據アルトキハ此限ニ在ラス

第八十六條　用益者ハ動產及ヒ不動產ノ小修繕ヲ負擔シ其求償權ヲ有セス

大修繕ハ用益者ノ過失ニ因リ又ハ小修繕ヲ爲ササルニ因リテ必要ト爲リタルトキニ非サレハ用益者之ヲ負擔セス

屋根若クハ重モナル牆壁ノ修繕又ハ重モナル梁柱若クハ基礎ノ變更ヲ建物ノ大修繕トス

石垣、土手及ヒ牆壁ノ改造モ亦之ヲ大修繕ト看做ス

第八十七條　過失又ハ懈怠ノ場合ノ外用益者ハ虛有者ヲ立會ハシメ鑑定人ヲシテ大修繕ノ必要ヲ證セシメタル後虛有者其大修繕ヲ爲スコトヲ拒ミタルトキハ自ラ之ヲ爲スコトヲ得

用益權消滅ノ時虛有者ハ右修繕ヨリ生シタル現時ノ增價額ヲ用益者ニ辨償スル責ニ任ス

若シ虛有者カ大修繕ヲ爲ストキハ用益者ヲ立會ハシメ鑑定人ヲシテ其必要及ヒ費用ヲ證セシメ用益者ハ毎年其費用ノ利息ヲ虛有者ニ辨償ス

第八十八條　前條ノ規定ハ建物カ朽敗ノ爲メ崩頽シ又ハ事變ニ因リテ破壞シタル場合ニモ之ヲ適用ス但第百六條ニ定メタル如ク此等ノ事ニ因リテ用益權ノ消滅ヲ致ストキハ此限ニ在ラス

第八十九條　用益物ニ賦課セラルル毎年通常ノ租稅及ヒ公課ハ其一般ニ係ルモノト一地方ニ係ルモノトヲ問ハス用益者之ヲ負擔シ其求償權ヲ有セス

用益權ノ繼續間用益物ニ賦課セラルルコト有ル可キ非常ノ公課又ハ租稅ニ付テハ虛有者ハ其元本ヲ拂ヒ用益者ハ此時間毎年ノ利息ヲ辨償ス

非常ノ公課又ハ租稅ト看做スモノハ左ノ如シ

第一　强要ノ借入

第二　增稅又ハ新稅但其臨時又ハ非常ノ性質カ法令ニ明示アルトキ又ハ明ニ事情ヨリ生スルトキニ限ル

第九十條　用益者又ハ虛有者カ通常又ハ非常ノ租稅ヲ納メサルトキハ不動產ハ完全ノ所有權ニ於テ之ヲ差押ヘ且賣却シ其代金ヲ怠納租稅ニ充ツ若シ殘額アラハ其元本ハ虛有者ニ屬シ其收益ハ用益者ニ屬ス

第九十一條　虛有者カ用益權設定ノ前ニ火災ニ對シテ建物ヲ保險ニ付シタルトキハ用益者ハ毎年保險料ノ利息ヲ拂フノ責ニ任ス但火災ノ場合ニ於テ得タル償金ハ虛有者ニ屬シ其收益ハ用益者ニ屬ス

虛有者カ用益權ノ繼續間ニ完全ノ所有權ヲ保險ニ付シタルトキハ用益者ハ保險料ノ利息ヲ負擔セス其償金ニ關シテハ虛有者カ自己ノ拂ヒタル保險料ノ金額ヲ控除シタル殘餘ニ付キ收益ス又虛有者

カ其虚有權ノミヲ保險ニ付シタルトキハ用益者ハ償金ニ付キ權利ヲ有セス

海上ノ危險ニ對シ保險ニ付シタル船舶ニ付キ用益權ヲ設定シタルトキモ亦右ノ規定ヲ適用ス

第九十二條　用益者ハ自己及ヒ虚有者ノ利益ノ爲メ自費ヲ以テ保險ヲ約スルコトヲ得此場合ニ於テハ用益者ハ償金ノ額内ヨリ自己ノ拂ヒタル保險料ヲ控除シ其殘額ニ付テ收益ス

又用益者ハ用益權ノ價格ノミニ付キ建物ヲ保險ニ付シタルトキハ一人ニテ保險料ヲ負擔シ災害アリシトキハ其償金ヲ取得ス凍、雹其他天然ノ事變ニ對シ用益者カ收穫物又ハ産出物ヲ保險ニ付シタルトキモ亦同シ

第九十三條　遺言ニテ包括財産ノ用益權ヲ得タル者ハ其得益ノ割合ニ應シテ相續ノ債務ノ利息ヲ負擔ス

此他相續ノ負擔タル養料又ハ終身年金權ノ年金モ亦同上ノ割合ニ應シテ之ヲ負擔ス

第九十四條　特定財産ノ用益者ハ其用益財産カ抵當又ハ先取特權ヲ負擔スルトキト雖モ設定者ノ債務ノ辨濟ヲ分擔セス

用益者カ所持者トシテ訴追ヲ受ケタルトキハ債務者ニ對スル求償權ヲ有ス但用益權ノ設定者又ハ其相續人ニ對スル追奪擔保ノ訴權ヲ妨ケス

第九十五條　虚有者カ元本ヲ負擔シ用益者カ其利息ヲ負擔ス可キ諸般ノ場合ニ於テハ左ノ方法ノ一ニ依リテ處辨ス

第一　虚有者カ元本ヲ拂ヒ用益者カ其毎年ノ利息ヲ拂フ

第二　用益者カ元本ヲ立替ヘ虚有者カ用益權消滅ノ時之ヲ用益者ニ償還ス

第三　要求ヲ受ク可キ金額ニ滿ツルマテ用益物ノ一分ヲ賣却ス

第九十六條　用益權ノ繼續間用益不動産ニ第三者カ虚有者ノ權利ヲ害ス可キ侵奪又ハ作業ヲ爲ストキハ用益者ハ其事實ヲ虚有者ニ告發スルコトヲ要ス若シ此告發ヲ爲サヽルトキハ爲メニ生シタル總テノ損害及ヒ第三者ノ取得スル時効又ハ占有權ニ付キ其責ニ任ス

第九十七條　虚有者カ原告又ハ被告トシテ用益物ノ完全ノ所有權ニ係ル訴訟ヲ爲ストキハ用益者ヲ其訴訟ニ召喚スルコトヲ要ス

用益者ハ右訴訟費用ノ利息及ヒ收益ノミニ關スル訴訟費用ヲ負擔ス然レトモ用益權ノ設定證書ヲ以テ用益者ニ追奪擔保ヲ爲シタル

トキハ用益者ハ總テノ訴訟費用ヲ負擔セス

如何ナル場合ニ於テモ用益者ハ虛有權ノミニ關スル訴訟費用ヲ分擔セス

第九十八條　訴訟ニ參加ス可クシテ之ニ參加セシメラレサリシ虛有者又ハ用益者ハ其判決ノ害ヲ受クルコト無シ然レトモ事務管理ノ規則ニ從ヒテ其利ヲ受クルコトヲ得

第四款　用益權ノ消滅

第九十九條　用益權ハ第四十二條ニ記載シタル所有權消滅ノ原因ト同一ノ原因ニ由リテ消滅スルノ外尙ホ左ノ原因ニ由リテ消滅ス

第一　用益者ノ死亡

第二　用益權ヲ設定シタル期間ノ經過

第三　用益者ノ明示シタル用益權ノ拋棄

第四　三十ヶ年間繼續シタル不使用

第五　用益權ノ廢罷

第百條　數人ノ終身ヲ期シテ同時ニ且不分ニテ用益權ヲ設定シタルトキハ死亡者ノ持分ハ生存者ヲ利ス其用益權ハ最後ノ死亡者ノ死亡ニ因ルニ非サレハ消滅セス

第百一條　法人ノ爲メニ設定シタル用益權ハ三十ヶ年ノ期間ヲ以テ消滅ス但三十ヶ年ヨリ短キ期間ヲ設定シタルトキハ此限ニ在ラス

第百二條　用益者ハ用益權ノ拋棄ヲ以テ其拋棄前ニ履行セサリシ義務ヲ免カルヽコトヲ得ス

又其拋棄ハ用益者ノ權ニ基キ物ノ上ニ權利ヲ取得シタル第三者ヲ害スルコトヲ得ス

第百三條　不使用ハ未成年者ニモ其他ノ人ニシテ之ニ對シ時効ノ經過スルコトヲ得サル者ニモ之ヲ以テ對抗スルコトヲ得ス

免責時効ニ關スル此他ノ規則ハ不使用ニ之ヲ適用ス

第百四條　用益者カ用益物ニ重大ノ毀損ヲ加フルトキ又ハ保持ノ欠缺若クハ收益ノ濫妄ニ因リテ用益物ノ保存ヲ危フスルトキハ裁判所ハ用益權消滅ノ他ノ原因ノ一ノ生スルマテ用益者ノ費用ヲ以テ用益物ヲ保管ニ付シ又ハ此時間虛有者ヨリ毎年用益者ニ拂フ可キ金額若クハ果實ノ部分ヲ定メ虛有者ノ爲メ用益權ノ廢罷ヲ宣告スルコトヲ得

裁判所ハ右ト同時ニ其年ノ果實及ヒ產出物ノ分割ヲ定ム

將來ニ於テ用益者ニ拂フ可キ金額又ハ果實ノ價額ハ用益者日割ヲ

以テ之ヲ取得ス

第百五條　用益權ノ廢罷ハ其廢罷前ニ用益者ノ加ヘタル損害ノ賠償ヲ妨ケス

第百六條　事變又ハ朽敗ニ因リテ用益權ノ存スル建物ノ全部カ毀滅シタルトキハ用益者ハ土地ニ付テモ材料ニ付テモ收益スルコトヲ得ス但建物カ用益權ノ存スル土地ノ從タルトキハ此限ニ在ラス

第百七條　用益物カ公用徵收ヲ受ケタルトキハ用益者ハ其償金ニ付キ收益ス此場合ニ於テ用益者ハ其收益スル元本ニ對シテ相應ナル擔保ヲ供スルコトヲ要ス但此場合ヲ豫見シテ特ニ其義務ヲ免除シタルトキハ此限ニ在ラス

第九十條乃至第九十二條ニ規定シタル場合ニ於テモ亦同シ

第百八條　池沼ノ用益權ハ水ノ乾涸シテ舊狀ニ復スル見込ナキトキハ消滅ス

又土地ノ用益權ハ水ノ浸沒シテ舊狀ニ復スル見込ナキトキハ消滅ス

第百九條　第百四條ニ揭ケタル場合ヲ除クノ外用益權消滅ノ時猶ホ土地ニ附著スル果實及ヒ產出物ハ盧有者ニ屬ス其栽培又ハ作業ノ費用ハ之ヲ償還スルコトヲ要セス但不動產賃借人カ果實ニ付キ既ニ得タル權利ヲ妨ケス

第二節　使用權及ヒ住居權

第百十條　使用權及ヒ住居權ハ使用者及ヒ其家族ノ需用ノ程度ニ限ルノ用益權ナリ

住居權ハ建物ノ使用權ナリ

使用權及ヒ住居權ハ用益權ト同一ノ方法ニ因リテ成立シ及ヒ同一ノ原因ニ由リテ消滅ス

第百十一條　使用權及ヒ住居權ノ程度ヲ定ムル爲メ使用者ノ家族ト看做ス可キ者ハ使用者ト共ニ住居スル配偶者卑屬親尊屬親及ヒ使用者又ハ此等ノ親屬ノ隨身雇人ナリ

第百十二條　設定ノ權原又ハ其後ノ合意ヲ以テ土地ノ使用權ヲ行フノ方法ヲ定メス又ハ住居權ヲ行フ可キ建物ヲ定メサルトキハ當事者立會ノ上裁判所其意見ヲ聽キテ之ヲ定ム

第百十三條　使用權及ヒ住居權ハ之ヲ讓渡シ又ハ賃貸スルコトヲ得ス

第百十四條　使用權又ハ住居權ヲ有スル者ハ用益者ト同シク動產ノ

目錄及ヒ不動産ノ形狀書ヲ作リ且保證人ヲ立ツル責ニ任ス

又用益者ト同一ノ注意ヲ爲シ及ヒ自己ノ過失ニ付テハ之ト同一ノ責ニ任ス

又其收益ノ割合ニ應シ用益者ト同シク修繕費用、租稅、公課及ヒ訴訟費用ヲ分擔ス

第三章　賃借權、永借權及ヒ地上權

第一節　賃借權

第百十五條　動産及ヒ不動産ノ賃貸借ハ賃借人ヨリ賃貸人ニ金錢其他ノ有價物ヲ定期ニ拂フ約ニテ賃借人ニ或ル時間賃借物ノ使用及ヒ收益ヲ爲ス權利ヲ與フ但後ノ第二款及ヒ第三款ニ定メタル如ク合意ニ因リ又ハ法律ノ効力ニ因リテ當事者ノ負擔スル相互ノ義務ヲ妨ケス

第百十六條　國、府縣、市町村及ヒ公設所ニ屬スル財産ノ賃貸借ハ行政法ヲ以テ之ヲ規定ス

第一款　賃借權ノ設定

第百十七條　賃借權ハ賃貸借契約ヲ以テ之ヲ設定ス

賃借權ヲ遺贈シタル場合ニ於テハ相續人ハ遺言書ニ記載シタル項目及ヒ條件ニ從ヒテ受遺者ト賃貸借契約ヲ取結フコトヲ要ス

賃借權ヲ豫約シタル場合ニ於テモ諾約者ハ要約者ト賃貸借契約ヲ取結フコトヲ要ス

第百十八條　賃貸借契約ハ有償且雙務ノ契約ノ一般ノ規則ニ從フ但後ニ掲ケタル變例ヲ妨ケス

第百十九條　法律上又ハ裁判上ノ管理人ハ其管理スル物ヲ賃貸スルコトヲ得然レトモ管理人カ期間ニ付キ特別ノ委任ヲ受ケスシテ賃貸スルトキハ左ノ期間ヲ超ユルコトヲ得ス

第一　獸畜、其他ノ動産ニ付テハ一个年

第二　居宅、店舗其他ノ建物ニ付テハ三个年

第三　耕地、池沼其他土地ノ部分ニ付テハ五个年

第四　牧場、樹林ニ付テハ十个年

第百二十條　管理人ハ前條ニ記載シタル賃貸物ノ區別ニ從ヒ現期間ノ滿了ニ先タツ一个月、三个月六个月又ハ一个年内ニ非サレハ同一ノ期間ヲ以テ賃貸借ヲ更新スルコトヲ得ス

然レトモ右ノ時期ニ先タチテ爲シタル更新ハ新期間ノ始マリシ後尚ホ管理人ノ委任ノ止マサリシトキハ無効ナラス

第百二十一條　管理人ハ金錢外ノ有價物ヲ賃貸ト爲シテ賃貸スルコトヲ得ス

然レトモ耕地ニ付テハ其産出物ヲ賃貸ト爲シテ賃貸スルコトヲ得

第百二十二條　前三條ノ規定ハ代理人ニ之ヲ適用ス但代理委任ノ書面ヲ以テ其權限ヲ伸縮シタルトキハ此限ニ在ラス

第百二十三條　自己ノ財産ヲ管理スルコトヲ得ル婦及ヒ自治産ノ未成年者モ亦管理人ト同一ノ條件ニ從フニ非サレハ其財産ヲ賃貸スルコトヲ得ス

第百二十四條　賃借人ハ前數條ニ反シタル賃貸借又ハ其更新ノ無效又ハ短縮ヲ請求スルコトヲ得ス

然レトモ所有者其權利ヲ自在ニスルコトヲ得ルニ至リタルトキハ賃借人ハ所有者ノ認諾スルヤ否ヤノ意思ヲ第百十九條ニ區別シタル賃借物ノ性質ニ從ヒ五日、八日、十五日又ハ三十日ノ期間ニ述フルコトヲ常ニ要求スルコトヲ得

所有者カ其意思ヲ述フルコトヲ拒ムトキハ賃借人ハ起初又ハ更新ニ於テ定メタル如ク賃借期間ヲ維持セシト述フルコトヲ得

第百二十五條　所有者ノ爲シタル不動産ノ賃貸借カ三十个年ヲ超ユルトキハ其賃貸借ハ永貸借ト爲リ此種ノ賃貸借ノ爲メ後ノ第二節ニ定メタル規則ニ從フ

第二款　賃借人ノ權利

第百二十六條　賃借人ハ賃借物ニ付キ用益者ト同一ノ利益ヲ收ムル權利ヲ有ス但其賃貸借設定ノ契約及ヒ法律ノ規定ヨリ生スル權利ノ增減ハ此限ニ在ラス

第百二十七條　賃借人ハ其收益ヲ始ムル爲メニ定メタル時期ニ於テ賃借物ノ占有ヲ賃貸人ニ要求スルコトヲ得然レトモ其目錄又ハ形狀書ヲ作リ及ヒ保證人ヲ立ツル責ニ任セス但契約ニ因リテ其責ニ任スルトキハ此限ニ在ラス

第百二十八條　賃借人ハ物ノ引渡前ニ其用方ニ從ヒテ一切ノ修繕ヲ整フルコトヲ賃貸人ニ要求スルコトヲ得

此他賃貸人ハ賃貸借ノ期間大小修繕ヲ爲ス責ニ任ス但左ノ二項ニ掲ケタル修繕及ヒ賃借人又ハ其雇人ノ過失若クハ懈怠ニ因リテ必要ト爲リタル修繕ハ賃借人之ヲ負擔ス

賃貸人ハ賃貸借ノ期間壁、建具、塗彩及ヒ壁紙ノ保持ヲ負擔セス

又井戸、用水溜、汚物溜又ハ水道管ノ疏浚及ヒ普通ニ賃借人ノ爲ス

可キ修繕ヲ催サセス

本條ノ規定ニ反對ノ習慣アルトキハ其慣習ニ從フコトヲ妨ケス

第百二十九條　建物ニ必要ト爲リタル大修繕ハ賃借人ヨリ之ヲ要求セサルモ又此カ爲メ賃借人ニ多少ノ不便ヲ生セシム可キヒ賃貸人之ヲ爲スコトヲ得

然レトモ賃借人ハ右修繕ノ一个月ヨリ長ク繼續スルトキハ借賃ノ減少ヲ要求スルコトヲ得又時間ノ如何ヲ問ハス右修繕ノ爲メ其賃借物中住居スヘキ全部又ハ商業若クハ工業ニ極メテ必要ナル部分ヲ失フ可キトキハ賃借人ハ賃貸借ノ解除ヲ請求スルコトヲ得

第百三十條　賃借人カ第三者ヨリ收益ノ權利ニ妨害又ハ爭論ヲ受ケ其原因賃借人ノ責ニ歸ス可カラサルトキ賃借人ヨリ合式ニ告知ヲ受ケタル賃貸人ハ其訴訟ニ參加シテ賃借人ヲ擔保シ又ハ損害ヲ賠償スルコトヲ要ス

第百三十一條　妨害カ戰爭、旱魃、洪水、暴風、火災ノ如キ不可抗力又ハ官ノ處分ヨリ生シ此カ爲メ每年ノ收益ノ三分一以上損失ヲ致シタルトキハ賃借人ハ其割合ニ應シテ借賃ノ減少ヲ要求スルコトヲ得但地方ノ慣習之ニ異ナルトキハ其慣習ニ從フコトヲ妨ケス

又右ノ妨害カ引續キ三个年ニ及フトキハ賃借人ハ賃貸借ノ解除ヲ請求スルコトヲ得建物ノ一分ノ燒失其他ノ毀滅ノ場合ニ於テ所有者カ一个年內ニ之ヲ再造セサルトキモ亦同シ

第百三十二條　土地又ハ建物ヲ以テ主タル目的物ト爲シタル賃貸借ニ於テ其現在ノ坪數カ契約ノ坪數ヨリ少ナク又ハ多キトキハ土地又ハ建物ノ賣買ニ於ケルト同一ノ條件ニ從ヒテ借賃ノ增減又ハ契約ノ銷除ヲ爲スコトヲ得

第百三十三條　賃借人ハ賃貸人ノ明許ヲ要セスシテ賃借地ニ適宜ニ建物ヲ築造シ又ハ樹木ヲ栽植スルコトヲ得但現在ノ建物又ハ樹木ニ何等ノ變更ヲモ加フルコトヲ得ス

賃借人ハ舊狀ニ復スルコトヲ得ヘキトキハ其築造シタル建物又ハ栽植シタル樹木ヲ賃貸借ノ終ニ收去スルコトヲ得但第百四十四條ヲ以テ賃貸人ニ與ヘタル權能ヲ妨ケス

第百三十四條　賃借人ハ賃貸借ノ期間ヲ超エサルニ於テハ其賃借權ヲ無償若クハ有償ニテ讓渡シ又ハ其賃借物ヲ轉貸スルコトヲ得但反對ノ慣習又ハ合意アルトキハ此限ニ在ラス

賃借人ハ讓渡ノ場合ニ於テ贈與者又ハ賣主ノ權利ヲ有シ轉貸ノ場

合ニ於テハ賃貸人ノ權利ヲ有ス

右執レノ場合ニ於テモ賃借人ハ賃貸人ニ對シテ其義務ヲ免カルルコトヲ得ス但賃貸人カ轉借人ト更改ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス

果實又ハ產出物ノ一分ヲ以テ借賃ト爲シ金錢ヲ以テ之ニ代フルコトヲ許ササルトキハ賃借權ノ讓渡又ハ轉貸ハ賃貸人ノ承諾アルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第百三十五條　不動產ノ賃借人ハ其權利ヲ抵當ト爲スコトヲ得但讓渡又ハ轉貸ヲ爲スコトヲ得ヘキ場合ニ限ル

第百三十六條　賃借人ハ其權利ヲ保存スル爲メ賃貸人及ヒ第三者ニ對シテ第六十七條ニ記載シタル訴權ヲ行フコトヲ得

第三款　賃借人ノ義務

第百三十七條　賃貸人其權利ヲ保存スル爲メ賃貸物ノ目錄又ハ形狀書ヲ作ラントスルトキハ賃借人ハ何時ニテモ賃貸人カ己レト立會ヒテ之ヲ作ルヲ許諾スルヿヲ要ス但其書類ノ費用ヲ分擔セス賃借人モ亦賃貸人ヲ召喚シ立會ノ上自費ニテ右目錄又ハ形狀書ヲ作ルコトヲ得

形狀書ヲ作ラサリシトキハ賃借人ハ修繕完好ノ形狀ニテ賃借物ヲ受取リタリトノ推定ヲ受ク但反對ノ證據アルトキハ此限ニ在ラス

目錄ナキトキハ動產ノ實體及ヒ形狀ノ證據ハ賃貸人ノ責ニ歸シ通常ノ方法ニ從ヒテ之ヲ爲ス

第百三十八條　金錢ヲ以テ借賃ト爲シタルトキハ賃借人ハ合意シタル時期ニ之ヲ拂ヒ合意ナキトキハ毎月末ニ之ヲ拂フコトヲ要ス但地方ノ慣習之ニ異ナルトキハ此限ニ在ラス

果實ヲ以テ借賃ト爲シタルトキハ收穫後ニ非サレハ之ヲ要求スルコトヲ得ス

第百三十九條　賃借人借賃ヲ拂ハス其他賃貸借ノ特別ナル項目又ハ條件ヲ履行セサルトキハ賃貸人ハ賃借人ニ對シテ其履行ヲ强要シ又ハ損害アルトキハ其賠償ヲ得テ賃貸借ノ解除ヲ請求スルコトヲ得

第百四十條　賃借人ハ賃借物ニ直接ニ賦課セラルル通常及ヒ非常ノ租稅其他ノ公課ヲ負擔セス若シ租稅法ニ依リテ賃借人ヨリ徵收スルコト有ルトキハ其借賃ヨリ之ヲ控除シ又ハ賃貸人ヨリ賃借人ニ之ヲ償還ス但反對ノ合意アルトキハ此限ニ在ラス

然レトモ賃借人ノ築造シタル建物ニ賦課セラレ又ハ賃借不動産ニ於テ賃借人ノ營ム商業若クハ工業ニ賦課セラルル租稅其他ノ公課ハ賃借人之ヲ負擔ス

第百四十一條　賃借人ハ明示ト默示トヲ問ハス合意ヲ以テ定メタル用方ニ從フニ非サレハ賃借物ヲ使用スルコトヲ得ス其合意ナキトキハ契約ノ時ノ用方又ハ賃借物ノ性質ニ相應シテ毀損セサル用方ニ從フニ非サレハ之ヲ使用スルコトヲ得ス

第百四十二條　賃借人ハ賃借物ノ看守及ヒ保存ニ付キ用益者ト同一ノ義務ヲ負擔ス

第三者カ賃借物ニ侵奪又ハ作業ヲ爲ストキハ賃借人ハ第九十六條ニ記載シタル如ク用益者ト同一ノ責ニ任ス

第百四十三條　賃貸借ノ終ニ於テ賃借人カ賃借物ヲ返還セサルトキハ賃貸人ハ其選擇ヲ以テ對人訴權又ハ物上訴權ニテ之ヲ訴追スルコトヲ得

第百四十四條　賃貸人ハ賃貸借ノ終ニ於テ第百三十三條ニ依リテ賃借人ノ收去スルヲ得ヘキ建物及ヒ樹木ヲ先買スルコトヲ得此場合ニ於テハ第七十條ノ規定ヲ適用ス

第四款　賃借權ノ消滅

第百四十五條　賃借權ハ左ノ諸件ニ因リテ當然消滅ス

第一　賃借物ノ全部ノ滅失

第二　賃借物ノ全部ノ公用徵收

第三　賃借人ニ對スル追奪又ハ賃貸物ニ存スル賃貸人ノ權利ノ取消但其追奪及ヒ取消ハ賃貸借契約以前ノ原因ニ由リ裁判所ニ於テ之ヲ宣告セシトキニ限ル

第四　明示若クハ默示ニテ定メタル期間ノ滿了又ハ要約シタル解除條件ノ成就

第五　初ヨリ期間ヲ定メサルトキハ解約申入ノ告知ノ後法律上ノ期間ノ滿了

右ノ外賃貸借ハ條件ノ不履行其他法律ニ定メタル原因ノ爲メ當事者ノ一方ノ請求ニ因リ裁判所ニテ宣告シタル取消ニ因リテ終了ス

第百四十六條　意外又ハ不可抗ノ原因ニ由リテ賃借物ノ一分ノ滅失セシトキハ賃借人ハ第百三十一條ニ記載シタル條件ニ從ヒテ賃貸借ノ解除ヲ要求シ又ハ賃貸借ヲ維持シテ借賃ノ減少ヲ要求スルコトヲ得

公用ノ爲メ賃借物ノ一分カ徵收セラレタルトキハ賃借人ハ常ニ借賃ノ減少ヲ要求スルコトヲ得

第百四十七條　期間ノ定アル賃貸借ノ終リシ後賃借人仍ホ收益シ賃貸人之ヲ知リテ故障ヲ爲ササルトキハ新賃貸借暗ニ成立シ前賃貸借ト同一ノ負擔及ヒ條件ニ從フ

然レトモ前賃貸借ヲ擔保シタル抵當ハ消滅シ保證人ハ義務ヲ免カル

新賃貸借ハ下ノ數條ニ記載シタル如ク解約申入ニ因リテ終了ス

第百四十八條　家具ノ附キタル建物ノ全部又ハ一分ノ賃貸借ニシテ其期間ヲ明示セス其借賃ヲ一年、一月又ハ一日ヲ以テ定メタルモノハ一年、一月又ハ一日ノ間賃貸借ヲ爲シタリト推定ス但前條ニ記載シタル默示ノ更新ヲ妨ケス

動產ノミヲ以テ目的ト爲シタル賃貸借ニ付テモ亦同シ

第百四十九條　家具ノ附カサル建物ノ賃貸借ハ期間ヲ定メサルトキ又ハ之ヲ定メタルモ默示ノ更新アリタルトキハ何時ニテモ當事者ノ一方ノ解約申入ニ因リテ終了ス

解約申入ヨリ返却マテノ時間ハ左ノ如シ

第一　建物ノ全部ニ付テハ二个月但賃借人ノ造作ヲ附シタルトキハ三个月

第二　建物ノ一分ニ付テハ一个月但賃借人ノ造作ヲ附シタルトキハ二个月

第百五十條　家具ノ附キタル建物ノ賃貸借ニ付キ默示ノ更新アリタルトキハ解約申入ヨリ返却マテノ時間ハ左ノ如シ

第一　前賃貸借ノ期間ヲ三个月又ハ其以上ニ定メタルトキハ一个月

第二　三个月未滿ノ賃貸借ニ付テハ原期間ノ三分一

第三　日日賃貸借ニ付テハ二十四時

右規定ハ默示ノ更新後ノ動產ノ賃貸借ニ付テモ亦之ヲ適用ス

賃貸セシ建物ニ備ヘタル動產又ハ用方ニ因ル不動產ト看做ス可キ動產ノ賃貸借ハ其建物ノ賃貸借ノ終了スルニ非サレハ終了セス

第百五十一條　土地ノ賃貸借ニシテ期間ヲ定メサルモノ又ハ期間ヲ定メタルモ默示ノ更新アリタルモノハ耕地ニ付テハ主タル收穫季節ヨリ六个月前又不耕地其他牧場、樹林ニ付テハ返却セシム可キ時期ヨリ一个年前ニ解約申入ヲ爲スニ因リテ終了ス

第百五十二條　解約申入及ヒ返却ノ時期ニ關スル前數條ノ規定ハ其時期ニ付キ地方ノ慣習ナキトキニ非レハ之ヲ適用セス

第百五十三條　如何ナル場合ニ於テモ賃借人ノ權利ノ存スル一切ノ收穫物ヲ收去スル前ニ賃貸借ノ終了セシトキハ賃貸人又ハ新賃借人ハ前賃借人ノ之ヲ收去スルニ委スルコトヲ要ス

又賃借人ハ土地ノ收穫物ヲ收去シタル部分ニ於テ賃貸借ノ終了前ニ急要ノ作業ヲ爲スコトヲ賃貸人又ハ新賃借人ニ許スコトヲ要ス

但賃借人此カ爲メ妨害ヲ受ク可キトキハ此限ニ在ラス

第百五十四條　賃貸人カ賃貸物ヲ讓渡サントシ又ハ自己ノ爲メ若シハ他ノ特別ナル原因ノ爲メ之ヲ取戻サントスルトキハ期間ノ滿了前ト雖モ賃貸借ヲ銷除スルコトヲ得ル權能ヲ留保シタル場合又賃借人カ賃貸借ノ無用ト爲ル可キ未定事故ヲ慮カリテ同一ノ權能ヲ留保シタル場合ニ於テハ前數條ニ定メタル時期ニ於テ各自豫メ解約申入ヲ爲スコトヲ要ス

第二節　永借權及ヒ地上權

第一款　永借權

第百五十五條　永貸借トハ期間三十个年ヲ超ユル不動產ノ賃貸借ヲ謂フ

永貸借ハ五十个年ヲ超ユルコトヲ得ス此期間ヲ超ユル貸借ハ之ヲ五十个年ニ短縮ス

永貸借ハ常ニ之ヲ更新スルコトヲ得然レトモ其更新ノ時ヨリ五十个年ヲ超ユルコトヲ得ス

當事者カ永貸借契約ナルコトヲ明示シ其期間ヲ定メサルトキハ其貸借ハ四十个年ニシテ終了ス

本法實施以前ニ期間ヲ定メテ爲シタル不動產ノ賃貸借ハ五十个年ヲ超ユルモノト雖モ其全期間有効ナリ

本法實施以前ニ期間ヲ定メスシテ爲シタル荒蕪地又ハ未耕地ノ賃貸借及ヒ永小作ト稱スル賃貸借ノ終了ノ時期及ヒ條件ハ日後特別法ヲ以テ之ヲ規定ス

第百五十六條　永貸借ハ永貸借契約ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ設定スルコトヲ得ス其遺贈又ハ豫約ニ付テハ第百十七條ノ規定ニ從フ

第百五十七條　當事者相互ノ權利及ヒ義務ハ永貸借ノ設定契約ヲ以テ之ヲ定ム

特別ノ合意ナキトキハ下ノ規定ニ從フノ外通常賃貸借ノ規則ニ從

第百五十八條　永借人ハ永借地ノ形質ヲ變スルコトヲ得但永久ノ毀損ヲ生セシメサルコトヲ要ス

永借人ハ常ニ沼澤ヲ乾涸スルコトヲ得又永借地ノ作業ニ益ス可キトキハ其土地ヲ通過スル水流ヲ變轉スルコトヲ得

第百五十九條　永借人ハ原野ヲ開墾スルコトヲ得然レトモ所有者ノ承諾アルニ非サレハ定期採伐ニ供シタル小木林ノ樹木ヲ掘取ルコトヲ得又定期採伐ニ供セサル樹木ニシテ既ニ二十个年ヲ過キ且其成長ノ年期カ貸借ノ期間ヲ超ユ可キモノヲ採伐スルコトヲ得

第百六十條　永借人ハ如何ナル場合ニ於テモ所有者ノ承諾アルニ非サレハ主タル建物ヲ取除クコトヲ得又從タル建物ト雖モ其存立ノ時間カ貸借ノ期間ヲ超ユ可キモノハ亦同シ

第百六十一條　前二條ニ從ヒ永借人カ建物又ハ樹木ヲ取除キタルトキハ其物料及ヒ材木ハ所有者ニ屬ス

第百六十二條　永借人ハ地底ニ鑛物在ルヲ開坑ノ特許ヲ得タル者ヨリ所有者ニ拂ヘル償金ニ付キ何等ノ權利ヲモ有セス然レトモ此特許ヲ得タル者ノ地上ニ加ヘタル損害ノ爲メ賠償ヲ受クル權利ヲ有ス

第百六十三條　永借地ニ既ニ採掘ヲ始メ且特別法ニ從フヲ要セサル石類、石炭類其他ノ物ノ石坑アルトキハ永借人ハ其收益ヲ繼續ス

右石坑ヲ未タ採掘セス又ハ其採掘ヲ廢止シタルトキハ永借人ハ永借地ノ改良ノ爲メ石其他ノ物料ヲ採取スルコトヲ得

第百六十四條　永貸人ハ永貸借契約ノ當時ノ現狀ニテ永貸物ヲ引渡スモノトス

永貸人ハ貸借ノ期間大小修繕ヲ負擔セス

第百六十五條　意外ノ事又ハ不可抗力ニ因リテ貸借ノ期間ニ起リタル毀損ハ借賃減少ノ理由ト爲ラス但第百六十九條ニ定メタル解除ノ權利ヲ妨ケス

第百六十六條　永貸人ニ對シ永借物ニ賦課セラルヽ通常又ハ非常ノ租稅其他ノ公課ハ永借人之ヲ永貸人ニ辨濟ス

第百六十七條　數人カ一箇ノ契約ヲ以テ一箇ノ不動產ヲ永借シタルトキハ借賃ヲ拂フ義務ハ各永借人又ハ其和續人ニ在テハ連帶ニシテ且不可分ナリ

第百六十八條　永借人カ第百六十六條ノ辨濟ヲ爲サス又ハ三个年間引續キ借賃ノ拂入ヲ爲サヽルトキハ永貸人ハ永貸借ノ解除ヲ請求

スルコトヲ得

又永借人カ他ノ債權者ノ訴追ニ因リテ破産又ハ無資力ノ宣告ヲ受ケタルトキハ永貸人ハ辨濟ノ如何ナル不足ニ拘ハラス解除ヲ請求スルコトヲ得但其債權者カ借賃ヲ延滯ナク拂入ルヽコトヲ擔保スルトキハ此限ニ在ラス

第百六十九條　永借人ハ意外ノ事又ハ不可抗力ニ因リテ三ヶ年間引續キ全ク不動産ノ收益ヲ得ル能ハス又ハ其一分ノ毀損ニ因リテ將來ノ收益カ借賃ノ年額ヲ超ユ可キ見込ナキトキハ永貸借ノ解除ヲ請求スルコトヲ得

第百七十條　永借人カ永借地ニ加ヘタル改良及ヒ栽植シタル樹木ハ永貸借ノ滿期又ハ其解除ニ當リ賠償ナクシテ之ヲ殘置クモノトス

建物ニ付テハ通常賃貸借ニ關スル第百四十四條ノ規定ヲ適用ス

第二款　地上權

第百七十一條　地上權トハ他人ノ所有ニ屬スル土地ノ上ニ於テ建物又ハ竹木ヲ完全ノ所有權ヲ以テ占有スル權利ヲ謂フ

第百七十二條　地上權設定ノ時其土地ニ建物又ハ樹木ノ既ニ存スルト否トヲ問ハス設定行爲ノ基本、方式及ヒ公示ハ不動産讓渡ノ一般ノ規則ニ從フ

第百七十三條　地上權者カ讓受ケタル建物又ハ樹木ノ存スル土地ノ面積ニ應シテ土地ノ所有者ニ定期ノ納額ヲ拂フ可キトキハ其權利及ヒ義務ハ其拂フ可キ納額ニ付テハ通常賃貸借ニ關スル規則ニ從ヒ其繼續スル期間ニ付テハ第百七十六條ノ規定ニ從フ

右納額ニ付テハ新ニ建物ヲ築造シ又ハ樹木ヲ栽植スル爲メ土地ヲ賃借シタルトキモ亦同シ

第百七十四條　既ニ存セル建物又ハ樹木ニ於ケル地上權ノ設定ニ際シ從トシテ之ニ屬ス可キ周邊ノ地面ヲ明示セサルトキハ左ニ掲クル規定ニ從フ

建物ニ付テハ地上權者ハ其建坪ノ全面積ニ同シキ地面ヲ得ルノ權利ヲ有ス此配當ハ鑑定人ヲシテ土地及ヒ建物ノ周圍ノ形狀ト建物ノ各部ノ用方トヲ斟酌セシメテ之ヲ爲ス

樹木ニ付テハ地上權者ハ其最長大ナル外部ノ枝ノ蔭蔽ス可キ地面ヲ得ル權利ヲ有ス

第百七十五條　地上權設定後ニ築造シタル建物又ハ栽植シタル樹木

ニ付テハ地上權者ハ此種ノ作業ノ爲メ法律ヲ以テ相隣者ノ爲メニ規定シタル距離及ヒ條件ヲ遵守ス可シ縱令其隣人カ地上權ノ設定者ナルモ亦同シ

又地上權者ハ働方又ハ受方ニテ其他ノ地役ノ規則ニ從フ

第百七十六條　既ニ存セル建物又ハ地上權者ノ築造ス可キ建物ニ付キ設定權原ヲ以テ地上權ノ繼續期間ヲ定メサルトキハ此建物存立ノ時期間其權利ヲ設定シタルモノト推定ス但其大修繕ハ土地ノ所有者ノ承諾アルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

既ニ存セル樹木又ハ地上權者ノ栽植ス可キ樹木ニ付テハ其地上權ハ樹木ヲ採伐スル時期マテ又ハ其有用ナル最長大ニ至ル可キ時期マテ之ヲ設定シタリト推定ス

此他地上權ハ通常賃借權ト同一ノ原因ニ由リテ消滅ス但所有者ノ爲ス解約申入ハ此限ニ在ラス

地上權者ハ一个年前ニ豫告ヲ爲シ又ハ永タ拂期限ノ至ラサル納額ノ一个年分ヲ拂フトキハ常ニ解約申入ヲ爲スコトヲ得

第百七十七條　建物又ハ樹木ノ契約前ヨリ存スルト否トヲ問ハス地上權者之ヲ買ラントスルトキハ土地ノ所有者ニ先買權ヲ行フヤ否ヤヲ述フ可キノ催告ヲ一个月前ニ爲スコトヲ要ス

右先買權ニ付テハ此他尙ホ第七十條ノ規定ニ從フ

第百七十八條　本法實施ノ時ニ存スル地上權ハ左ノ規定ニ從フ

期限ヲ立テ、設定シタル地上權ハ其期限ニ至リ當然消滅ス

期限ヲ立テスシテ設定シタル地上權ハ第百七十六條ニ從ヒテ建物存立ノ時期間繼續ス

右兩樣ノ地上權ハ共ニ前條ニ規定シタル先買權ニ服ス

第四章　占有

第一節　占有ノ種類及ヒ占有スルコトヲ得ヘキ物

第百七十九條　占有ニ法定、自然及ヒ容假ノ三種アリ

第百八十條　法定ノ占有トハ占有者カ自己ノ爲メニ有スルノ意思ヲ以テスル有體物ノ所持又ハ權利ノ行使ヲ謂フ

權利ハ物權ト人權トヲ問ハス法定ノ占有ヲ受クルコトヲ得其種種ノ効力ハ場合ニ從ヒ下ニ之ヲ定ム

第百八十一條　法定ノ占有カ占有ノ權利ヲ授付ス可キ性質アル權利行爲ニ基クトキハ讓渡人ニ授付ノ分限ナキヲ以テ其効力ヲ生スル能ハサルトキト雖モ其占有ハ正權原ノ占有ナリ

占有カ侵害ニ因リテ成リタルトキハ其占有ハ無權原ノ占有ナリ

第百八十二條　正權原ノ占有ハ權原創設ノ當時ニ於テ占有者カ其權原ノ瑕疵ヲ知ラサリシトキハ之ヲ善意ノ占有トシ此ニ反スルトキハ惡意ノ占有トス

法律ノ錯誤ハ善意ニ付テノ利益ヲ受クル爲メニ之ヲ中立ツルコトヲ許サス但第百九十四條ノ規定ヲ妨ケス

善意タルコトハ權原ノ瑕疵ヲ覺知シタルトキハ止ム

第百八十三條　强暴又ハ隱密ノ占有ハ之ヲ瑕疵ノ占有トス

占有カ暴行又ハ脅迫ニ因リテ成リ又ハ保持セラレタルトキハ其占有ハ强暴ノ占有ナリ

占有カ公然且外見ノ所爲ニ因リテ當事者ニ容易ニ見ハレサルトキハ其占有ハ隱密ノ占有ナリ

右占有カ平穩ト爲リ又ハ公然ト爲リタルトキハ其瑕疵ハ消滅ス

第百八十四條　自然ノ占有トハ占有者カ自己ノ權利ヲ主張スル意ナシテ有體物ヲ所持スルヲ謂フ

公有物ニ付テハ各人ハ自然ノ占有ノ外占有ヲ爲スコトヲ得ス

第百八十五條　容假ノ占有トハ占有者カ他人ノ爲メニ其他人ノ名ヲ以テスル物ノ所持又ハ權利ノ行使ヲ謂フ

容假ノ占有者カ自己ノ爲メニ占有ヲ始メタルトキハ其占有ノ容假ハ止ミテ法定ト爲ル

然レトモ占有ノ權原ノ性質ヨリ生スル容假ハ左ニ揭クル場合ニ非サレハ止マス

第一　占有ヲ爲サシメタル人ニ告知シタル裁判上又ハ裁判外ノ行爲カ其人ノ權利ニ對シ明確ノ異議ヲ含メルトキ

第二　占有ヲ爲サシメタル人又ハ第三者ニ出テタル權原ノ轉換ニシテ其占有ニ新原因ヲ付スルトキ

第百八十六條　占有者ハ常ニ自己ノ爲メニ占有スルモノトノ推定ヲ受ク但占有ノ權原又ハ事情ニ因リテ容假ノ證據アルトキハ此限ニ在ラス

第百八十七條　正權原ノ證據アル占有ハ之ヲ善意ノ占有ナリト推定ス但反對ノ證據アルトキハ此限ニ在ラス

第百八十八條　强暴ノ證據ナキ占有ハ之ヲ平穩ノ占有ト推定ス

占有ノ公然ハ之ヲ推定セス必ス之ヲ證スルコトヲ要ス

前後二箇ノ時期ニ於テ證據アリタル占有ハ其中間繼續シタリトノ

推定ヲ受ク但其占有ノ中斷又ハ停止ノ證據アルトキハ此限ニ在ラス

第二節　占有ノ取得

第百八十九條　法定ノ占有ハ或ル物ノ所有權又ハ或ル權利ヲ自己ノ有ト爲ス意思ヲ以テ其物ヲ握取スル所爲ニ因リ又ハ其權利ヲ實行スルニ因リテ之ヲ取得ス

第百九十條　物ノ所持又ハ權利ノ行使ハ之ヲ第三者ノ所爲ニ委ヌルコトヲ得但占有スルノ意思ハ占有ニ付キ利益ヲ得ントヲ主張スル其人ニ存スルコトヲ要ス

然レトモ無能力者及ヒ法人ハ其代人ノ意思及ヒ所爲ニ因リテ占有ノ利益ヲ受クルコトヲ得

第百九十一條　物ノ握取ハ簡易ノ引渡又ハ占有ノ改定ヲ以テ之ニ代フルコトヲ得

初メ容假ノ權原ヲ以テ占有シタル物ヲ其占有者ニ爾後自己ノ物ト看做スコトヲ得セシムル新權原ニ依リテ之ヲ保存セシメタルトキハ簡易ノ引渡アリタリトス

初メ物ヲ自己ニ屬ストシテ占有シタル者カ爾後他人ノ名ヲ以テ其他人ノ爲メ占有ヲ繼續スルコトヲ承諾シタルトキハ占有ノ改定アリタリトス

權利ノ行使ニ付テハ初メ他人ノ名ヲ以テ行使セル者カ爾後自己ノ爲メニ行使スルニモ亦當事者ノ意思ノミニテ足ル又初メ自己ノ爲メ行使セル者カ爾後他人ノ爲メニ行使スルニ付テモ亦同シ

第百九十二條　占有ハ前主ニ於テ存シタル占有ノ性質及ヒ瑕疵ヲ以テ相續人其他包括權原ノ承繼人ニ移轉ス

物又ハ權利ノ特定權原ノ取得者ハ其利益ニ從ヒ或ハ自己ノ占有ノミヲ申立テ或ハ自己ノ占有ニ讓渡人ノ占有ヲ併セテ申立ツルコトヲ得

第三節　占有ノ效力

第百九十三條　法定ノ占有者ハ反對ノ證據アルニ非サレハ其行使セル權利ヲ適法ニ有スルモノトノ推定ヲ受ク其權利ニ關スル本權ノ訴ニ付テハ常ニ被告タルモノトス

第百九十四條　正權原且善意ノ占有者ハ天然ノ果實及ヒ產出物ニ付テハ自身又ハ代人ヲ以テ土地ヨリ離シタル時ニ於テ之ヲ取得シ法定ノ果實ニ付テハ用益者ニ關シ規定シタル如ク日割ヲ以テ之ヲ取

得ス

占有者ガ正權原ヲ有セスシテ事實又ハ法律ノ錯誤ニ因リテ惡意ナキトキハ其消費シタル果實ニ付キ利益ヲ得サリシ證據ノ擧クルニ於テハ之ヲ返還スル責ニ任セス

占有者カ其占有セシ物又ハ權利ノ自己ニ屬セサルヿヲ覺知シタルトキハ將來ニ向ヒテ果實返還ノ責ヲ生ス又訴訟ニ於テ確定ニ敗訴シタルトキハ其出訴ノ時ヨリ此責ヲ生ス

第百九十五條　惡意ノ占有者ハ回復ノ請求ヲ受ケタル物又ハ權利ハ勿論現物ニテ仍ホ占有スル果實及ヒ產出物ヲ返還シ且其既ニ消費シ又ハ過失ニ因リテ損傷シ又ハ收取ヲ怠リタル果實及ヒ產出物ノ代價ヲ償還スル責ニ任ス

回復者ハ果實ノ通常ノ負擔タル費用ヲ占有者ニ償還スルコトヲ要ス

强暴又ハ隱密ノ占有者ハ其權原ノ正當ナルコトヲ自ラ信セシトキト雖モ果實ニ關シテハ常ニ之ヲ惡意ノ占有者ト看做ス

第百九十六條　占有者ハ善意ナルト惡意ナルトヲ問ハス物ノ保存ノ爲メ又ハ物ノ增價ノ爲メ費シタル金額ヲ回復者ヨリ償還セシムルコトヲ得

右孰レノ占有者モ其分限ノミニテハ奢靡ノ爲メ費シタル金額ノ償還ヲ求ムルコトヲ得ス

第百九十七條　前二條ノ場合ニ於テ善意ノ占有者ハ回復者ノ言渡サレタル保存又ハ增價ノ爲メノ費用ノ全償ヲ得ルマテ物ノ上ニ留置權ヲ有ス

惡意ノ占有者ハ保存ノミノ費用ニ付キ留置權ヲ有ス

第百九十八條　物カ毀損ヲ受ケ又ハ價格ヲ減シ其責ヲ占有者ニ歸ス可キトキハ惡意ノ占有者ニ在テハ如何ナル場合ニ於テモ所有者ニ賠償ヲ爲シ善意ノ占有者ニ在テハ其毀損又ハ減價ニ因リ己レヲ利シタル場合ニ於テ其利シタル限度ニ應シ賠償ヲ爲スコトヲ要ス

第百九十九條　占有者ハ占有ヲ保持シ又ハ回收スル爲メ下ノ區別ニ從ヒテ占有ニ關スル訴權ヲ有ス

占有訴權ハ保持訴權、新工告發訴權、急害告發訴權及ヒ回收訴權ノ四種ナリ

第二百條　保持訴權ハ不動產ト包括動產ト特定動產トヲ問ハス其占有ニ關シ他人ヨリ反對ノ主張ヲ含メル事實上又ハ權利上ノ妨害ヲ

受クル占有者ニ屬ス

此訴權ハ妨害ヲ止マシメ又ハ賠償ヲ得ルヲ以テ其目的トス

第二百一條　新工告發訴權ハ占有ノ妨害ト爲ル可キ隣地ノ新工事ヲ廢止セシメ又ハ變更セシムル爲メ不動產ノ占有者ニ屬ス

第二百二條　急害告發訴權ハ或ハ建物、樹木其他ノ物ノ傾倒ニ因リ或ハ土手、水溜、水樋ノ破潰ニ因リ或ハ火、燃燒物、爆發物ノ必要ノ豫防ヲ爲サヽル使用ニ因リテ隣地ヨリ生スル損害ヲ懼ル可キ至當ノ事由アル不動產ノ占有者ニ屬ス

此訴權ハ右危險ニ對スル豫防ノ處分ヲ命令セシメ又ハ未定ノ損害ニ對スル賠償ノ保證人ヲ立テシムルヲ以テ其目的トス

第二百三條　保持訴權及ヒ新工告發訴權ハ平穩且公然ナル法定ノ占有者ノミニ屬ス但不動產又ハ包括動產ニ付テハ其占有ノ滿一ヶ年以來繼續シタルコトヲ要ス

第二百四條　回收訴權ハ暴行、脅迫又ハ詐術ヲ以テ不動產若クハ包括動產若クハ特定動產ノ全部又ハ一分ノ占有ヲ奪ハレタル占有者ニ屬ス但其占有カ被告ニ對シ此等ノ瑕疵ノ一ヲモ帶ヒサルヿヲ要ス

此訴權ハ侵奪ノ占有ヲ特定權原ニテ承繼シタル者ニ對シテ之ヲ行フコトヲ得ス但其者カ侵奪ノ不法ノ所以ニ關與シタルトキハ此限ニ在ラス

第二百五條　回收訴權及ヒ急害告發訴權ハ法定ノ占有者及ヒ容假ノ占有者ニ屬ス縱令其占有カ未タ一ヶ年ニ滿タサルモ亦同シ

第二百六條　保持及ヒ回收ノ訴ハ妨害又ハ侵奪ヲ受ケタルヨリ一ヶ年內ニ非サレハ之ヲ受理セス新工告發ノ訴ハ其工事ノ竣成セサル間ハ之ヲ受理ス但其工事ニ付キ占有者カ妨害ヲ受ケタルトキハ其工事竣成ノ前後ニ拘ハラス妨害ヨリ一ヶ年內ニ於テ保持訴權ノミヲ行フコトヲ得

急害告發ノ訴ハ危險ノ存スル間ハ之ヲ受理ス

第二百七條　占有ノ訴ハ本權ノ訴ト併行スルコトヲ得ス

判事ハ當事者ノ權利ノ基本ヨリ出テタル理由ニシテ其權利ヲ豫決ス可キモノニ基キテ占有ノ訴ヲ裁判スルコトヲ得ス

又判事ハ本權ノ訴カ既ニ審理中ニ在ルモ占有ノ訴ノ判決ヲ猶豫スルコトヲ得ス

第二百八條　占有ノ訴ヲ起シタル後當事者ノ一方カ其裁判所又ハ他ノ裁判所ニ本權ノ訴ヲ起シタルトキハ占有ノ訴ノ確定判決ニ至ル

セテ本權ノ訴ノ訴訟手續ヲ中止スルコトヲ要ス

本權ノ訴ノ被告カ第二百十條ニ定メタル如ク其訴訟中ニ占有ノ訴ノ原告ト爲リタルトキモ亦同シ

第二百九條　本權ノ訴ノ原告ハ訴ヲ取下クルト雖モ其訴以前ノ事實ノ爲メニ更ニ占有ノ訴ヲ起スヿヲ得ス然レトモ既ニ起シタル占有ノ訴ニ付テハ原告タルト被告タルトヲ問ハス之ヲ繼續スルヿヲ得

本權ノ訴ニ於テ確定ニ敗訴シタル者ハ占有ノ訴ヲ起スコトヲ得ス

第二百十條　本權又ハ占有ノ訴ノ被告ハ其訴訟中反訴ニテ占有ノ訴ノ原告ト爲ルコトヲ得

第二百十一條　判事ハ占有ノ訴ヲ正當ナリト認ムルトキハ場合ニ從ヒ妨害ノ絶止、侵奪物ノ返還、新工事ノ廢止若クハ變更又ハ急害ノ豫防處分ヲ命令ス可シ若シ損害アラハ同時ニ其賠償ヲ言渡ス可シ

又判事ハ急害告發ノ訴ニ付テハ其將來未定ノ損害額ヲ斷定シ之ニ對スル保證人ヲ立ツ可キコトヲ被告ニ命令スルコトヲ得

第二百十二條　占有ノ訴ニ於テ敗訴シタル原告ハ仍ホ本權ノ訴ヲ起スコトヲ得

占有ノ訴ニ於テ敗訴シタル被告モ亦仍ホ本權ノ訴ヲ起スコトヲ得

但既ニ受ケタル言渡ヲ履行セシ後ニ限ル若シ言渡ノ金額カ未定ナルトキハ其言渡ヲ履行スルニ相應ナル金額ヲ裁判所書記課ニ供託ス可シ

第四節　占有ノ喪失

第二百十三條　占有ハ左ノ諸件ニ因リテ喪失ス

第一　自己又ハ他人ノ爲メニ占有スル意思ノ絶止

第二　物ノ所持又ハ權利ノ行使ノ任意ノ拋棄又ハ法律上强要セラレタル拋棄

第三　不法ト否トヲ問ハス他人ノ占有ノ握取但其占有カ保持訴權又ハ回收訴權ノ行使ヲ受クルコト無クシテ一个年ヨリ長ク繼續シタルトキニ限ル

第四　占有ノ目的タル物ノ全部ノ毀滅又ハ其權利ノ消滅

第五章　地役

總則

第二百十四條　地役トハ或ル不動產ノ便益ノ爲メ他ノ所有者ニ屬スル不動產ノ上ニ設ケタル負擔ヲ謂フ

地役ハ法律又ハ人爲ヲ以テ之ヲ設定ス

第一節　法律ヲ以テ設定シタル地役

第一款　隣地ノ立入又ハ通行ノ權利

第二百十五條　凡ソ所有者ハ土地ノ分界ニ於テ又ハ自己ノ土地ニ工事ヲ爲シ得ル餘地ナキ距離ニ於テ墻壁若クハ建物ヲ築造シ又ハ修繕スル爲メ隣地ニ立入ルヲ求ムルコトヲ得

第二百十六條　築造又ハ修繕ノ工事ハ收穫ヲ害ス可キ季節ニ於テモ隣地ノ所有者又ハ占有者ノ一時不在ノ場合ニ於テモ之ヲ爲スコトヲ得ス但急要又ハ極メテ必要ノ場合ハ此限ニ在ラス

如何ナル場合ニ於テモ隣人ノ承諾アルニ非サレハ右工事ノ爲メ其住家ニ立入ルコトヲ得ス縱令其修繕ヲ要スル建物カ隣人ノ住家ニ連接スルモ亦同シ

第二百十七條　立入ヲ許諾セル隣人ハ工事ノ性質及ヒ時期ヲ酌量シテ其受ケタル妨害ニ相應スル償金ヲ求ムルコトヲ得

第二百十八條　或ル土地カ他ノ土地ニ圍繞セラレテ袋地ト爲リ公路ニ通スル能ハサルトキハ圍繞地ハ公路ニ至ル通路ヲ其袋地ニ供スルコトヲ要ス但下ニ記載シタル如ク二樣ノ償金ヲ拂ハシムルコトヲ得

土地カ堀割若クハ河海ニ由ルニ非サレハ他ニ通スル能ハサルトキ又ハ崖岸アリテ公路ト著シキ高低ヲ爲ストキハ之ヲ袋地ト看做スコトヲ得

第二百十九條　袋地ノ利用又ハ其住居人ノ需用ノ爲メ定期又ハ不斷ニ車輛ヲ用ユルコトヲ要スルトキハ通路ノ幅ハ其用ニ相應スルコトヲ要ス

通行ノ必要又ハ其方法及ヒ條件ニ付キ當事者ノ議協ハサルトキハ裁判所ハ成ル可ク袋地ノ需用及ヒ通行ノ便利ト承役地ノ損害トヲ斟酌スルコトヲ要ス

第二百二十條　通路ノ開設及ヒ保持ノ工事ハ袋地ノ負擔ニ屬ス

承役地ノ建物又ハ樹木ヲ取除キ又ハ變更セシムルノ必要アルトキハ一回限ノ償金ヲ其所有者ニ辨償ス

此他承役地ノ使用又ハ耕作ヲ減シ及ヒ永ク其地ノ價格ヲ減スルニ付テノ償金ハ每年之ヲ辨償ス

第二百二十一條　袋地タルコトノ止ミタルトキハ通行ノ權利及ヒ每年ノ償金ノ義務ハ從ヒテ消滅ス

要役地ノ所有者ハ未タ拂期限ノ至ラサル償金ノ六个月分ヲ拂ヒテ

常ニ通行ノ權利ヲ拋棄シ及ヒ之ニ對スル義務ヲ免カルヽコトヲ得

第二百二十二條　當事者ハ通行ヨリ生スル永久ノ損害ノ賠償又ハ毎年ノ償金ノ買戻ヲ隨意ニ元本ニ定ムルコトヲ得

孰レノ場合ニ於テモ袋地ノ止ミシトキハ右元本ハ之ヲ全ク返還スルモノトス但反對ノ合意アルトキハ此限ニ在ラス

第二百二十三條　土地ノ一分ノ讓渡又ハ共有者間ノ分割ニ因リテ袋地ノ生シタルトキハ讓渡人又ハ分割者ハ償金ヲ受クルコト無クシテ通路ヲ供スルノ義務ヲ負擔ス此義務ハ公路ノ創設ニ因リテ袋地タルコトノ止ミシトキハ消滅ス

第二款　水ノ疏通、使用及ヒ引入

第二百二十四條　低地ノ所有者ハ人工ニ由ラスシテ自然ニ高地ヨリ流下スル雨水及ヒ泉水ヲ承クル義務アリ

人工ヲ以テ水ノ疏通路ヲ創設シ又ハ變更セシト雖モ其工事カ三十个年前ニ在ルカ又ハ年月ヲ知ル可カラサルトキハ亦同シ

第二百二十五條　土手其他水ヲ湛フル工作物ノ破潰ニ因リ又ハ水樋、堰閘ノ阻塞ニ因リ高地ノ水量ヲ增シテ衝激ヲ致シ又ハ方向ヲ變セントスルトキハ低地ノ所有者ハ第二百二條及ヒ第二百十一條ニ從ヒテ急害ノ告發ヲ爲シ且高地ノ所有者ノ費用ヲ以テ其修繕ヲ爲スコトヲ得

事變ニ因リ低地ニ於テ水流ノ阻塞シタルトキハ高地ノ所有者ハ平常ノ疏通ニ復スル爲メ自費ヲ以テ必要ノ工事ヲ爲ス權利ヲ有ス然レトモ其義務ヲ負擔セス

第二百二十六條　所有者ハ雨水ノ直チニ隣地ニ落ツル如キ屋根其他ノ工作物ヲ設クルコトヲ得ス

第二百二十七條　泉源ノ所有者ハ隨意ニ之ヲ使用シ且自然ニ隣地ニ流ル可キ餘水ヲ隣人ニ與ヘサルコトヲ得但次條及ヒ第二百七十六條ノ規定其他鑛泉ノ利用、收益ニ關スル行政法ノ規定ヲ妨ケス

第二百二十八條　泉源ノ水カ一町村又ハ一部落ノ住民ノ家用ニ必要ナルトキハ所有者ハ其水ノ不用ノ部分ヲ流下セシムル責ニ任ス

又町村ハ自費ヲ以テ水ノ聚合及ヒ引入ニ必要ナル工事ヲ泉源ノ土地ニ施スコトヲ得但其工事ノ爲メ償金ヲ拂ヒ且其土地ニ永久ノ損害ヲ生セシメサルコトヲ要ス

此他町村ハ水ノ使用ノ爲メ償金ヲ拂フコトヲ要ス但三十个年間無償ニテ使用ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス

第二百二十九條　溝渠、水流、堀割又ハ池沼ノ沿岸者ニシテ其床地ヲ所有スル者ハ家用及ヒ農工業用ニ其水ヲ使用スルコトヲ得然レトモ其水路及ヒ幅員ヲ變スルコトヲ得ス

同上ノ流水ノ通過スル土地ノ所有者ハ右ト同一ノ需用ノ爲メ其地内ニ於テ水路ヲ變轉スルコトヲ得然レトモ其水ノ出口ニ於テハ之ヲ自然ノ水路ニ復スルコトヲ要ス

右孰レノ場合ニ於テモ沿岸者ハ地方ノ規則ニ從ヒテ捕漁ノ權利ヲ有ス

沿岸者ハ對岸者ニ損害ヲ及ホス可キトキハ己レノ方ニ於テ水除ヲ築クコトヲ得ス

第二百三十條　前條ニ定メタル二箇ノ場合ニ於テ其水ヲ利用ス可キ沿岸者又ハ低地ノ所有者ヨリ爭ヲ起シタルトキハ裁判所ハ地方ノ慣習ト衛生ノ需用ト農工業ノ利益トヲ斟酌シテ之ヲ決ス

第二百三十一條　右流水ニ關スル取締ハ地方廳ニ屬ス地方廳ハ其流水ノ疏通、保持及ヒ魚類ノ保育ニ付キ必要ノ處分ヲ令スルヿヲ得

第二百三十二條　一般又ハ一地方ノ公有又ハ私有ニ屬スル水ノ使用及ヒ取締ハ行政法ヲ以テ之ヲ規定ス

第二百三十三條　自己ノ土地外ニ在ル天然又ハ人工ノ水ヲ用ユル權利ヲ有スル所有者ハ家用又ハ農工業用ノ爲メ償金ヲ拂ヒ其水ノ通過ヲ中間ノ土地ニ要求スルコトヲ得

第二百三十四條　低地ノ所有者ハ浸水地ヲ乾カスニ因リ出水ノ疏通ノ爲メ及ヒ家用又ハ農工業用ノ餘水ノ排泄ノ爲メ公路、公流又ハ下水道ニ至ルマテ其通路ヲ供スル責ニ任ス

家用又ハ農工業用ノ爲メニ變質シタル水ノ通過ハ地下ニ於ケルニ非サレハ之ヲ要求スルコトヲ得ス

第二百三十五條　水ノ通路ハ成ル可ク承役地ノ損害少ナキ場所ニ之ヲ設クルコトヲ要ス

如何ナル場合ニ於テモ建物ノ下ヲ經又ハ住家ニ連接シタル庭園ヲ經テ水ノ通過ヲ要求スルコトヲ得ス

第二百三十六條　水ノ通路ニ必要ナル工作物ノ築造及ヒ保持ハ其工作物ニ付キ利益ヲ得ル所有者ノ費用ニテ之ヲ爲ス

第二百三十七條　承役地ノ所有者ハ其土地ニ存スル堀割ヲ要役地ニ出入スル水ノ全部又ハ一分ノ通路ニ供スルコトヲ要求スルヲ得但從來其堀割ヲ通過スル水カ要役地ニ供シタル水ヲ變スルノ性質ナ

ヲサルトキニ限ル

又承役地ノ所有者ハ其土地ニ要役地ノ所有者ノ爲シタル工作物ヲ右ト同一ノ條件ニ從ヒテ水ノ通過ノ爲メ使用セシメ請求スルコトヲ得

右孰レノ場合ニ於テモ他人ノ爲シタル工作物ヲ使用スル者ハ自己ノ利益ノ割合ニ應シテ其築造及ヒ保持ノ費用ヲ分擔ス

第二百三十八條　第二百二十九條第一項ニ從ヒ流水ヲ使用スル權利ヲ有スル所有者ハ堰ヲ設ケテ水ヲ高ムルノ要用アルトキハ償金ヲ拂ヒテ其堰ヲ對岸ニ支持セシムルコトヲ得

同一ノ權利ヲ有スル對岸地ノ所有者ハ前條ニ記載シタル如ク費用ヲ分擔シテ右ノ堰ヲ使用スルコトヲ得

第三款　經界

第二百三十九條　凡ソ相隣者ハ地方ノ慣習ニ從ヒ樹石杭杙ノ如キ標示物ヲ以テ其連接シタル所有地ノ界限ヲ定メント互ニ强要スルコトヲ得

第二百四十條　經界訴權ハ建物ニ付キ及ヒ土塀、垣柵等ノ圍障アル土地ニ付テハ行ハレス公路又ハ公流ニテ隔テタル土地ニ付テモ亦

間シ

第二百四十一條　經界訴權ハ協議上又ハ裁判上ニテ界限ノ定マラサル間ハ時効ニ罹ルコト無シ

經界ノ訴ニ付キ被告カ原告ノ土地ノ全部又ハ一分ニ對シ取得時効又ハ一个年以上ノ占有ヲ申立ツルトキハ原告ハ先ツ回復又ハ回收ノ訴ヲ爲スコトヲ要ス

第二百四十二條　經界ハ界限ノ確定セサルトキ又ハ爭論アルトキハ所有權ノ證書ニ記載シタル坪數及ヒ界限ニ從ヒテ之ヲ爲ス其證書ナキトキハ之ニ代フルニ足ル他ノ證據又ハ書類ニ依リテ之ヲ爲ス

所有權ニ付キ爭論アルトキハ先ツ其裁判ヲ受クルコトヲ要ス

第二百四十三條　當事者カ協議ヲ以テ界限ヲ定メタルトキハ其證書ヲ作ルヿヲ要ス此證書ハ坪數及ヒ界限ニ付キ確定權原ノ効ヲ有ス

當事者ノ議協ハサルトキハ判決ヲ以テ坪數及ヒ界限ヲ定メ其判決書ニ圖面ヲ添フ此圖面ニハ界標ヲ指示シ且各界標ノ距離及ヒ其近傍ノ移動ナキ目標ト各界標トノ距離ヲ記載ス

第二百四十四條　測石杭杙ノ代價其設置ノ費用及ヒ證書並ニ訴訟費用ハ相隣者平分シテ之ヲ負擔ス然レトモ判決ニ因リテ不當ト爲リ

タル爭論ノミニ關スル訴訟費用ハ敗訴者之ヲ負擔ス

測量費用ハ當事者其土地ノ廣狹ニ應シテ之ヲ分擔ス

第四款　圍障

第二百四十五條　凡ソ所有者ハ適宜ノ材料ヲ用ヰ適宜ノ高サニ於テ自己ノ不動產ニ圍障ヲ設クルコトヲ得但其不動產カ法律又ハ人爲ニテ隣人ノ立入又ハ通行ノ地役ニ服スルトキハ其地役ヲ行フ權能ヲ妨クルコトヲ得ス

第二百四十六條　二個ノ住家又ハ農工業用建物ノ間ニ在ル中庭又ハ園圃ノ土地カ各個ノ所有者ニ分屬スルトキハ各自其隣人ニ分界圍障ノ分擔ヲ强要スルコトヲ得

當事者ノ議協ハサルトキハ其圍障ハ板屏又ハ竹垣ノ類ニ非サレハ之ヲ要求スルコトヲ得ス

其高サハ分界線ノ平面ヨリ少ナクトモ六尺タル可シ

第二百四十七條　圍障ノ設置、保持及ヒ修繕ノ費用ハ相隣者平分シテ之ヲ負擔ス

相隣者ノ一人ハ前條ニ定メタル材料ヨリ良好ナル他ノ材料ヲ用ヰ又ハ高サヲ增シテ圍障ヲ築造スルコトヲ得但築造費用ノ差額ヲ拂

ヒ且保持及ヒ修繕ノ費用ノ全額ヲ負擔ス

第二百四十八條　相隣者ノ一人カ他ノ一人ヲ圍障分擔ノ遲滯ニ付セシテ之ヲ築造シ又ハ修繕シタルトキハ其人ニ對シテ費用ノ分擔ヲ要求スルコトヲ得ス

第五款　互有

第二百四十九條　前款ニ定メタル義務ニ因リ又ハ任意且協議ニ因リ共擔ノ費用ヲ以テ土地ノ分界線上ニ築造シタル圍障ハ其性質ノ如何ヲ問ハス敷地ト共ニ相隣者ノ互有ニ屬ス

性質ノ如何ヲ問ハス相隣者ノ建物ノ隔壁及ヒ溝渠、生籬、柴垣ニシテ共擔ノ費用ヲ以テ土地ノ分界線上ニ設ケタルモノモ亦同シ

第二百五十條　凡ソ土地ノ圍障又ハ建物ノ隔壁ニシテ分界線上ニ在ルモノハ其性質ノ如何ヲ問ハス共擔ノ費用ヲ以テ設ケタルモノトシテ之ヲ互有ト推定ス但或ハ證書ニ因リ或ハ證人ニ因リ或ハ三十个年ノ時效ニ因リ或ハ下ニ示シタル非互有ノ目標ニ因リテ反對ノ證據アルトキハ此限ニ在ラス

第二百五十一條　相隣者ノ一人ノ專屬權ヲ定ムル直接ノ證據又ハ時効ノ存セサルトキハ非互有ヲ推定ス可キ目標トナル可キモノハ左

ノ如シ

第一　土造、石造、練瓦造ノ牆壁ニ付テハ屋根ノ傾斜面又ハ小窓脇孔其他ノ工作物又ハ粧飾物カ一方ノミニ存スルコト

第二　板屏竹垣ニ付テハ其支柱カ一方ノミニ存スルコト

第三　溝渠ニ付テハ堀渫ノ泥土カ一方ノミニ存スルコト

第四　生籬柴垣ニ付テハ一方ノ土地ノミ四面ヲ圍マレタルコト

此四箇ノ場合ニ於テ專屬權ハ右目標ノ存スル一方又ハ土地ノ全ク圍マレタル一方ノ相隣者ニ屬ス

第二百五十二條　高サノ不同ナル二箇ノ建物ヲ隔ツル牆壁ニ付テハ其牆壁カ低キ建物ヲ踰ユル部分ニハ推定ヲ適用セス

又牆壁カ一箇ノ建物ノミヲ支持スルトキハ右ノ推定ハ如何ナル部分ニモ之ヲ適用セス

第二百五十三條　二箇ノ土地ヲ分界スル一箇ノ圍障其他ノ工作物ニ互有ノ目標ト非互有ノ目標トノ併存スルトキハ裁判所ハ事情ニ從テ其所有權ノ共通ナルカ專屬ナルカヲ査定ス

第二百五十四條　互有界ノ保持及ヒ修繕ハ互有者平分シテ之ヲ負擔ス但其一人ノ所爲ヨリ毀損ノ生シタルトキハ此限ニ在ラス

然レトモ第二百四十六條ニ定メタル義務上ノ圍障ニ非サルトキハ互有者ノ各自ハ互有權ヲ抛棄シテ保持及ヒ修繕ノ負擔ヲ免カルルコトヲ得但自己ノ建物ヲ支持スル牆壁ノ保持及ヒ修繕ニ關スルトキ又ハ自己ノ所爲ニ因リテ必要ト爲リタル修繕ノ費用ヲ拂フ可キトキハ此限ニ在ラス

第二百五十五條　相隣者ハ互有界ヲ其性質及ヒ用方ニ從ヒテ使用スルコトヲ得但其堅牢ヲ傷ハサルコトヲ要ス

相隣者ハ互有ノ牆壁ニ其厚サ四分ノ三ニ至ルマテ梁棟ヲ穿入シテ建物ヲ支持シ又ハ之ニ煖爐ヲ嵌入シ若クハ烟突、水管、瓦斯管其他家用、工業用ノ爲メ筒管ヲ通スルコトヲ得但其牆壁ノ性質及ヒ厚サカ此ニ耐フルトキニ限ル然レトモ互有者ハ其牆壁ニ孔ヲ鑿ツ又室内用ノ爲メ些少ノ凹穴ヲモ鑿ツコトヲ得ス

互有者ハ互有ノ牆壁ノ高サヲ增スコトヲ得但其牆壁ノ堅牢此ニ耐フルトキ又ハ自費ニテ工事ヲ加ヘ若クハ改築ヲ爲シテ堅牢ナラシムルトキニ限ル此場合ニ於テ其高サヲ增シタル部分ハ互有ニ非ス

互有者ハ互有ノ溝渠ニ雨水又ハ家用工業用ノ水ヲ注下スルコトヲ得

互有者ハ互有ノ生籬ヲ剪伐シタル樹枝ヲ平分シ又其生籬ニ存スル高木ノ伐除ヲ要求スルコトヲ得

第二百五十六條　相隣者ノ一人カ石又ハ煉瓦ニテ土地ノ圍障又ハ建物ノ牆壁ヲ分界線ニ接シ又ハ此ヨリ一尺ニ滿タサル距離ニ於テ築造シタルトキハ他ノ一人ハ現時ノ相場ニテ材料代及ヒ手間賃ノ半額ヲ償ヒテ常ニ其互有權ノ讓渡ヲ要求スルコトヲ得前條第三項ニ從ヒテ增築シタル牆壁ニ付テモ亦同シ

互有權ノ讓渡ヲ要求スル相隣者ハ圍障壁牆ノ敷地及ヒ之ト分界線トノ間ノ地面ニ付キ地上權ノミヲ要求スルコトヲ得此地上權ニ付テハ鑑定人ノ評定シタル定期ノ納額ヲ建物ノ存立間拂フ責ニ任ス

本條ニ依リ牆壁ノ互有權ヲ取得シタル者ハ前條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ使用スルコトヲ得然レトモ人爲上ノ觀望ノ地役トシテ其牆壁ニ設ケタル隙孔ヲ塞カシムルコトヲ得ス

石造、煉瓦造ニ非サル圍障、隔壁及ヒ籬柵溝渠土手ニ付テハ其擔ノ費用ヲ以テセル設定又ハ協議上ノ讓渡ニ因ルニ非サレハ互有權ヲ生セス

第二百五十七條　所有者ハ石造煉瓦造ニ非サル建物ヲ築造スルトキハ其建物ト土地ノ分界線トノ間ニハ其地方ノ慣習ニテ定マリタル尺度ノ距離ヲ存スルコトヲ要ス

此距離ヲ存セスシテ築造スルトキハ一方ノ相隣者ハ築造ノ間ハ第二百一條ニ從ヒテ新工告發ノ占有訴權ヲ行フコトヲ得

右築造竣成ノ後一方ノ相隣者カ建物ヲ築造セントシ其工事ノ爲メ自己ノ地上ニ於テ分界線ヨリ慣習ノ尺度ヲ超ユル距離ヲ要スルニ因リ建物ヲ其尺度外ニ退ケタルトキハ其餘分ニ退ケタル地面ニ應シ前築造者ニ對シテ償金ヲ要求スルコトヲ得

第六款　他人ノ所有地ニ對スル觀望及ヒ明取窓

第二百五十八條　二箇ノ土地ノ分界線ヨリ少ナクトモ三尺ノ距離アルニ非サレハ建物ニ窓又ハ縁側ヲ設ケテ他人ノ所有地ヲ直線ニ觀望スルコトヲ得ス

此距離ハ窓又ハ縁側ノ突出シタル部分ヨリ直角線ニテ分界線ニ至ルマテヲ測算ス

第二百五十九條　右距離ノ制限ヲ遵守スルニ不便ナルトキハ目隱ヲ以テ窓ヲ蔽フコトヲ要ス但其目隱ハ分界線上ニ突出スルコトヲ得ス

目隠ヲ設クル能ハサルトキハ明取窓ニ非サレハ之ヲ設クルコトヲ得ス此明取窓ハ其下部ヨリ床板マテ少ナクトモ六尺ト爲シ格子ヲ附著シ其格子目ハ一寸以内タルコトヲ要ス

此場合ニ於テ尙ホ隣地ノ所有者ハ目隠カ一尺以上分界線ヲ踰ユルヲ許シテ之ヲ設ケシムルコトヲ得

第二百六十條　觀望又ハ明取窓ニ關スル前二條ノ規定ハ建物ト對向スル隣地ノ建物ニ孔ナキトキハ之ヲ適用セス

第七款　或ル工作物ニ要スル距離

第二百六十一條　自己ノ土地ニ井戸、用水溜、下水溜又ハ糞尿坑ヲ穿タントスル所有者ハ分界線ヨリ少ナクトモ六尺ノ距離ヲ存スルコトヲ要ス但土砂ノ崩壞又ハ水液ノ滲漏ヲ防クニ必要ナル工事ヲ爲ス可シ

乾燥シテ覆蓋アル地窖ニ付テハ右距離ヲ三尺ニ減ス

水路ニ供シタル石樋又ハ溝渠ニ付テハ右距離ハ少ナクトモ其深サノ半ニ同シキコトヲ要ス然レトモ三尺ヲ踰ユルコトヲ要セス

右溝渠ハ分界線ノ方ノ崖ヲ斜ニ削下シ又ハ石垣若クハ木柵ヲ以テ之ヲ支持ス可シ

第二百六十二條　高サ三間ニ踰ユル竹木ハ分界線ヨリ六尺ニ滿タサル距離内ニ之ヲ栽植シ又ハ保持スルコトヲ得ス

高サ三間ニ滿タス一間ニ踰ユル竹木ニ付テハ二尺ノ距離ヲ存スルコトヲ要ス

此他矮小ノ竹木ハ直チニ之ヲ分界線ニ接著セシムルコトヲ得

右孰レノ場合ニ於テモ相隣者ハ竹木ノ所有者ニ對シ分界線ヲ踰エタル枝ノ剪除ヲ要求スルコトヲ得又自己ノ土地ヲ侵セル根ヲ自ラ截去スルコトヲ得

前條及ヒ本條ノ規定ハ二箇ノ土地ノ分界カ互有ナルトキト雖モ之ヲ適用ス

第二百六十三條　右ニ異ナリタル慣習アルトキハ前二條ノ規定ニ依ラスシテ其慣習ヲ遵守ス

第二百六十四條　危險ヲ含ミ衛生ヲ害シ又ハ不都合ヲ生スル營業ニ付キ近隣ノ利益ノ爲メニ要スル條件ハ行政法ヲ以テ之ヲ規定ス

前諸款ニ共通ナル規則

第二百六十五條　本節ノ規定ハ國、府縣、市町村ノ私有及ヒ公有ノ財産ニ付キ働方及ヒ受方ニ付テ之ヲ適用ス